
銀朱の幻想郷

オレンジ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銀朱の幻想郷

【Nコード】

N1695X

【作者名】

オレンジ

【あらすじ】

半年前に我知らず異変を起こしてしまったヒモ野郎が、贖罪の為であったり、そうでなかったりしながら、幻想郷で過ごすそんなお話

第1話 パ・フェクト・ジゴロ（前書き）

この作品は東方Projectの二次創作です。

内容はオリ主の幻想入りもので、最強系ではありません。以上の要素が苦手な方はブラウザをバックすることをお勧めします。

また、本作は既に異変が起きた事を前提に書いてあります。違和感を感じる部分が多々あるかと思いますが、ご了承下さい。

第1話 パ・フェクト・ジゴロ

「ふうっ、やっと着いたあ……」

空からは暑過ぎず寒過ぎない適度な太陽光。姿こそ見えないものの
の楽しげに囀る鳥たちの声。

そんな春の陽気が中空にこれでもかと漂う中、無粋な疲れきった
声もまたその場の空気に混じる。

が、それもまた一瞬。空気の振動が止めば、そこには何処にでも
いそうな野郎が残るだけ。

まあ、俺のことなんだけれども……。

「やっぱり飛んでくれば良かったか？ でもなあ……」

妙に人間は歩きなくなる時があるのだ。

俯瞰からの風景も良いが、時には地に足を着けて景色を眺めるの
も良い。何より、樂することに慣れ過ぎるのはよろしくない。

結局、その判断に現状では後悔しているわけだが……。

「さてさて、こいつはどうしたもんか……」

自然と俯いていた視線を強引に上げる。

水平へと修正が加えられた視線の先には階段があった。コンクリ
ートなんて近代的な物ではなく、立派な石造りである。

その割には碌に手入れがされていないのか雑草共がそこかしこに
乱舞しているわけだが、問題はそこではない。

長い。その先にある目的地を考えれば分からなくもないが、今の
俺には些か辛いものがある。

朝に妖怪の山を歩いて出発し、わざわざ正反対の中有の道を経由

して昼過ぎに到着したのだから、仕方ないものだと思いたい。
つまり、俺の体力的にこの階段を歩いて登るのは困難、いや、不可能なのである。

「仕方ない、仕方ない」

そう呟きながら、俺は我が身を重力から解放する。何か格好良い事を言っている風だが、つまりは飛んでいるだけだ。

いや、だけって言うのもかなりアレだ。普通の人間は空なんて飛べないのであるし。

でも、ここではそれが当たり前なのだ。

人が空を飛んでいようと、何か変な能力を持っていようと、霊力や妖力を凝縮して弾幕にしようが、それをお遊びにしていようと当たり前。

それがここの日常風景。非現実こそが現実な場所。

「ここは幻想郷なんだから仕方ない」

まあ、普通の人間からすこーしだけ足を踏み外してしまった俺からしたら今更の事である。

色々詳しい事情は説明されたが、ぶっちゃけあまり理解していない。大体の事が何でもあり、それさえ理解していれば問題は無いのだ。

仕方ない、仕方ないと言い訳の様に呟きながら、俺は石段の先にある目的地、博麗神社を目指すのだった。

#

階段を登り切るのに一分もかからなかった。

何と言うか、飛ぶことを覚えてしまふと歩くのが阿呆らしく思えてしまふから困る。便利過ぎると人は墮落してしまふのだと改めて思い知る。

墮落を極め切った者がやや多いここ幻想郷。このままでは危ういのではとも思ったが、本気で心配するような輩はいないだろうと勝手に確信し、勝手に安堵する。

まあ、本当に危うい状況になれば何処そのスキマ妖怪が何とかするのだろう。あの女の奇怪さはともかく、幻想郷を愛しているのは本当だろうし。

また、便利になるということは、それ相応の技術の発展があつてこそその事である。

技術の発展を進めるところか、積極的に排除しようとする風潮のある幻想郷では、これ以上の墮落はおそらく無いだろう。

いやまあ、個人が空を飛べるっただけで大概だと思っただけども。

「この神社は、相変わらずだな……」

つらつらと益体のない事を考えながらも、俺の生涯二度目の博麗神社訪問となった。

一度目は俺が幻想郷に流れ着いてすぐの時。外の世界に帰るか否か迷っていた時だった。

結局、幻想郷に留まることになったのだが、その時に見た神社の風景と今見た風景に違いはほとんど見られない。

相変わらず参拝客の姿は見られず、境内もあまり手入れが行き届いている感じはない。酒瓶がそこら辺に転がっているのは、神社的にはセーフなのだろうか？

山の上の神社とは比べるまでもない格差に、部外者であるはずの

俺が心配で堪らない。

「おーい、巫女さんいるかー？」

そんな寂れた印象を懐かせながらも、神社特有の静謐さを失わな
いのは、巫女のおかげか。はたまた絶賛行方不明中らしい祭神の絶
えぬ威光か。

後者だろうなあ、と漠然とした確信を抱きながら、散った桜の花
びらを踏み踏み、巫女がいないか声をかけてみる。

返事が返ってくる様子はない。留守かとも思うが、何となくそれ
はないだろうと思い、勝手に神社の散策を始めてみる。

「いるじゃないか……」

「ん？ どちらさんかしら？」

さて、何処から探したものかと考えていたら、ものの数十秒で見
付けてしまった。いや、それで問題無いのだけでも。

問題は件の巫女、博麗霊夢のいる場所だ。何で縁側でのんびりと
お茶飲んでるんだ。いるなら返事ぐらいして欲しい。

当の本人は俺の不満顔を分かって無視しているのか、こちらの素
性を聞いてきた。

まあ、そんなに顔を合わせたわけでもないから仕方ないのだけ
れど、こっちが一方的に知っているのも気まずいものだ。

彼女との邂逅は今までに二度。一度目は初めて神社を訪れた時。
そして二度目は、

「やあ、巫女さん。異変で俺をボコってくれた時以来だな」

「は？ 異変？ うーん、異変って言われても沢山あるし……。」「
めんなさい、あなたの事ちよっと思いいせないわ」

「あ、さいですか……」

幻想郷では結構な頻度で何かしらの異変が起こるそうだが、それならば半年前に起こった異変の首謀者の顔を忘れていても仕方ないのだ。きつとそうであると、俺は信じたい。

俺が無意識的に起こしてしまっていた小規模ながらも非常に質の悪い異変。

そこで俺は異変解決人として現れた目の前の巫女、博麗霊夢に調伏された。本当に唐突に何の説明も無しに、完膚なきにまでである。彼女の中の俺は大衆の内の一でしかないのだろうが、俺からすれば彼女は大衆の中で明らかに浮いている一という認識だ。

つまり、忘れようにも忘れられない存在なのだ。

「半年前の異変ねえ。何か思い出せそうな気はするんだけど……」

「出来れば何でもいいから思い出して欲しいんだけど……」

「あつ、思い出した。紫から聞いたあんたの名前」

「おおつ、それはありがたい。間違えずに言ってくれば尚良しだ」

「確かそう、砂子すなごだったかしら？」

「漢字は合ってる。うん、想定内だ。俺の名前はあまたつしざい天辰砂子、改めてよろしく」

名前を間違えられるというのは人にとっては不愉快なのかもしれないが、俺の場合は茶飯事である為、心に波風一つ立たない。

大抵の人は巫女と同じ間違えをするし、彼女が名前を間違っていたとはいえ、言葉にしてくれたのは嬉しかった。

「ん、よろしく。博麗霊夢よ。それにしても、面倒な名前ね。すなごでいいんじゃないの？」

「こればかりは俺にはどうしようもないし、出来れば今の名前を採用したいと思ってる」

「ふーん」

俺の名前の文句なら両親に言ってもらいたいものだが、如何せん二度と会うことはないので致し方無い。

あと、今の名前も存外に気に入ってるのだ。すなこじゃあ女の名前みたいだしな。

「それで？ その異変を起こした砂子さんは私に何の用なのかしら？ もしかして、その時の復讐にでも来たの？」

「いや、むしろ逆。前の異変で君に迷惑をかけてしまった事への謝罪に来た」

「……は？」

余程、俺の言葉が予想外だったのか、巫女はぼかんと口を開けて驚いている。

俺にとってはある意味トラウマの対象の様な彼女だが、この瞬間だけは凜とした雰囲気崩れ、年相応の少女に見えた。

というか、復讐なんて露とも考えていない。巫女を襲うなんてそれだけで暴挙であるし、まず俺では逆立ちしたって敵う筈がないのだから。

「義理堅いっていうか、マメな人ね」

「そうかな？ でも、君が止めてくれないければ異変は大きくなるだけだったろうし、俺は自分の能力の危険性に気付くこともなかった」

「まあ、そうかもね……」

「おかげで能力の制御も出来るようになった。だから、俺はこの行いを正しいんだと思うわけ」

巫女は呆れ気味の様子だが、俺からすれば彼女は救世主。異変を彼女が止めなかった場合を考えると、この位の対応は当然だった。

「それがマメだって言うのよ……。それで、半年も顔を出さなかったのはその能力の制御とやらかしら？」

「ああ、本当はすぐにも来たかったんだけど、元凶をどうにかしないと面倒が増すだけだしな」

「でないと私はもう一度、砂子さんを退治しなければならないと」

「出来れば二度と勘弁して欲しいなあ……」

まあ、能力の制御の方は半年間の修行で何とかなつたから、その様な事態は無い、と思いたい。

修行も途中から仙人と呼ばれる人達が手伝ってくれたおかげでかなり捗った。

明らかに雑用の様な事や動物（龍の子や大鵬）との対話、拳げ句は壁抜けなんかもやらされたが、それもきつと実を結んだんだと思う。

最終的にトンネル効果を実証してしまった時は自分でも驚いたけど……。

「どうかしたの？」

「いやー、何でもない。まあ、そういう訳で俺は君に謝罪をしようと思う」

「そう。別にいいけど、手短かにね」

「ありがとう」

巫女から許可を得られたことに内心、俺はホツとした。正直、門前払いされてもおかしくなかった訳だし。

気が緩んだことで曲がった腰に喝を入れ、彼女の黒曜石めいた瞳を見据えながら、俺は謝罪の言葉を口にする。

「異変の件に関しては本当に申し訳無い事をしたと思っている。簡

単に許される事ではないと思うけど、俺なりにこれから償っていきよ……」

「許すわよ?」

「思っつて、ええ!?!」

聞き間違いかと思った。まだこれからどんどん自分の罪状を閻魔様の様に読み上げようとしたのに、あっさりと許されてしまった。

困惑顔な俺に、巫女はまたも呆れた風に言う。

「私は別に謝罪の言葉なんて欲しくないから。だから、砂子さんが許して欲しいって言っつのなら、私は許すわ」

「いや、でもだな……」

「それじゃあ自分の気が済まない、っつて顔をしてるわね。いいじゃない、私は許すっつて言っつてるんだから。」

他の連中だっつて同じだと思っつわ。その真摯な態度でお詫びのお酒でも持っつていけば、大抵の奴は許してくれる筈よ」

「本当か……?」

「私の勘というお墨付きなんだけど……。砂子さんは考え過ぎなのよ」

「むっ……」

眠たげな目でそう自信満々な事を言われても思っつたが、博麗の巫女の勘は誰もが一目置くとっつうのだから侮れない。

確かに過去に出会っつた人々は、俺の悪事など笑っつて許してくれり様な懐の深い人物ばかりだ。彼女の言っつ事にも頷ける。

しかし、だからとっつてこんなにあっさり許されてしまっつて良いものか。そんな風に俺が悩んでいりると、

「ああもっつ、男の癖にじれっつたい人ねえ! ……いいわ、こっつしましよっつ」

「え？ 何だ、何をする気だ？」

「何時までもうじうじうだうだ悩んでる人は黙ってなさい」

巫女に一喝されてしまった。

明らかに年下な少女に怒られるというのは屈辱的な事だろうに、彼女の言葉に自然と聞く姿勢になっている自分がいた。

俺が手懐けられた犬かと愕然としているのを他所に、巫女は視線を俺から庭の方へと向ける。

「ねえ、砂子さん。うちの神社の桜を見てどう思う？」

「へ、あつ、桜？ うーん、そうだな。何度か冥界の桜を見たことがあるけど、あれに劣らず綺麗で立派な桜だと思うぞ？」

「50点ね。他と比較して褒めるのはやめた方がいいわよ？ 女の前では特にね」

「あー、肝に銘じとく。それで、桜がその桜がどうしたって？」

「話を最後まで聞く癖も追加しておきなさいな。……確かにうちの神社の桜は綺麗よ。冥界の桜にも劣らず、何度見てもその思いは薄れやしないわ」

そう言っつて巫女は足元に落ちていた桜の花びらを一枚拾う。

落ちたばかりなのか汚れの少ないその花びらを、彼女は手のひらに乗せ、指でつんつんと押さえ付ける。

そんな何でも無い少女らしい所作に俺が目を奪われていると、巫女はまた語り始める。

「桜には二つの美しさがあると私は思うの。一つは咲いては散る、そんな刹那的な美しさね」

「それは確かに定番だな。じゃあ、君の思うもう一つの美しさって何なんだ？」

「分からない？」

「巫女は持っていた桜の花びらを側に置いてあつた湯呑みの中に落とし、桜の木を指差しながら言った。

「簡単な事よ。今、この桜の木を見て砂子さんが思つた事が答えよ」

言われて、俺は桜の木へと視線を移した。

その姿を見て、俺は自然と思つた。綺麗だと。ただただ美しいと。巫女の言いたい事が何となくだが、分かつた様な気がした。

「咲いている姿こそが、もう一つの美しさって事か？」

「桜は咲いてこそ華だもの。一昨日の晩も暇な連中がこの桜を肴に飲んだくれてたしね」

ああ、だから境内に酒瓶が転がっていたのかと、俺は納得した。しかし、やはりここの桜はそれだけの価値があるという証明な訳だ。巫女は花びら入りの湯呑みに、急須から新しいお茶を注ぎ、それに口をつける。長く話して喉でも渴いたのだろう。

「確かに、こんな立派な桜なら酒の肴には十分だろうなあ」

「まあね。私もさっきまで桜を見ながらお茶を飲んでたわ。風情つて大事ね」

お茶を飲む前にする事（主に掃除とか）があるんじゃないかとも思うが、その意見にはまったくもって同感だ。

春の陽気の中、お茶を片手に桜を觀賞なんて、日本人に生まれた以上は風情を感じずにはいられないだろう。

「そう、風情は大事。だから、私が桜を見てたら急にお酒が飲みたくなるのも仕方ないと思わない？」

「……ん？」

と、俺が感慨に耽っていると、唐突に話が違う方へと流れたような気がした。

聞き間違いだらうと思ひ、巫女の方を見る。彼女の視線は桜の木から再び俺の方へと移っていた。正確には、俺の右手にである。

ついでに巫女の顔も見る。眠たげな瞳は相変わらずだが、心なしか嬉々とした色が浮かんでいるように思える。

「ええと、すまない。意識が飛んで聞き取れなんだ」

「人の話はちゃんと聞けつて言つたばかりじゃない。だから、私はお酒が飲みたいって話よ」

「随分と率直だな！ 桜の件は何処にいった!？」

「何よ、ちゃんと聞いてたんじゃない。嘘を吐く人は鷲つそにでも啄ばまれてなさい。

ああ、誰かお酒を持ってて、ついでにお酌なんかしてくれる優しい人はいないかしらねー」

そう嘯きながら、巫女は俺の右手にある袋へと熱烈なアピールを送ってくる。

実は博麗神社に来る前に、俺はわざわざ中有の道を経由して、そこで幾つかの酒やつまみを買ってきていた。

それは俺が異変によって迷惑をかけてしまった人たちへの謝罪としての分であり、当然、俺の物ではない。

だから、初めから異変を解決してくれた博麗の巫女に贈る分も用意はしてきていた。それが俺の右手に持っている袋の中身である。

袋を開けるどころか話題にすら挙げていなかったのに、その中身を看破しているのはやはり巫女の勘なのだろう。

しかし、何故にいきなりそんな事を言うのかと疑問に思っていると、脳裏に先程の彼女の言葉が思い出された。

『その真摯な態度でお詫びのお酒でも持っていけば、大抵の奴は許してくれる筈よ』

もしかしないでも、彼女は俺をフォローしてくれたのだろうか？
おそらくは、何時までも日和っている俺に業を煮やして、彼女なりに場を設けてくれたのだろう。

それにしても、随分と婉曲な気がしないでもないが……。

かと言って、人の親切を無碍にするほど俺も下衆ではない。

俺は年下の少女にフォローさせてしまった事を恥ずかしく思う。
しかし、そんな彼女の心遣いをありがたくも思った。

その気持ちが消えない内に、俺は意を決して巫女に話を持ち掛けた。

「実はだな、巫女さん。俺の手元に丁度良く酒があるんだ。勘違いしないで欲しいが、ここで飲み明かそうとか思ってた訳じゃない。

その、さっきも言ったが、今回の異変は君に大変な迷惑をかけた。君は許すと言ってくれたが、俺としてはそれじゃあ示しがつかないんだ。

そこで何だが、この酒を俺の詫びの気持ちとして受け取って貰えないか？頼む！」

俺なりの真摯な姿勢を表す為に、頭を下げることも忘れない。

五秒が経って頭を上げた。元の視線の先には数秒前までと変わらない巫女の姿があった。

「仕方が無いわね。砂子さんがどうしてもって感じだから、受け取

ってあげるわ」

俺は無意識だったとはいえ、自分の起こした異変の罪を自覚している。この行いが僅かな償いでしかない事も。

だが、俺は今、許された。誰でもない、博麗の巫女その人に。長い長い俺自身の為の贖罪の第一歩だ。

傍から見ればとんだ茶番だろう。だが、俺は今、そんな茶番に感謝しかない。

「巫女さん、ありがとうな」

「何の事やら私にはさっぱりね。仮に私が砂子さんに何かしてあげたというのなら、私は言葉なんて軽いものよりはお賽銭の方が良いわ」

とても率直に礼を言ったつもりなのだが、顔に朱の色一つ差した様子もない。この巫女、芯がぶれない。

「いやいや、言葉が必ずしも軽いとは限らないぞ？」

「私からすれば空気も同然よ。でも、そうね。お腹に収まる様な物ならきつと重さも感じずにはいられないでしょうね」

「……了解だ、巫女さん。次に来る時は善処するよ」

「よろしく頼むわね。それと、こっちが名前で呼んでるんだから、私の事も霊夢でいいわ」

「そちらも了解した」

「ん。それじゃ、早速お花見を始めるとしましょうか。肴は桜、お酒は奢り。こんなに気分の良いお花見も久し振りだわ！」

そして、遠慮もしないと。本当にぶれない巫女なことだ。……山

の巫女も何時かはこうなるのだろうか？ 先の不安が絶えない。
だがまあ、巫女の、もとい霊夢の満面の笑顔を直視してしまった
俺は、酒の一本や二本なら惜しくは無いと思った。
これが俗に言う死亡フラグである。

#

「砂子さん、もう一杯」

「はいよ」

「ん、ありがとう。はい、砂子さんも」

「こりゃどうも」

お詫びという名の花見は、霊夢の意見を採用し早速行われた。

俺は専らお酌役に徹しているが、これで異変の件を許してもらえ
るのだから、文句などある筈もなかった。

ちなみに、明らかに未成年な霊夢が酒を飲んでいることに関して、
俺は何も言わない。

幻想郷では酒を飲むことが一種のステータスであるし、外の世界
の常識という力が及ぶべくもない。

それは山の巫女が身を以って証明してくれている厳然たる事実だ。

「あー、やっぱりこれかなり良いお酒なんじゃない？」

「よく分かるなあ。まあ、お詫びの品な訳だからケチケチするのも
どうかと思っただろ」

「ふーん」

霊夢は俺が中有の道で買ってきた高い酒の内的一本を、ちびりちびりと飲みながら言ってきた。

その年で酒の良し悪しが分かるとは大した舌である。彼女の頬は赤みがかってはいるものの、酔っている様にも見えない。

飲み慣れているのだからなと俺は感心していたが、霊夢は唐突に胡乱な目で睨み付けてきた。

何だ、ようやく酔いが回ったのかと思ったが、

「羨ましいわね。こんな高そうなお酒をたくさん買えちゃうだけのお金が懐にあるなんて」

「いや、別にそんなことは……」

「私なんて二重の意味で懐が寂しいっていうのに……。妬ましいわ」

食い付く所が微妙に違った。

大体、そんな重たい自虐ネタを言われたって、俺には対処の仕様が無いので勘弁して欲しい。

口を滑らせようものなら即粛清されかねないので、俺は細心の注意を払って霊夢の誤解を解きにかかる。

「勘違いしているところ悪いんだがな、霊夢……」

「あによ？ 私が何を勘違いしてるって言うの？」

「この酒は俺の金で買ったんじゃない。俺自身は全くの無一文状態だよ」

「あん？ どういう事？」

霊夢が呆けている内に、俺はさながらマシンガンの如く以下の事情を捲し立てた。

一つ、俺は異変などの後処理で財産のほとんどを失ってしまったこと。

二つ、残りの雀の涙ほどの金も、仙人たちに授業料として渡して

しまったこと。

三つ、所持金ゼロで途方に暮れていた俺に、自称親切な妖怪がお金を出してくれたこと。

四つ、その妖怪からは今もお金を受け取っていること。

「とまあ、俺の事情については以上だ」

「つまり、砂子さんはその親切な誰かさんのヒモって訳ね」

「ぐはっ！」

俺があえて考えないでいた事をこの巫女は……！

いいのだ。その分は必ずや利子込みで返すと決めている。だから、幾らヒモと呼ばれようが俺の心は決して揺るがない。

「って、霊夢！ お前、こっちの酒も飲み終えてないのに次のを開けるんじゃないっ！」

俺が決心を新たにしていると、霊夢が何やら暴挙に出ていた。

これはマズイ。何がマズイって、俺の懐的にマズイ。それ以上はいけない！

「だって、色んなお酒飲みたいし、これって私へのお詫びのお酒なんでしょ？ だったら問題無いわ」

「いや、これ全部お前の分じゃないからっ！！」

「あははっ。ぽぽぽーん、ってね」

「素面に見えるけど、お前実は酔ってるな！？ そうだろう！？ っつて、だからそんなにぼんぼん開けるなああっ！！」

目の前で高かった酒の栓が次々と開けられていく様を見せられていると、俺の中である一つの疑問が浮かんで来た。

もしかして、さっきのはフォローでも何でも無く、ただ本気でお

酒が飲みたいというアピールだったんじゃないか？

ありえないという考えは、巫女の現状を見る限りゴミ箱にでも捨てた方が良くのかもしれない。

買い直す為の費用とそれから生まれる新たな利子と土下座の機会を考えた所で、俺の心はポツキリと折れてしまったのだった。

第1話 パ・フェクト・ジゴロ（後書き）

ジゴロ：女にたかって生活する男のこと、つまりはトモ。

連載物の筈が短編として一度掲載してしまった為、修正して上げ直しました。申し訳ありません。

第2話 イン・ザ・レイク

「よつとー！」

ヒュッ！ ……ポチャン。

ひんやりとした気持ちの良い空気が漂う中、俺は一人竿をしならせていた。

竿と言っても、物干し竿ではない。人類が水中に住まう生物たちへ対抗すべく生み出した、叡智の結晶とも言える竿！

まあ、要は釣竿である。しかも竹に糸と針、それと餌のミミズを付けただけの超お手軽仕様。

自分で言っただが、随分な叡智の結晶もあったものだ。

「さあ、来やがれえ……」

ここ幻想郷に海は無い。となれば、釣りが出来るポイントは自然と限られてくる。

そんな中で俺が選んだのは、霧の湖と呼ばれる、知る人ぞ知る穴場ポイントである。

この霧の湖、その名の通り昼間は湖全体を覆うように霧が張っているのだが、釣りというスポーツをするに当たっては実に都合の良い天候だ。

何故ならば、

「……！ きたっ！」

霧が張るといふことは、視界が悪くなるということだ。それは何も地上の生き物だけとは限らない。

霧によって日光が遮られ、水の中に住む魚たちの視界も悪くなっているのである。しかも、この日は生憎の、もとい絶好の曇り空。

「うりゃーっ！」

視界が悪く、人の畏だと気付かぬ魚たちはどんどん陸に上げられていた。

こんな見た感じ鯉の王様しか釣り上げられそうにないボロ釣竿だが、釣果の程は素晴らしいものだ。

「はっはっは、大漁大漁」

足下に置いてある魚籠びくの中身がもつそろそろ溢れてしまいそうだ。気分は正に太公望である。

風の噂で聞いた所によると、ここ霧の湖には幻の主と呼ばれる巨大魚がいるのだとか。

いち釣り手としては是非とも相手をしてみたいものだが、何でも新月の晩にしか姿を現さないという。

曆的にも新月は遠く、また今の装備では水に引き摺り込まれ餌となるのが落ちだろうと、俺は泣く泣く諦めることにした。いつかは手合わせ願いたいものだ。

まあ、それは良い。良いのだが、

「あー、こつ調子が良いと何か不安だ……」

人間なら誰しも思う事ではないだろうか？ 余りにも幸福が連続すると、逆にその後の展望に不安を抱いてしまうという事は。

幸の薄い人生を送ってきた人間なら尚更だと俺は思う。何故ならば、俺もそこそこに幸薄い人生を歩んできたからだ。

今までの幸運全てを引っくり返す様な圧倒的不幸、その到来が

酷く恐ろしい。

とはいえ、俺の本日の幸運など釣果が良好な事と、妖精からのちよっかいをまだ受けてない程度だ。そこまで酷いどんでん返しも無いだろう、と思いたい。

「しかし、あいつらがいないと本当に楽で良いなあ」

あいつらとは妖精の事である。

妖精 自然の具現と言われるその存在は、幻想郷でその姿を見ないことはほとんど無い。勿論、霧の湖に限ってもだ。

妖精は幻想郷の住人にとっては身近な存在ではあるが、親しみを持たれているかと言えば、そうではない。むしろ疎まれてすらいる。その原因は、妖精の性質にある。彼女たちは非常に幼稚で、大の悪戯好きなのだ。

悪戯は軽いものであれば物を隠される程度で済むが、視覚不備に陥れ崖から転落させるなど、質の悪いことも平気でしてくれる。

挙げ句は、一般人にまで弾幕を放つ始末なのだから、無邪気の一言で済ますには厳しいものがある。

そういった意味で、妖精は幻想郷の住人には厄介な存在なのである。例外的に、メイドとして妖精を雇う好事家もいたりもするが。

ともかく、霧の湖が穴場でありながら人影が少ないのは、釣りをしようにも妖精に邪魔をされてまともに来れないのが原因だ。

幸い妖精単体の力はそれ程でもないもので力ある者は出来ないこともないが、誰もが対抗出来る訳でもない。

ちなみに、俺は平気だ。そこらの妖精程度になら簡単に負けはない。伊達に鍛えられてはいないのだ。

まあ、もしその様な事があり、あまつさえ師匠たちにバレてしまったならば、俺の命はないだろうが……。死なないけど。

「うえっ、嫌な事を想像しちまつたい……！」

脳裏で自分が杖でどつかれ、炎に焼かれ、壁に埋められ、龍の子のおやつにされる所まで想像して気分が悪くなった。

個人的に壁は勘弁願いたい。『壁の中にいる』的な展開は、二十年以上を外の世界で過ごした身としては十分なトラウマなのだ。

何だか本格的に気分が悪くなってしまった。

幸いにも魚籠の中の魚は数日を過ごすには十分な量である。ここらで切り上げて何の支障も無い。

思い立ったら即行動。竿と魚籠を体に引っ掛け、立ち上がる。凝り固まった関節が、ポキポキと音を立てるのが心地好い。

さて帰るか、と俺は後ろへ振り向きながら一言。

「あー、帰りにあいつらに会いませんように」

「ところがどっこい、そう上手くはいかないのでしたー！」

『は？』という俺の言葉がまともに口から発せられることはなかった。口から漏れるのは言葉ではなく、細かく多量の水泡。

何故という疑問が頭を巡るが、答えは目の前にあった。俺の体は水の中に沈んでいた。

「がぼっ！？ ぐっ………！」

無駄に冷静な頭は現状を理解した瞬間、体に力が入らないように努める。もしパニックを起こしてしまえば、どんな浅瀬であろうと溺れる可能性が生まれてしまうからだ。

続けて、慌てず仰向けの体勢から底に足を着け、上体を起こして水中から脱出する。顔に冷たく澄んだ空気が触れた。

「がはっ！ ぐえはっ、ごほっ……！！！」

肺に入り込んだ異物を咳と共に排出、同時に新鮮な空気を急いで取り入れる。数度これを繰り返すと、何とか落ち着きを取り戻した。はっはっ、と餓えた犬の様に呼吸は未だ荒いが、自身の現状を冷静に観察するだけの余裕はあった。

特に怪我をした所は無く、慌てて捻ったような感じも無い。着物は当然、上下共にびしょ濡れ。顔に張り付く髪が非常に鬱陶しい。そこには見事なまでに濡れ鼠と化した俺がいた。全くもって笑えない。だが、そんな俺の姿を実に愉快だといった感じで笑う奴等が目の前にいた。

「あはっ、あっははははーっ！！！」

「大の男の癖に、妖精に倒されるなんて」

「無様よねえ」

そう、妖精である。しかも三匹。

よく見ると三匹とも知っている顔だ。人里や森の中でちよくちよく見かけたことがあるが、悪戯の被害に遭ったのは初めてだったりする。

妖精は基本的に群れているが、こいつらはいつも同じ顔触れだ。

余程相性が良いのだろう。悪戯の対象にされる側からすれば、厄介極まりないことだが。

「そうね。でも、私たちの能力の前じゃあ人間なんて所詮この程度よ！」

「あっ、こら。人間の前でネタばらししちゃ駄目じゃない！」

「はあ、こんだから悪戯も最近は成功しないのよ。誰かさんの元気が空回りするお陰ね」

どうやらこいつらの能力にしてやられたらしい。そういえば、水に浸かる前に体に衝撃を感じた。体当たりでもされたのだろう。

何の気配も感じなかった辺り、意図的に相手の五感から消えるか、知覚出来なくする能力なのだろう。だとしたら、やはり厄介な能力だ。

しかし、それを大声で、しかも被害者の前で自慢する辺りは、妖精のおつむの弱さ故か。かなりの阿呆である。

その阿呆を栗みたいな口をした妖精が窘め、妖精らしくない落ち着いた雰囲気纏うもう一匹が毒を吐いた。……本当に相性が良いのか？

仲間から責められる阿呆（確か乳臭い感じの名前だった筈だ）は、落ち込みながらも俺を指差し仲間と言った。

「た、確かに最近は大失敗ばかりだけど、今回はほら！ ちゃんと成功したじゃない!?」

「まあ、それには頷けるかしら。ここまで見事に成功したのは久しぶりだし」

「巫女は滅多に引つ掛からないから。神社から出てきた甲斐もあつたつてもものね」

「そうでしょう、そうでしょう？ だーかーらー、私が抜けてるんじゃないくて、この人間が特別間抜けだったつてだけよ!」

仲間からの後押しの声もあり、阿呆は声も高らかにそう言い放った。また、その顔は戦いで勝利を収めた者であるかの様に輝いている。

「……………ふっ、ふっ」

しかし、である。一方的に攻撃を決めたからといって、戦いはそこで終わりなのだろうか？

答えは否である。例え本当の戦いに身を投じていたとしても、敵の生死を確認するまで戦いは終わらない。終わらせてはいけけないのだ。

三匹の妖精は怠った。勿論、俺の生死ではない。こいつらが怠った事、それは俺からの反撃があるか否かの判断であった。

俺がもし気絶しているか、死んでいるかすれば反撃を考える必要もなかった。だが、俺はここで瞬時に水から起き上がったのだ。

ここで逃げなかったのは、妖精たちにとっては余りに愚策であったとしか言い様がない。

「うわっ、何か笑い始めたんだけど……」

「気持ち悪い……」

「主に顔に濡れた髪が張り付いてるのが貞子みたいで気持ち悪い……」

「…」

「貞子って何？」

「さあ？」

そつえば、俺は妖精に関して一つ忘れていた事があった。

前にも言ったが、こいつらは自然の具現ぐげんそのもの。自然ある限り、妖精は消えないし、死なない、何度でも生き返る。

つまり、何度ピチュラせても全く問題が無いのだ。

「ふはははははーっ！お前ら、徒では済まさんぞーっ！！」

何故なら、魚籠に入っていた筈の魚の大半が逃げてしまっているみたいだから。本当に只で済んでいない。

食い物の恨みは恐ろしいという言葉を、これ程実感したことはない。恨むのは俺だが。

「き、きゃーっ!? 人間が切れたーっ! に、逃げるわよおお
っ!」

「ひいんっ! 変態怖いっ!」

「いやあああっ! 犯されるううっ!」

「んな事しないっ! 誰がお前らみたいな乳臭い餓鬼に欲情するか
あああっ!」

非常に失礼な事を言いながら逃げる妖精たちに、結構な強度を持
つと自負している堪忍袋の尾も遂に切れてしまった。

日頃から丹田に溜めている靈力を抽出、それを手の平に集中させ
弾幕を形成。数は三つ、大玉というおまけ付きだ。

「ちょ、靈力持ちとか聞いてないわよーっ!」

「言う前にお前らが仕掛けてきたからなっ!」

「ちよつと悪戯しただけなのにーっ!」

「俺にとつてはちよつとじゃ済まないのっ!」

「いやあああっ! きつとこの変態、私たちを捕まえて、靈力であ
んな事やそんな事をさせるつもりよおおっ!」

「こんの耳年増妖精があああっ! 俺の評判がこれ以上下がる様
な事を言うんじゃないっ! もういい、お前ら全員ピチュってるお
おおっ!」

「「「きゃあああああああああっ!?!?」」」

そして、放たれた三つの弾幕。飛んで逃げようとする乳臭い阿呆、
何故か空中で転けた鈍臭いの、それと耳年増へ見事に着弾した。

ピチューン、という小気味良い音が三つ連なった後には、妖精の
姿など何処にもなかった。明らかにオーバーキルだ、本当にありが
とっ!」

「うあ、やり過ぎたか……？」

何度でも復活する妖精相手とはいえ、少々、大人気なかったかもしれない。後悔先に立たずである。

まあ、結構な痛い目を遭わせたのだ。これで奴等もそう手を出してくることもないだろう。……多分。

「うん、切り替えていこう。前向きに」

そう、前向きに……、切り替えられたらどれだけ良かっただろうか。

掛けていた魚籠の中身を見る。活きの良い奴から逃げていったのだろう。沢山いた魚籠の中は、死にかけの魚が数匹と随分な変わり様である。

俺の思考が切り替わる。ただし、前ではなく後ろ向きの方向へ。

「いや、まあ、何となくこうなるって予想はしてたけどね？俺に幸運が続くなんて、それこそが幸運だもんな。

妖精に会わなくてラッキーとか言っただけど、今になって思えば完全にフラグだよなあ。しかも、しっかり回収する辺り我ながら阿呆だわ。

……はあつ、分かってる。分かってるんだけどさ、やりきれない……」

先日の博麗の巫女酒瓶開けまくり事件によって、俺は八割方の酒を買い直す為の資金繰りをしなくてはならなくなった。

当然、自身の生活に金をかける訳にはいかなくなり、今回の釣りという食料調達手段に手を出したのである。

そして、その結果が現状だ。釣果は良好、しかし妖精に絡まれ、終わってみれば坊主も同然の魚籠の中。

死にかけの魚の瞳に同情の念を感じてしまう俺は、きっと疲れているんだと信じたい。やめろ、そんな目で俺を見るんじゃない。

「帰ろう……」

こういつ時は、布団で寝て一時的にでも嫌な事を忘れるに限る。食料については起きてからでもまた考えよう。

さあ、ふて寝だ、と俺は家（と呼ぶのもおこがましいボロ屋だが）へと足を向け、

「あーっ！！ イサコがいるーっ！！」

ようとして、またも姦しい声に呼び止められてしまった。しかも、名前を間違えられて。

またか、と多少うんざりした顔を向けると、そこには一匹の妖精が浮かんでいた。

背中に三対の氷翼、ウェーブのかかった髪と常に浮かぶ勝ち気な表情。俺の記憶野で覚えている限り、該当する妖精はただ一匹。

「チルノ、か……」

自身を最強と呼んで憚らない、色んな意味で最強の妖精、チルノであった。

#

「こらっ、イサコッ！ ちっともあたいに会いにこないなんて、どーいうりょーけんだ！」

「んー、あー、まあ、色々あつたんだよ」

近付いてきたかと思えば、いきなり声を荒げるチルノ。彼女の感情に呼応しているかの様に、冷気が周囲に漂い始める。寒い。

一先ず、俺は暖房の術式を自分に掛けた。服を乾かす目的もあるが、腹を壊したくはないし、会話に夢中で氷漬けなんて間抜けはしたくないからだ。

「いろいろって何さ？」

チルノが更に問い掛けてくる。だが、悲しいかな彼女は妖精である。

「色々って言ったらあれだ。博麗の巫女に喧嘩売ったり、吸血鬼の妹の遊び相手したり、亡霊姫の炊事係したり、山の巫女に常識を説いたり……」

「そんなむちゃばっかりしてたの！？」

こんな嘘で簡単に誤魔化せてしまう。何があつたと言われても多過ぎるし、きつと彼女は全て理解出来ないだろうからこれで問題無い。

チルノは妖精の中でも特に頭が弱い。きつと実力の方にステータスのポイントが大幅に割り振られているんだと俺は思っている。

「イサコ、あんた自分の實力をかしんすぎね。あたいだってそれらの相手はかんべんしたいわ!」
「仰る通りで」

俺だってそんな勘弁だし、どれ一つまともになせる自信がない。チルノの言う事もまったくである。

ちなみに、名前に関する訂正はチルノには求めない。もう諦めているし、彼女の記憶に残っていただけ僥倖だろう。

「そういうチルノ、お前は今まで何をしてたんだ?」

「あたい? あたいはかくれんぼしたり、大ガマと勝負したり、魔理沙と弾幕したり、神社のさいせんばこを凍らせたり毎日がさいきよーだったわ!」

「お前って奴は、何て命知らずな事を……」

いや、命に限りの無い妖精だから出来るのだろう、かくれんぼ以外の何と殺伐としたことか。

大ガマは失礼さえしなければ(幻想郷基準で)友好的な方なので、個人的に喧嘩を吹っ掛けるような真似はやめて欲しい。

しかし真の問題は、神社とは博麗と守矢どちらであったかだ。後者はまだ弁明の余地がありそうだが、前者の場合を考えると震えが止まらない。

きつと霊夢のことだ、妖精であろうと一片の容赦も無く肅清してしまうのだろう。それが容易に想像出来てしまうのだから恐ろしい。

「さいきよーはね、なにごともおおそれてはいけないの! たとえ相手が巫女でもね!」

確かに、チルノのそういった部分が、彼女の最強という言葉肯定してしまう要因なのだろう。

「見習いたいような、見習いたくないような……」
「さいきよーを指すのなら、あたいを目標にしな！」

とはいえ、チルノを見習いたいかといえば微妙である。彼女の行動は無鉄砲な部分が多いし、最強と言ってもあくまで妖精基準だ。それに、俺は最強なんて目指してはいないし、なれる気もしない。どれ程の実力者たちを相手にしなくてはならないか、そんな事を考えるだけで億劫だ。

見習うべきは飽くなき向上心ぐらいか。俺も向上心の無い馬鹿にはなりたくないし。

「それはそうと、あんたが持つてるそれは何？」

そんな若干妖精離れた節のあるチルノも、興味がごろころ変わる所は、やはり妖精なのだと言認識する。見た目に変わらず子供っぽい。

「これは釣竿、さっきまで釣りしてたの。結果はまあ、この有り様だけ」

「何これ、全然ないじゃん」

「くつつくな冷たい。変な三匹の妖精に絡まれてな。あれはお前の友達か？ だったら、注意しといてくれい」

「そいつらはたぶん、あたいの兄弟でもあり宿敵の奴らだと思う。今度会ったらカチンコチンに凍らせてやる！」

私怨でもあったのか、チルノは気炎を上げる。氷精なのに。

頼んだ俺が言うのも何だが、加減はしてやって欲しいものだ。釘の打てる妖精なんて見たくもない。

「あつ、魚見てたらお腹空いた……」
「え、生なのにな？」

流石は妖精、いやチルノ。フリーダムだ。

「イサコ、その魚食べたい」

「ダメ、これは俺の食料だ。食べたいなら自分で取ってきてきな、竿は貸してやるから」

「なにっ!? この、イサコのケチ! しゅせんど! きちく! へんたい! ろりこんやろっつ!」

「待て! 途中から罵倒のレベルが洒落になつてないぞ!？」

こいつは絶対意味も分からず言っているに違いない。断言出来る。何故に魚をやるのをケチったくらいで、身に覚えの無い凶悪なレツテルを貼られなければならんのか。さすがに理不尽が過ぎるだろう。

「いや、本当にこれだけは勘弁してくれ。俺の少ない命の糧なんだ」「えー。じゃあ、魚を取ってくれば食べさせてくれる?」

「そりゃあなあ。お前が取ってくればお前に食べる権利は当然あるし、簡単な調理ぐらいはしてやるさ」

調理と言っても、焼いて食べるという、至極原始的な調理方法だけだな。

「よーし! げんちは取ったからね!」

「何でそう、無駄に難しい言葉を知ってるんだ? まあ、いいや。ほれ、釣竿貸してやるよ」

「いらない。あたいにはあたいの捕り方があんの! 目ん玉開いてよーく見てな!」

「はい？」

そう言っつて釣竿に目も向けず、チルノは湖の方へ飛んでいく。目視で、距離・高さ共におよそ10メートルぐらいだろうか？チルノは湖上に静止し、おもむろに両手を掲げた。

何だか、無性に元気を分けてあげたくなるポーズだ。

「ふおおおおおおおおおーっ！！！」

「うおっ、寒っ……！？」

チルノを中心に冷気が集まり始める。その余波が容赦無く俺を襲い、やむを得ず暖房術を重ね掛けする。

冷気はチルノの手に収束し、急速に冷やされた水分が氷の塊として形成されていく。

初めはボール大程度だったが、次第に大きさを増し、余裕でチルノの身長を超えてなお体積を重ねていく。

「おいおい、マジか……」

目の前の光景に、チルノがどの様な妖精か理解していきながら、俺はそう呟かずにいられなかった。

チルノの力は明らかに妖精というカテゴリーの中でも群を抜いている。聞けば閻魔様にも力の使い方方で注意を受けたのだとか。

冷気を操る程度の能力 単純故に強大であり、それをコントロール仕切るチルノの実力は計り知れない。

「見たか、イサコ！ あたいの力を！」

「凄い凄い。ってか、見えない訳が無いだろ」

「そうだろう、そうだろう！ はっはっはー！！！」

「で、それをどうするんだー？」

既に氷塊の大きさは半端ではなくなった。直径だけでチルノ10匹、10チルノ程の大きさにまでなっている。ぶつけられたら非常に痛そうだ。

しかし、未だに氷塊の使い道が分からない俺は、暢気にチルノに尋ねてみた。

「こつするの、よっ!!」
「は？」

チルノは俺の問いに一つの単純な行動を以て答えてくれた。俺の目線の先で、氷塊が水面へと勢いよく叩き付けられた。

Q・数トン単位の物体が十数メートルの高さから水面にぶつかった場合どうなる？

A・ドボン！ バッシャーン！ ビッチビッチ！

「のわーっ!?!」
「きゃーっ!」

凄まじい水飛沫が辺りに降り注ぎ、俺の悲鳴とチルノの嬉しそうな声が湖に響き渡る。

折角、乾きかけていた服も大量の水を浴びてまた濡れてしまった。何てこった。

「チルノー！ 何してくれてんだお前ーっ!」

これは怒ってもいいと思うのだ。まったく、今日は怒ってばっかりだ。

しかし、当のチルノは俺の怒りなど何処吹く風とばかりに自慢気な顔でこちらに寄ってくる。

「どうよイサコ、私の凄さが分かったかー！」

「ああ、お前の凄さについては目で見て、しかも身を以て体験したから嫌でも分かった」

「そうか！　じゃあ私を思う存分に褒めろ！」

「だから引つ付くな、凍っちゃうから。それと、今はお前を褒めるどころか詰る言葉しか思い浮かばないよ！　何がしたかったんだ！？」

「んあ？　変なイサコ、魚を取る為ってさっき言ったじゃん、ほら「あ？」」

チルノが指差した方へ視線を向けると、そこには活き良く地面の上で跳ねている魚たちがいた。……さっきの擬音の正体はこいつらか。

いくらここが幻想郷とはいえ、普通の魚は水で暮らしている。無論、地上で生きる術を彼等は持たない。

となると、魚たちが己の意思に反して地上に打ち上げられたのは明白。そして、その主犯は、

「お前か……」

「えっへっへー」

俺の目の前で勝ち誇った顔をしているチルノなのだろう。哀れ、浅瀬を泳いでいた魚たちが彼女の氷塊の犠牲になったという訳か。

「何て原始的な狩猟法だよ……」
「けど、この方が楽しこーりつてきでしょ？」

チルノに言われ、俺は咄嗟に反論の言葉が出てこなかった。
方法こそ荒っぽいけど、時間はかからず、コストもゼロ。確かに釣りよりはよっぽど効率的だと言える。

ただ、あのやり方を楽とか言えるのはチルノぐらいだ。俺がやったとしたら、あつという間に霊力が尽きてしまうに違いない。

正にチルノならではの狩り、いや、漁。まったく、相性というのは馬鹿に出来ないものだ。

「はあーっ。……おーけー、約束は約束だ。この魚たちは俺が責任持って調理するよ」

「おおー！ やりーっ！」

「その代わりと言っちゃ何だが、俺にも少し分けてくれよ」

「えー！ 捕ったのはあたいなのにー」

「作るのは俺だろう？ 最強なんだったら、こういった時こそ器の大きさを見せるもんだぞ」

降参という意味を込め、俺は両手を上げて了承の言葉を言った。
心の内で理に敵っていると思ってしまう以上、俺が調理するのは確定的なことであった。

ただ、チルノを唆してでも相伴に与ろうとするのは、俺なりのやさやかな反抗だ。残念ながら、俺はそれほど立派な器の持ち主ではないのでな。

「むう、しょーがないわねー。さいきょーのあたいの顔にめんじて、イサコが食べることを許す！」

「おおっ！ ついでに、余った魚は貰って帰ってもいいか？」

「真の強者は弱者にもじひの心を忘れないの！ それぐらいよゆー

よ！」

「流石はチルノ！ 最強！ 無敵！ ナンバーワン！」

「当ったり前よ！ 何てったって、あたいはさいきよーなんだからねっ！！！」

チルノはそう言つて何々大笑した。俺も彼女につられて笑つた。巫女と比べて、妖精の何と御し易いことかと思ひながら……。

#

「弱い！ はらごなしの相手にもならないわ！」

「弾幕ごっこで、俺がお前に勝てるかよお……」

焼き魚で舌鼓を打ちのんびりと腹を摩っていると、チルノから弾幕ごっこのお誘いがかかった。

頭の中にポンポンと生まれてくるあらゆる言い訳を以つて回避を試みたのだが、最強の妖精の耳に届くことはなかった。

そして現在、動局的の役目を十分に果たした俺は、無様に地を這っているのであった。

しかし、チルノは不満な様子。何が不満だと思えば、あれか難易度の問題か畜生。

「全然物足りない。イサコ、もう一回よ！」

「俺で物足りないなら、ルナティック霊夢に挑めよ……」

誰だ、妖精が御し易いとか言つた馬鹿は……。

第2話 イン・ザ・レイク（後書き）

チルノはムラがあるからこそ強いと、個人的に思うんです。

第3話 彼岸行きのサンス・ポート

「何で右腕の骨ばかりこんなにごろごろ転がってるんだ？」

利き手である右手に他者の右腕の白骨をぶら下げながら、俺はぼつりと独りごちた。

骨からの答えは無い。骨は音は鳴らせても、声は出せないのだから当然か。

「とりあえず、纏めて一緒に供養して……、いいのか、これ？ いや、そこら辺に放っておくよりはマシか。よし」

まあ、独り言である以上、返事は期待していない。むしろこの場で返事など返されれば、俺は困惑を隠すことは出来ないだろう。

何故なら、ここに生者が訪れることなんて滅多にないのだから。

「南無南無。どんな死に方をしたか知らないけど、成仏してくれよ」

言葉は宙に漂う線香の煙に混ざり、石の間を縫って吹いていく風に攫われ、消えていった。

後には耳に痛いぐらいの静寂だけがその場に残った。

ここは無縁塚。人と人との縁が途絶えてしまった者たちの終着点。また、幻想郷最大の共同墓地である。

#

「ふむ。まあ、こんなところか」

あらかたの無縁仏と無数の右腕の骨を手厚く弔い終え、俺は一息吐いた。

死体には嫌でも慣れたとはいえ、やはり気疲れはするものである。それと言うのも、死体の大半が俺と同郷、つまりは外の世界の住人だった者たちなのだから尚更だ。

何も知らず、分からず、偶然に出会ってしまった妖怪の餌となつた彼等は、如何な気持ちで死を迎えたのだろう。

のうのと今生を過ごす俺には、想像し難い事だ。

幻想郷の埋葬手段は外と同じく、死体を火葬した後に埋めるという手順で行われる。だが、その理由というものが実に幻想郷らしかったりもする。

幻想郷に住まう妖怪たちは全員が全員、俺の知り合いたちの様に紳士的（いや、この場合は淑女的が正しいか？）な妖怪とは限らない。

死体を食い散らかす浅ましい下級妖怪も当然ながら存在するのだ。となると、困るのは人間だ。死体をそこらに放置され疫病を流行らされても困るし、未練が閾値を超えて妖怪化されてもやはり困る。幻想郷の人妖のバランスは常にシビアなのだ。

だから、無縁塚に集う死体は人の手によってしっかりと火葬され、手厚く弔われるのである。こうすれば精々、幽霊や亡霊になる程度で済ませられる。

しかし、今の無縁塚にはその幽霊や亡霊の姿さえも見られない。

「桜も幽霊と一緒に逝ったか」

と言うのも、無縁塚には紫の桜という妖怪桜があり、この花びらが散ると同時に幽霊たちは彼岸へと渡っていくのである。

今はちよつどその花びらが全て散り終えた後、幽霊の姿が見えないのはその為だ。

「あーあ、もうちよつと早く来れば花見だって出来たろうになあ……」

紫の桜と呼ばれるこの妖怪桜。その花びらが散る様は実に幽玄で、ちよつとこの世のものとは思えない美しさなのだとか。

生粋の日本人気質の俺としては見ておきたかったのだが、どうやら時期を逃してしまったらしい。非常に残念だ。

だがまあ、花見は一度神社で済ませているのでそこまで未練を垂れることはない。来年は見逃さないようにしようという決意だけに留めておく。

「うん、墓場で花見ってよく考えなくても罰当たりだしな。知り合い連中ならお構い無しでやりそうだけど……」

俺が内心で自重していると、そんな事など知ったことかとはかりに乱痴気騒ぎしそうな顔触れが思い浮かび、危うく吹き出しそうになる。

墓場でだって平気で弾幕ごっこを行う連中だ。酒宴ならむしろ喜んでするに違いない。

ここで自重なんて考えているあたり、どうやら俺はまだ幻想郷には馴染みきっていないみたいだ。悲しいやらほっとしたやら複雑な気分だ。

こんな時、俺はどんな顔をすればいいのだろうか？

「はあ、馬鹿な事考えてないで始めよう」

頭を振って妄想を払い落とす。別に俺は花見をしにわざわざ無縁塚を訪れた訳ではないのだから。

俺の本来の目的。それは無縁仏の供養、それと、

「これは、ボールペン。うん、使えそうだな。……これはポケベルか？ 懐かしいなー。でも、いらないうつと。……うおっ！ 厚底ブーツ、だと？ これも遂に幻想入りしたのか？」

無縁塚に流れ着いた、もしくは幻想入りした外の世界の物を、こっぴどく拾っていくことだ。

ここ無縁塚は外と内と冥界の三つの結界が交わるというところでもない場所。しかも、無縁塚に埋まっているほとんどが外の人間の為、外との結界が若干緩くなっている。

すると、この様に外の世界の物が流れ着き易くなるのだ。

ここ以外では博麗神社でも似た様な現象が見られる。と言っても、厳密にはその原理は異なるらしいが。

あの神社は外と内の世界の境にある為、色んなものが流れ着くのだとか。それは外来人だったり酒だったり、もしくはお宝・珍品の類だったりする。

神聖な場であるのが関係しているのか、神社は稀少な物が流れてき易いという。逆に無縁塚はジャンクっぽい物がよく流れてくるが、実用性的にこっちの方が重宝している。

使えそうな物であれば自分の物に、珍しい物であれば売りに行つて小銭を稼ぐ。これが俺の収入源だったりする。

意外とこういった時に外の世界で培った経験は活かされたりする。何たって、その物が幻想郷という場所で価値のあるものかどうかの判断が出来てしまうのだ。

外の世界で生きた経験も無駄にはならない。……若干ずるいと思わなくもないが、生活の為と割り切ることにしている。人生とは騙し、騙されるのが常なのだから。

「久し振りに来るとやっぱり色々落ちてるもんだな、って、うおおおおっ!? か、乾パンが落ちてる! 食料ゲットオオオツ!! これで数日は生きていけるっ!

他に何か食べれる物は……、サ マドロップス!? 誰だこれを捨てた奴は! 中身は……、ハツカしか入ってねえ! だから捨てたのか!? 俺がちゃんと食べてやるからなっ!!」

そして、こういう思わぬ幸運(何処ぞの兎様の能力程度)があるから止められない。

表示されている賞味期限など知った事ではない。食えれば良いのだ。別に死にはしないが、死にたくなるので空腹は出来るだけ抑えておきたい。

こういう時はどの神様に感謝すべきだろう。豊穰神? 厄神? それとも守矢の二柱か? 大穴で行方不明の博麗神もありだ。御利益の方はとんと期待出来そうにないが……。

「あー、口の中がスーすーする。ハツカ美味いよハツカ。……うん、今日も頑張って探して回ろう」

甘くは無いが、懐かしい味が口内に広がり、それが何となく俺のやる気をおこした。

無縁塚の広さ自体はそうでもないのだ。今日はネジの一本でも見逃さないように気を付けるとしよう。

きつと俺の貧相な予想をあつさりと超える様な物が落ちていないだろうか。

ああ、ちなみに墓地で物拾いという行為に、俺は別に罪悪感などは感じない。あくまでもリサイクル・リユースの範囲である。

ここに流れてくる物は大抵が外の世界で捨てられた物であり、所有権は放棄されているに等しい。ならば、拾って使ってやるのが物としても本望ではないか。

それに、俺は仏さんたちから物を盗る様な真似はしていない。人として最低限の節度は持ち合わせているつもりだし、畜生に成り下がる気も更々ない。

無縁仏を弔った報酬分というのは、何処ぞの店主の受け売りである。

「あれ、これってもしかして宝塔？ 何でお寺じゃなくてこんな所に？ 落とし物な筈ないよな、大事な物だって言ってたし。」

となると、レプリカか……。本物にそっくりな出来だし、これはいい値で買い取ってもらえそうだな」

こうして、宝探しは陽が傾くまで続いたのだった。

#

「よくもまあ、こんなにガラクタを集めたもんだねー」

「ひゃいっ！ ど、どちら様でしょうか？」

無縁塚の隅から隅までを探し続け、さすがにもう落ちていないか
と思っていると、後ろから唐突に声を掛けられた。

前にも言ったが、ここで生者の声を聞くのは滅多にないことなのである。だから、少し変な声が出てしまっただけ。別にビビった訳ではない。

「いやあ、悪い悪い。驚かせちゃったかい？」

「いえ、驚いてませんよ？」

「……さつき変な声出してなかったっけ？」

「あー、河童でも近くにいないんですかね。ほら、ひゅいつひゅいつ、って」

脳裏に山で出会った河童っ子の姿が浮かぶ。何やら怒った顔をしているが、許せ、仕方なかったんだ。

「んー、そういう事にしといた方が良いかい？」

「どういう事がさっぱりですが、それで良いと思いますよ」

「んじゃあ、そういう事にしておこうかね。ついでにさっきの質問に答えてあげよう。あたいは死神、三途の水先案内人こと小野塚小町さんだよ」

「死神……」

さて、俺に話し掛けてきた御仁。何とまあ、死神らしい。

赤い髪に俺とほとんど変わらない上背。少しだらしなく着流した着物が、何となくだが彼女の性格を表しているように思える。

そして、死神の代名詞とも言える大鎌。これを持って死神ですと言われてしまっっては信じるしかないだろう。

だとすると、少し困ってしまう。

「ええと、死神であるあなたが俺の所に来たってことは、まさかあ

の世からのお迎えですか？」

「いや、それはあたいの管轄じゃないから安心しなよ。あたいの仕事はあくまで船頭だから」

「それは良かった。若い身空なもんで、まだまだやりたい事が色々ありまして……」

とりあえず、まだ彼岸に行くようなことがないと分かりホッとす
る俺。

しかし、目の前の死神さん、小野塚さんは俺を少し厳しい目で見てくる。何だろうね？

「まったく、死神の目に寿命が映らない様な人間が惚けた事を言う
てくれるよ」

「……何の事だか分りかねますね」

「あー、いいからそういう反応。っていうか、死神相手に寿命で誤
魔化しが効くとは思ってないだろう？」

そういえば、外の世界のとあるマンガの死神さんたちは人間の寿
命が分かるとか言ってたな。

あの死神さんたちよりはよっぽど人間っぽい風体をしていらっし
やるが、本質は一緒という訳か。参ったね、こりゃ。

「流石は死神、と言わせて頂きましょうか」

「何だか思わせ振りの事を言う悪役みたいな台詞だねえ」

「俺も思いました。俺に悪役なんて大層な真似は死んでも無理です
けど」

「死なないんだから余計に無理だろうさ」

「それもそうですね」

「まあ、あたしも死神なんて仕事してる建前上、こういう事には敏
感になってしまっただね。気を悪くしないでくれよ」

「はあ、職業病って奴ですか？」

「うーん、それこそあたいには死んでも似合いそうもない言葉だねえ……」

死神が死ぬっていうのもなかなか想像が出来ないなあ、と思う俺。小野塚さん自身も想像出来ないんじゃないだろうか？

っというか、死神に寿命なんてあるの？ 人の事を言えなくない？ なんて言葉は口には出さない。口は災いの元、間違っても鎌でぶった切られるなんて事態は御免である。

でも、悪い人ではないようなので、俺も一安心だ。

「良かった。お前は生きてるだけで迷惑なんだー、とか言われるかと思いましたがよ」

「言わないよ。お前さんの中の死神像はどんだけ極悪なんだい。まあ、是非曲直庁の事務あたりは寿命が分からんってブチ切れてるかもだけど」

「ははっ……。ところで、小野塚さんはここに何の用で来たんですか？ 探し物だったら、ここに揃ってますけど」

「えっ？ あー、っと、そうだねえ……」

小野塚さんは死神で船頭だと言っていた。ならば彼女の職場（？）は三途の川にあたるのだろうか。

しかし、ここは無縁塚である。三途の川とは方角も異なるし、大きな川も無い。場所を間違えたなんてことはありえないだろう。

となると、どうして？ という思いで小野塚さんを見ると、何やら目線が宙を泳いでいる。右へ、左へ、ゆらりゆらりと。

それはまるで今まさに理由を考えているといった風で、それを裏付けるかのように小野塚さんはハッと何か思い付いた様な顔をする。と、いきなり朗々と語り出した。

「そう！ 実は少し前に大量の幽霊が三途の川に流れてきてね。最近は休む暇も無く、ずーっと働き詰めだったんだよ。」

「ああ、思い出すだけで疲れてくるあの幽霊たちの量！ おかげで、漕ぎつ放しだったあたいの腕はこんなに筋肉質になっちまった！ 女の子だったのによ！？」

「んで、この時期に幽霊が大量に流れてくるなんて無縁塚の妖怪桜のせいと推定して、ここに来たって訳さ」

「妖怪桜って、あの紫の桜の事ですか？ 一体どうするつもりで？」「ちよいとこの鎌で剪定^{せんてい}してやろうと思ってね。なーに、一年も経てばまた蕾を付けるさ。植物の力を舐めちゃいけないよ？」

「明らかに八つ当たりでしょ、それ！？ あと、理由がサボりの口実にしか聞こえな……」

「い、という言葉が続けようとしたところで、首筋に何やら鋭利な物が押し当てられた。冷たく金属質で、まるでそう、鎌みたいな形状をしていらつしやる。」

「ついでに目の前の小野塚さんの姿が消えた。ええと、これは一体どういう状況なんだろう？ あんまり分かりたくはないけれど。」

「あつはつは。サボりだなんて冗談が好きだねえ、お前さん」

「いや、俺はどちらかといえば冗談は苦手で……」

「あー、何だか急に彼岸へ船渡ししたくなってきたねえ。活きの良い男の幽霊とか特に……」

「って、苦手な訳ないじゃないですか！ 冗談とか俺、大好きですから！ あ、さっきのも冗談なんで、本気にしないでくださいね？」

「主に地雷・自爆ネタなんかが得意です。彼岸行きは洒落にならないので勘弁願います。」

「うむ、ならよし」

「あ……」

そんな言葉と共に、首から鎌の感触が消え、目の前に小野塚さんの姿が再びあった。

うーむ、何かの能力なんだろうが便利そうだ。俺の能力とは雲泥の差である。羨ましい。

「まあ、そんな訳で無縁塚に来ただけど、案の定、紫の桜は散っていたんだよね」

「もう花びら一枚残ってないですしね」

「そして、こんな墓石だらけの辺鄙な場所でごそごそ怪しいことをしている奴がいるときたもんだ」

「へー、それは、怪しい奴ですね？」

「お前さんの事だよ」

呆れた顔で小野塚さんが突っ込みを入れてくる。分かっています、さすがにね。ただ、傍から見るとやっぱりそう見えるんだろうなと知って、俺は少し落ち込んだ。

そんな俺などお構い無しとばかりに小野塚さんは俺が集めた道具の山を漁っていく。幻想郷の住人の例に漏れず、この人も大概マイペースだ。

「本当によくもまあ集めたもんだねえ。……何だい、この卵みたいなナラクリは？」

「ああ、それはたごっちっていう機械です。こっち風の言い方をすれば、その中で式神を育成する為の物です」

「へえ、外では式神をそんな風に作り上げるのかい！」

「まあ、作り上げると言ってもこっちみたいに出てはきませんし働きもしません。要は暇潰しの為の道具です」

「はー、使えもしない式神をわざわざ育てるなんて……。外の人間

の考える事はよく分からないもんだねえ……」

「外の間人だった俺でも未だに分からない部分が多かったですからね」

「そうかい。外から来たお前さんでも分からないなら仕方が無いね」

小野塚さんはそう言って、興味を失くしたのか、たま　つちを道具の山の中に放り投げた。

そして着物が若干崩れているにも関わらず、道具を漁り続けていく小野塚さん。裾から覗く健康的な太ももが眩しい。

しかし、彼女は何を目当てに道具の山を漁り続けているのだろうか？こんな物に興味を示すのは偏屈者の店主ぐらいと思っていたのだが……。

いや、もしかして、

「あの、小野塚さん？」

「んー、何だい？」

「俺はその、墓場荒らしみたいなのはしてませんから。これのほとんどもは外の世界の物で……」

「んな事はとづくに分かってるよ。お前さんの回りにいる幽霊たちを見ればね」

「は??」

小野塚さんに言われて回りを見渡す。

すると、何時の間に現れたのか俺の回りを大量の幽霊が漂っていた。はて、さつきまで俺たち以外に幽霊一匹いなかった筈なんだが……。

「それ、お前さんが吊った幽霊たちだよ」

「え？　何で分かるんですか？」

「そりゃあ、墓石なんかが真新しかったりお供え物が置いてあった

り、おまけに珍しく人がいるとすれば、そいつが供養したつてのが妥当でしょう」

「それは確かに……」

「あと、幽霊たちがお前さんに懐いているしね。きっと感謝してるのさ」

小野塚さんがそう言い、肯定の意を示す為なのか、幽霊が俺にその身を擦り寄せてきた。

ひんやりしている。夏は実に重宝しそうな温度だ。しかし、今の季節は春。纏わり付かれても寒いだけだったりする。

「そんだけ懐かれているような奴が死人から物を盗るとは思えないからね。お前さんは探偵小町さん的には無罪だよ」

「それはどうもです」

「まあ、うちのボスが知ったらどんな判決を下すかは分からないけどねえ」

「死神のボスって事はつまり……」

「ああ、閻魔様だよ」

やはりそうであったか。俺の脳内で髭を生やした凶悪なまでに厳しいオッサンの顔が再生される。

碌な人生を歩んでいない俺のことだ、地獄行きはきつと免れないだろう。きつと裁判中に物を言えぬように舌を抜かれ、地獄で永遠に罰を受けることになるのだろう。

余計に死にたくなかった。閻魔様怖い、なまら怖い……。

「どんなのを想像してるか知らんけど、うちの閻魔様は愛くるしい御姿をしてるよ」

「えっ、女の子？ 怖くないですか？」

「怖くないと言えば嘘になってしまっねえ……。まあ、多少は口煩

くて頭も固いけど、舌をいきなり引っこ抜く様な御人ではないよ。
むしろ真面目な部分が可愛らしい」

「何だか急に裁判を受けても良い様な気分になってきました」

俺も男だ。むさ苦しいオッサンに裁かれるぐらいなら、女の子に裁かれる方が良いに決まっている。無論、一番は死なないことだけだ。

「あつはつは！ これだけ死後のヒントを与えてやってるんだ、今の内に死んだ時の申し開きでも考えといたらどうだい？ ちよつとは考慮してくれるかもしれないよ？」

「そうですね。とある店主の入れ知恵ですとだけは言ってみます」

「ほう。その店主は何て言っただんだい？」

「曰く、『あくまで無縁仏を弔った報酬分だよ』と」

「詭弁だねえ……」

「まあ、例え俺が何を言おうが、地獄行きの判決は間違いないと思うんで、申し開きをするのはやめときます」

「まだ若いだろうに一体何をしたってんだい、お前さんは……」

「それ相応の事をしてしまった訳ですよ」

若干の哀れみ分を含んだ目を向けられるが、とりあえず、笑って返す。小野塚さんも意図を汲んでくれたのか、それ以上は何も言わず、また道具の山を漁り始めた。

しかし、申し開きか。今まで考えた事もなかった。勿論、現時点で地獄行きがほぼ確定しているようなものだからだ。

いや、しかし待てよ。申し開きをする以前に、幽霊って喋れたっけか？ まだ俺に擦り寄っている幽霊たちだが、言葉を発する様子はない。

正に死人に口無しとはこの事。これが閻魔様の前ならば、死人に口応え無しか。やはり、申し開きを考える必要は無さそうだ。

「これでもないねー。んあー、何処にあるんだい？」

「さつきから何をしてるんですか？ 小野塚さんが気になる様な物でもありましたか？」

「うんー、あたいの鼻が確かにここにあるって告げて、あつたーっ！ー」

「何ですか、何ですか？ ……んがっ、それは！」

小野塚さんがまるで鬼の首級のように掲げるそれは、見るからに上等そうな桐箱に包まれた何かであり、俺が今回の宝探しで見つけた中でも一、二位を争う一品だった。

「うーん、見るからに美味そうな酒だねえ ……」

「じゅ、純米大吟醸を探し当てるとか ……。あんたは犬ですか！？」

「死神だつてさつきから言ってるじゃないか。でも、そうかい。これは純米大吟醸って言っただねえ ……」

うつとりした目で大吟醸の瓶を眺める小野塚さん。その一部分だけを切り取れば、好きな人の写真を眺める少女に見えなくもない。だが、現実是非情である。

しかし、あの一品を見つけ出すとは流石は幻想郷の住人。俺のコレクションとして取っておこうと思っていた物を一発で見抜いてきた。

幻想郷の住人は総じて酒への執着が凄い。だから、ここは猛犬の尾を踏まぬ様に慎重に慎重を重ねて返してもらうしかない。

俺が心中でよし！ と意気を高めていると、小野塚さんが俺に視線を向けてきた。その赤い瞳は潤んでいて、猛犬と言うよりはむしろ、発情期を迎えた犬の様で ……。

「ねえ、お前さん」

「ひやいつ！ ななな、何でしょうか！？」
「何だい、また変な声を出しちゃって。かわいいねえ」

可愛いとか言われる様な年じゃありませんから、という言葉は出せなかった。小野塚さんから放たれる咽せ返る様な色香に当てられてしまったからだ。

上気しているのか赤みが増した白い肌。着物から覗く胸や太ももの凶悪なまでの魅力。そして、潤んだ瞳でじっと見詰められては初心でねんねな男が抗える筈もない。

「あたい、この酒が飲みたいんだよお……………」
「いや、それは俺のですね……………」

俺は絞り出す様な声で反論したが、それは和紙程度の抵抗力しか持っておらず、あっさりと破られてしまう。

小野塚さんはここぞとばかりに胸元を広げて迫ってくる。大迫力のソレが着物から零れ落ちそうになり、俺は思わず唾をゴクリと飲み込む。

「飲みたいなー。この酒もあたいに飲んで欲しいって思ってるんだろうになー」

「いや、だから……………」
「の・み・た・い・な？」
「……………はい」

頭が蕩けて馬鹿になるんじゃないかってぐらいに甘い言葉と耳朶に吹き掛けられる吐息に、俺の心が遂にギブアップした。

いや、だって、これは仕方ないだろう。並みの男だったら理性がぶつつんして襲い掛かってもおかしくないシチュエーションだった筈だ。

むしろ理性を保てた自分を褒めてやりたいぐらいだ。……ヘタレ
という言葉も甘んじて受けてやる。

「やった！ いやー、お前さん太っ腹だねー。あたかも思わず惚れ
ちまいそっだよっ！」

「……白々しいなあ、まったく」

「男があんまり泣き言を言うもんじゃないよ？ ほら、嫌な事はば
ーっと飲んで忘れちまおうよ！」

誰のおかげで泣き言を言う羽目になっているのか小一時間ほど問
い詰めたいが、きつとのらりくらりとかわされてしまうに違いない。
だったらいつそ、小野塚さんの言う様に酒を飲んで忘れるのも良
いかもしれない。一人酒よりは誰かと飲む酒の方が美味いに決ま
っている。

そう考えると急に大吟醸云々の事などどうでも良くなって、一刻
も早くアルコールを摂取したい気分になってきた。

「……そうですね。よし、飲みましょう！」

「おうともさ！ それでこそ幻想郷に生きる男だ！」

「つて、ちよつと待った。さすがに墓場で酒を飲むのはどうかと…

…」

「あ、それもそっだねえ」

小野塚さんは何処からか二つの盃を取り出したが、俺がそれに待
ったを掛ける。ここは死者の眠る場所、五月蠅くしては申し訳がな
い。

それもそっかど頭を掻く小野塚さんだが、その顔には若干の不満
と疑問が浮かんでいる。

言いたい事は大体分かる。でも、俺は小野塚さんの疑問に答えて、
応える手立てがあつたから落ち着いていた。

「でも、それだとあたいは何処で飲みやあいいんだい？ お預けだけは勘弁して欲しいんだけど」

「今更そんな事はしませんよ。実はすぐ近くに俺の家があるんで、そこで飲みましょう」

「は？ 家？」

小野塚さんは呆気にとられた顔をしている。それを見て、俺は苦笑い。

無理もないことだ。墓地のすぐ側に住む物好きな人間なんて、そうそういやしないのだから。

#

「何と言うか、本当に素人が建てましたって感じの家だねえ……」
「これでも完成までに一カ月近くかかったんですけどね」

小野塚さんが、自作の家と言うのも憚られる様なボロ屋を珍しい物であるかのように見回すので、俺は羞恥の思いを隠せない。

粗く削られた板を適当に並べ合わせて、縄と釘とで適当に立てられた壁。今にも枠から外れてしまいそうな玄関扉。そして、生まれたての小鹿の足の様に常に震え続けている柱たち。

吹けば飛んで、揺れば崩れそうなこのボロ屋を奇異の目で見ない人はいないだろう。自分で言っただが、泣きそうだ。

だがまあ、倒れはしない。俺が無理矢理にでも倒れないようにし

たからだ。

とりあえず、俺が扱える術の粹を集めて、この家を中心に陣を形成した。おかげで何とか今日まで倒れずに済んでいる。

他にも常に快適な環境で居られるように冷暖の術式や、幽霊が入ってこれないよう魔除けなんかも適当に組み込んでいたりする。

技術の無駄遣いだと師匠たちに怒られそうだが、俺に不満は無いから無問題だ。

長いこと留守にしたので、後で点検もおこつ。部屋の隅に置かれた回収物も、整理する必要があるそうさ。

「まあまあ、家を眺めたって面白くもないでしょう？俺たちのメインはこいつ」

「ああ、それもそうだね。うつつ、純米大吟醸ちゃん……」

俺が桐箱から大吟醸を取り出すと、小野塚さんの目がお預けを喰らった犬のそれに変わった。

待てと言ってみたくもあるが、後が怖いので俺は無言で栓を開け、小野塚さんが用意した二つの盃に酒をなみなみと注ぐ。

「それじゃあ、乾杯といきま……」

「ああ、ちよいと待っておくれよ」

「何ですか？あ、つまみならありませんからね。俺は貧乏なんで「それは残念だけど、違うよ。すぐに済むからちよつとぐらい我慢しな」

小野塚さんには言われたくないが、やはり怖いので黙っておく。

しかし、十中八九酒好きと思われる小野塚さんが乾杯を差し置いてまで重要な事とは何だろうか？

自然と俺の背筋はピンと伸びていた。

「何を硬くなってるんだい」

「いや、何か重要な事でもあるのかなって思いました」

「まあ、ある意味で大事な事だね。特に初対面であつたなら」

「初対面で？」

「ああ、そうさ。あたいはお前さんの名前をまだ聞いてない。あたいで良かったら、名前を教えてもらえないかい？」

あ、と俺は呟いた。そういえば、俺はまだ自分から名前を名乗っていなかった。

反して、小野塚さんは出会ったすぐに名乗ってくれていた。三途の水先案内人の小野塚小町と。

これはまた大変な失礼を働いてしまったものだ。しかも、相手にその事を指摘されたのだから、申し訳無さは倍増である。

「す、すみません。うっかりしました……」

「なに、そういう時もあるさ。それで、お前さんの名前は何て言うんだい？」

「はい。天辰砂子と言います」

「ふむふむ、天辰砂子ね。了解。あたいは砂子って呼ばせてもらうけど、お前さんもあたいのことは小町と呼んどくれ」

「……いいんですか？」

「姓で呼ばれるのは慣れてなくてね。それに、名前の方が親しみ易いだろう？」

「そう、ですね」

言葉と一緒に投げられたウィンクに軽くどぎまぎしながら、俺は何とか返事をした。

そんな俺の初心な反応を楽しんでいるのか、小町さんはにやにやしながら自分の盃を掲げた。俺も慌てて自分の盃を掲げる。

「さて、ようやくお互いに名前を呼び合う関係になったところで、乾杯といこうか」

「はい、乾杯しましょう」

「じゃあ、音頭はよろしく」

「えっ？ 俺が音頭を取るんですか？」

「さつきは自分から乾杯しようとしてたじゃないか」

それはそうだが、絶対にこういうのは小町さんの方が適任だと思うのだ。

と言っても、小町さんは絶対にしてくれないだろうから、仕方なく俺が音頭を取るのであった。

「んじゃあ、不肖の身ながら俺が音頭を取らせていただきます」

「良いよ、お前さんに任せるさ！」

「はいっ！ 新たな出会いにかんぱーいっ！！」

「捻りが無い！ かんぱーい！！」

いや、我ながら他に言う事あるだろうと突っ込みたくなる音頭であったが、小町さんも何だかんだ言って乾杯してくれたのでよしとする。

そんな事よりは酒である。盃の中にあるのは日本酒の最高峰と呼ばれる純米大吟醸。一杯目は贅沢にも一口で頂くことにした。

「……っ！ 美味いつ！」

「これは、確かに美味しい酒だねえ」

日本酒は幻想入りしてから飲み出したのだが、今まで飲んできた日本酒の中でも一番の味だ。

透き通る様な液体が喉を通った後には、体の中に薪をくべたかのようにカーッと熱が胃を中心に全体へ広がっていった。

味もさらりとして香りも良く、癖の強い鬼の酒とは違い、誰が飲んでも満足する味だ。

小町さんもあつという間に飲み干してしまったようで、俺はすぐにその空の盃に大吟醸を注ぎ足した。

「おっと、これはどうも」

「いえいえ」

「ほら、砂子。お前さんの酒も注いであげるからそれをこっちに寄こしな」

「ああ、こんな美人に注いでもらえるなんて役得だなあ」

「はっは、本当に口が上手いねえ」

そんな軽口を叩き合いながら、俺たちは酒を飲み進めていった。

最初の一杯こそ一気なんて贅沢をしたが、あの味を占めてしまった以上はそんな暴挙は許されない。ちびりちびりと少しずつ味わいながら飲んでいく。うん、やはり噂に違わぬ美味さである。

そんな風に俺が黙々と酒を飲んでいくと、小町さんが話しを振ってきた。

「というか、話しを振るのは大抵が小町さんで、俺は聞き役に徹していた。上司の愚痴はそろそろお腹一杯だ。」

「ねえ、砂子。お前さんにもう一つ聞きたい事があつたんだ」

「はあ、何でしょうか？」

「あなた、仙人から手解きを受けたらどう？ それも結構な長期間「分かりますか……」」

「そりゃあねえ、普通の人間は体の内に丹なんて作れないものさ」

何の話かと思ったら、意外な話題が上がったものである。

出来れば内緒にしておきたい事なのだが、ある程度の実力者であれば容易に見抜けるのだろう。

俺も予想していた事態ではあったので、特に焦ることもなく答えを返していく。

「まあ、成り行きって言うんですかね。たまたま仙人様方に出会って、気に入られて、そのまま修行を共にしたって感じで」

「成り行きで仙人の術を修めたか。お前さんも大概なやつだねえ…

…」

「いやー、修めたって言っても基礎中の基礎ですけどね」

とはいえ、色々とこれが役に立つのだ。

俺は霊力が多くはないので、それを内に留めて極力消費を抑える内丹術との相性が良かったりする。今では無意識で丹田に霊力を留めているぐらいだ。

おまけに仙術から妖術まで幅広く教えてくれたので、妖怪に襲われてもある程度の対処が出来るようになっていたりする。

俺からすれば仙人は（多少、付き合いは難しいが）感謝してもし切れない存在なのだが、小町さんの顔は優れない。

「お前さん、本格的に仙人になるつもりかい？」

「それはまだ分かりません。何時でも戻ってこいとは言われましたけど」

「ふーむ」

小町さんは相変わらず難しい顔をしている。俺は静かに盃に一口つける。

しばしの沈黙の後、小町さんは重たげに口を開いた。

「砂子、仙人の爺様婆様たちに教えられたかもしれないけど、仙人にとつてあたいたち死神は天敵だ」

「はい、聞きました」

「となると当然、あたいたも敵対するわけだけど……、」

小町さんは一瞬溜めをつくり、

「どうだい、あたいに負けない自信はあるかい？」

そう俺に問い掛けた。というか、明らかな挑発だった。

普段の俺であつたらうろたえるか勝てる訳がないと即答していたことだろう。

だが、今の俺ははつきり言って酔っ払いである。酔っ払いは時に無敵に成り得るのだ。

「仮定の話をするのもどうかと思いますけど、その時は返り討ちにしてあげますよ」

「へえ、大きく出たもんだね。精々、灰にならないようにだけは気を付けなよ？」

「小町さんも、俺にやられて泣いたりしないでくださいよ？」

「言ったな、この小僧め！」

「小僧つて、俺はとづくに成人して、うおっ！ こ、小町さん！？

あ、当たってますからっ……！！！」

「この程度でうろたえてるようじゃあまだまだよおおっ！」

酔っ払いというものは幻想郷であろうと外の世界であろうと厄介な存在である。

とりあえず俺は、九十九年後の死神の来訪に備えて、修行を怠らないようにしようと思っただけ思っただった。

#

酒もお互いイイ感じに回り、俺の呂律が怪しくなった辺りで小さな酒宴も御開きとなった。

何処に出しても恥ずかしいボロ屋だが、小町さんが居てくれた間は随分と華やかな雰囲気か漂っていた。

その小町さんがいなくなり、またみすぼらしいボロ屋になるのは非常に残念でならないが、別れもまた世の常である。

幻想郷はそこまで広大ではない。会いたい時にはまた会えるだろう。俺が直接、三途の川に赴くのも良いかもしれない。あまり良い顔はされないかもしれないが。

そんな風に考えながら、俺は特にふらつくこともなく去っていく小町さんを見送った。

さて、酒も飲んで気分が良い。寝るぞ！　っと、煎餅布団を敷き、早速寝に入ろうとする俺。だったのだが、

ズドンッ！！

という轟音と、『きゃん！』という犬のような悲鳴が聞こえ、一瞬で酔いが醒めてしまった。

何ぞと扉の隙間から外を窺うと、さっきまで飲み交わしていた小町さんが気絶していて、その着物の首元を掴んでいる少女がいた。どうやら彼女にやられたらしい。

少女は頭に中華風な帽子を被り、手には何やら棒切れを握っている。如何にも真面目そうでお堅い雰囲気纏っているが、今は怒り

のオーラの的なものも追加されている。

何だこの子、全力で関わりたくない！ と俺が思っていると、その思考を読んだかのように少女がこちらを見た。

扉越しだというのに、確かに視線が合っている。まるで俺の何もかもを見通している様なそんな瞳。

俺は小町さんが言っていた内容と、現状を照らし合わせ、確信した。

「あれが、閻魔様……」

確かに容姿は小町さんが言っていた様に可愛らしいが、それを全て引っくり返してしまえるあの雰囲気は駄目だ。

所詮は身内の評価、甘めに設定されるのは仕方ないか。それが敬愛する上司なら尚更だろう。

閻魔様はしばらくこちらに視線を向けていたが、俺が一向に出てくる気がないと悟ったのか、溜め息を一つ吐いて、小町さんをずると引き摺り去っていった。

「あー、怖かったあ……」

俺は扉を背にずると崩れ落ちた。たった十数秒、しかも扉越しに相對したただけだというのにこの様である。

特にあの目。本質は正反対っぱいが、誰かさんにそっくりだ。苦手に思うのは当然の事か。

「これでまた、死ねなくなっちゃったなあ……」

俺には過ぎた願いではあるけれども、願わくは、彼女以外の閻魔に裁かれないものだ。

第3話 彼岸行きのサンス・ボート（後書き）

軽いサブタイトル詐欺だ、これ……。

第4話 メイドたちの沈黙 前編

「その人間もどき、止まりなさい」

満月が実に狂的な魅力を振り撒いている中、俺は霧の湖に程近い洋館を訪ねていた。

紅い月に紅い館。通ずる部分が多く、俺の気分は知らず高揚していたのだろう。普段では言わない様な寝惚けた事も、つい口を衝いて出てきてしまう。

「俺はまだ人間ですよっと。こんにちは、門番さん。今日は月が綺麗ですね」

「時刻的にはこんばんはが正しいですし初っぱなから告白紛いの挨拶されちゃいましたが、こんばんは。えーと……」

「砂子です。天辰砂子」

「あー、そうでした。お久し振りですね、天辰さん」

門番さんが空気の読める人で助かった。素面であれば、俺はきつと近くの岩にぶつけてでも自分の頭をかち割っていたことだろう。いや、割と本気で。

流石は『気を使う程度の能力』の持ち主といったところである。

「はい、半年振りです。門番さんは相変わらずお元気そうで何よりです」

「ええ、朝の太極拳と適度なシエスタが私の健康の秘訣です」

「本当に相変わらずですね」

額のナイフの跡が実に痛々しいです。

「たはは。ところで、天辰さんは今日は紅魔館に何用で来られたんですか？ まさか私と話す為に来た訳じゃありませんよね？」

「実はそのまさかだとしたら？」

「ご冗談を。月夜に睦言を交わし合える程、私とあなたが友好的な関係を築けていたとお思いですか？」

「うがつ、出来れば失言を掘り返さないでいただきたいのですが…

…」

「あいや、これは失礼」

「まあ、門番さんの言う通りなんですがね。今日は当主様の方にお目通し願いたく来ました」

「レミリアお嬢様に……？」

つい数秒まで和やか(?)に会話を交わしていた門番さんだったが、俺の口から当主様という言葉が出た途端、顔を厳しいものに変えた。

同時に放たれる重圧に気圧されないよう努めながら、俺は門番さんに事情を説明する。

「はい。レミリアお嬢様には以前、大変な迷惑をかけてしまいましたので、遅ればせながら謝罪をと思ひまして」

「へえ、こんなに夜遅くに訪ねてくるなど不謹慎だとは思ひませんでしたか？」

「普通の相手でしたらそうなんでしようが、今回に限っては普通の相手ではなく夜の王。この時間帯の方が何かと都合が良いかと思ひて来ました」

「なるほど。その考えは間違つてはいません」

「もしかして、まだ棺桶の中でお休み中とかだつたりしますか？」

「今の時代は吸血鬼もベッドで寝るんですよ、知ってましたか？」

「じゃなくて、明日は特に神社に向かう御予定も無かつた筈なので、起きられていると思ひますよ」

「それは良かった」

無理に起こしてしまつて、謝罪する前に例のえげつない槍で串刺しにされては困る。

こつそりと安堵の息を吐き出す俺だが、門番さんは俺の様子よりも、俺が持っている物の方に興味を抱いたようだった。

「ふーむ。ということは、その手荷物はお詫びの品と言つたところですか？」

「ええ。つまらない物ですけど、手ぶらよりはマシでしょう？」

俺はそう言つて、何時かの神社訪問の時の様に手に提げられている袋を揺らす。

ガサリ、という少々重たい物と袋とが触れ合う音が夜の帳の中に響いた。

「あなたがつまらないと思うものであろうと、好奇心の強いお嬢様のことです。きっと喜ばれると思いますよ」

「そうですか。それを聞いて俺も気が楽になりますよ」

まあ、この当主様が見た目に違わず子供っぽいのは重々承知している。だから、今日の手荷物は例のアレに加えて、以前に無縁塚で拾った外の世界の珍品なんかも用意してきている。

俺から見てもガラクタが多いが、それはほら、リサイクルだ。リサイクルで吸血鬼の興味を引ける（かもしれない）のだから、これは一種のエコと言つても過言ではないだろう。

エコは地球を救う、俺の命も救うで大活躍だ。素晴らしいね、うん。

「そういう事でしたら、私がここを通せんぼする必要も無さそうです

すね。どうぞお客様、紅魔館へようこそ」

「はい、お邪魔します」

ギイツと重たげな音を立てながら、紅魔館不動の門（正面から入る人は滅多にいないからだ）がゆっくりと開いた。

日本ではまず見られないことなので、何となく格式を感じて身を引き締めてしまふ。と、俺が緊張気味に一步を踏み出そうとしたその時だった。

「おつと言い忘れていましたか……」

はい？ という言葉と共に、門番さんの方へ振り向く俺の目の前を、物凄い速さで何かが過ぎ去った。遅れてパンツという空気の破裂する音が一つ。

門番さんの方を見ると、何故か腕を振り切っけいらっしやった。そして、冷や汗たらたら俺へ、実にイイ笑顔でこう言った。

「万が一、億が一にでもお嬢様へ手を出すような事がありましたら、……分かってますね？」

「イエスマム！」

俺は本場のアメリカ軍人も賞賛するであろう声量と敬礼をもって返事をした。門番さんは門番であって、軍人でもましてや上官でもないのだけれど。

それに手なんて出すわけじゃないじゃないですか、蛮勇も甚だしい。あと、俺の好みはスタイルの良いお姉さんタイプですから。

「では改めて、紅魔館へようこそ」

「はは、はっ……」

「ああ、そうそう。前にも言った筈ですが、私の名前は門番さんで

はなく紅美鈴ですからー。お忘れ無き様にー」
「はいはい、了解しましたー」

これ以上この場に居ても徒に寿命を縮めるだけだと判断した俺は、そそくさと紅魔館の玄関へと向かうことにした。

しかし、門番さんにもちゃんと名前があつたんだよな。妖精メイドにいつも名前を間違えられてる姿しか見たことなかったんで、ついそんな失礼な事を考えてしまう。

「ちなみに、帰られる時に覚えてるかテストしますんで、そこどころも忘れないでくださいねー」

え、それはマズイ。ええと、門番さんの名前は……………あれ？
今しがた聞いたばかりだというのに、何故に思い出せない！？

うつつ、学生の時みたいにパツと出ないもんだ。これも年のせい
か？ って、ああっ、門番さんが見てる、見てるっ！ 待って、すぐに思い出しますから！

あ、あっ、あー……………。

#

さて、第一の関門であつた門番さん改め紅美鈴さん（もう一度聞き直した。笑顔がとても怖かった）を突破し、俺は吸血鬼の館である紅魔館の中を彷徨っていた。

この館、外観と異なり、中は相当に広い。というのも、このメイド長が時間を操る能力者で、ついでに空間も弄っているのだとか。

おかげで俺は絶賛迷子中である。いやだって、この館を訪れたのは半年以上振りだし、いつもは必ず案内が付いてたしで、つまり、現在の状況は仕方が無いのだ。

「うっ、幽霊は平気だけど、この雰囲気はなあ……」

幽霊は勿論のこと、亡霊まで目にしてきた俺には既に彼等への恐怖は無いに等しい。だが、人間である以上は恐怖を感じざるを得ない状況がある訳で。

草木もそろそろ眠りに入る時間帯に、光源は月明かりのみの薄暗い廊下を一人で歩く。これがその手のシチュエーションでなければ何だと言うのか。

聞こえる音も俺の履いている草履が立てるぺたんぺたんという扁平なものだけ。話し声は勿論、虫の声一つさえ聞こえやしない。

あ、何処からかゴーンという鐘の鳴る音が聞こえた。そういえば、この館には時計塔もあったんだっただか。

「懐かしいな」

思い返せば、俺の幻想郷ライフの始まりの地と言える場所は紅魔館であった。まあ、あの時は事態が理解出来なかったことやあまりの不気味さにすぐに出た訳だが。

あの時も今と似た様な状況だった。勝手の分からない館の中を宛もなく彷徨っていて、そしてそこで……、

「そこで、……ん？」

回想から俺を現実に引き戻したのは、一つの違和感からだった。

俺は絶賛迷子中だが、何も適当に歩き回っている訳ではない。この館の中でそんなことをしては間違いなく日が明けてしまうこ

とだろう。

それでは謝罪をする日が延びてしまう。何故なら吸血鬼は夜行性なのだから。それだけは絶対に避けなければならぬことだ。

というわけで、俺はこの当主様の駄々漏れの妖力を辿って歩いていた。現代風に言えば、自分の感覚のみを頼りにした逆探知である。

大き過ぎる妖力は、それだけでかなり目立つもの。この当主様は今の俺からすれば、さながら目印の様なものだ。

決して口にはしないけど！ 壁の染みにはなりたくないからな。いや、これだけ紅いと逆に目立たないか……。

閑話休題。

さて、その大き過ぎる妖力を頼りに歩き回っている俺だったのだが、一つ問題が生じてしまった。

何とまあ、俺の感覚にもう一つ大きな妖力が引っ掛かってしまったのだ。しかも、何かこっちに近付いてきているっぽい。

「えっ？ まさかお出迎えとかじゃないだろうし、だとしたら誰だ？」

あの幼く尊大な当主様が、わざわざ俺を出迎える為に自分の椅子から降りるとは到底思えない。妖精メイドの一人でも差し向けてくる方がまだ納得出来るというものだ。

しかし、感じる力は妖精メイドなんかとは比べ物にならない程に強い。明らかに異なる訳だ。

「うん？ これって……」

では、一体誰ぞと思いながらも廊下をペったらペったら歩いていると、俺はふと既視感を覚えた。この状況、その後の展開に覚えが

あつたからだ。

「確かあの時はあそこから……」

目の前にあるのは、この館の中であればそれこそ腐る程に存在するただの廊下の一つ。だが、俺には確かに見覚えがある廊下であった。

いや、見覚えがあるというよりは、記憶に刻まれていると言った方が正しい。何故なら、この廊下の先の突き当たりの角、そこで俺は初めて幻想郷の住人と邂逅を果たしたのだから。

「……近付いてきてるな」

思考を続けている内にも、妖力の持ち主は段々と俺との距離を縮めてきている。感覚頼りではあるが、そう遠い距離でなくなっている。

俺は思考の為に何時の間にか止まっていた足を動かしながら、少し懐かしい光景を思い出していた。

見たこともない不気味な館を一人不安げに歩いてきた過去の俺。暗い廊下の先に一つの角を見つけた。何があるかも分からない恐怖を抱えながら、そこを曲がった。

そして、そこにいたのは何と……、

「止まった……」

遂に妖力の持ち主との距離が目と鼻の先にまでなった所で、あちら側の動きが唐突に止まった。ちょうど角を曲がった先で、だ。

ここにきて俺の中でその正体の目星が付いた。いや、既に確信したと言ってもいい。

そして同時に、俺の中で場違いとも思える反骨心が湧いてきた。

俺はあの時の俺とは違うのだ。何時までも力もだと思ってもらっては困る！

そんな思いと共に、俺は勢い良く角の向こうに飛び込んだ。

「そこだっ！ ……あん？」

が、そこには俺が思い浮かべていた姿は無く、冷たく硬質的な床だけがあった。

そんな馬鹿なと思えば床にしゃがむと、微かだが確かな妖力を感じた。じゃあ何処にと思った瞬間、背後から圧倒的な妖力が吹き付ける。

反射的に振り返るよりも速く、

「ほーるどあーっぷ！」

「……っ！」

背中に何かを押し当てられた。

動いたら死ぬ。そんなフィクション染みた事を、冗談でも何でもなく、俺は濃密に感じた。

「後ろの正面だーれだ？」

その声は若干舌つ足らずだが、何処か蠱惑的で、まるで身体と精神の釣り合いがとれていない様な、そんな歪な声音をしていた。

しかし、その声の主こそ俺が予想していた正にその人でもあった。

「……妹様」

俺は危機的状況に陥りながらも、不敵に笑う主人公気分でそう答えた。実際は三流もいいとこの小悪党っぽい情けない顔が、磨き上

げられた床に映っていたが……。

と、背中から押さえ付けていた何かが離れ、俺の体は動くことを許された。一気に弛緩する俺を茶化す様な声が、二人しかいない廊下に響く。

「大正解、君は天才だ」

首を精一杯捻った先には、あの時と変わらず、指を銃の形に構え、けらけらと愉しげに笑う悪魔の妹がいた。

#

「砂子はその時からちーっとも成長してないのね」

「いや、決してそんな事は……」

「んー？」

「はい、全くもってその通りにございます」

『あ？何か意見するの？この私に？』的な顔をされたので、俺は速やかに意見を取り下げた。

俺の作戦は常に『いのちをだいじに』である。プライドでおまんまが食えりゃあ、今こんなに苦勞をしていない。

「早く私の相手が出来てくらくらになつて欲しいものねー」

「いやはや、一体、何十何百年かかるやら」

「百光年くらい?」

「妹様、それ年数ちやう。距離や」

「そして、砂子をぐつちやくちやのミンチにしてー」

「わー、俺も豚さんや牛さんの仲間入りかー」

「ハンバーグにしたら美味しそうじゃない? あ、ソースは砂子の血で」

「ハンバーグの比率は、豚肉と牛肉で半々がベストらしいですよ?

あと、俺を食ったら間違い無く腹を壊しますので駄目です」

「あー、ハンバーグ食べたくない、怖い怖い」

「さいですか。では、こちらのビスケットなどお一ついかが?」

「私を物で釣ろうなんて安く見られたものね。コイン一個じゃ命だつて買えないつて言うのにさ。いただきまーす」

そう言つて、妹様は俺の手に握られていたビ コを奪い取つた。

端から聞いてれば頭の痛くなるような会話だつたらうが、俺はもう慣れたものである。むしろ俺は、この言葉の応酬を楽しんでいる節さえある。

だつてこの妹様、下手な漫才師よりも合いの手が上手なんだもの。言葉のチョイスがちよいと危険球気味だけど。

さて、この若干メンヘラもといメルヘン思考な少女。彼女こそ俺が幻想郷で初めて出会つた人物であり、紅魔館当主の実妹、フラン ドール・スカーレットである。

種族：吸血鬼。容姿：金髪幼女。年齢：495歳以上。そして、その生涯のほとんどを気が触れているという理由で、地下室に幽閉されて過ごしたという剛の者だ。

何という属性過多かと初めは思ったものだが、幻想郷じゃあさして珍しいことでもなかった。未亡人の口リ型神様だつているような

所だしな。

初めて会った時は、俺が何かもう色々とパニックを起こして逃げ出してしまい、それを鬼ごっこ勘違いした妹様が追いつけるといふ謎の展開が紅魔館内にて繰り広げられた。

猟犬に追われる狐の気分を味わった俺だが、どんな運命の気紛れか殺されずに済み、現在の様な良好な（だと信じている）関係が続けられている。

と勝手に思っていたのだが、どうやら妹様はお気に召していなかったようだ。口元にビスの欠片を付けながら、妹様が俺に物申す。

「前から思ってたけど、その丁寧語はやめて、気持ち悪い。初めて会った時みたいにて良いから」

「面と向かって気持ち悪いって言われた！……いや、あの時は状況が分かってなかったのもありますし、妹様はレミリアお嬢様の妹なんですからあんまり馴れ馴れしくするのは……」

「あいつの事はいいからっ！ 言わないときゅってしちゃうよ？」

何処をとは言わないけどさ？」

「それで何となく察してしまう自分が嫌になるな」

聞いただけでヒュンってなるじゃないか、何処がとは言わないけどさ。

「はあ、分かった。こんな感じでいいかな、フランドール？」

「んー。何かまだ気持ち悪いけど、大丈夫かな」

「何だろうな、腹の底から湧き上がってくるこの感情は……」

「それはきつと恋さー」

「またまた御冗談を」

「んふふー、愛し合ってみる？ いいよ、全力で可愛がってあげるから。砂子もちちゃんと応えてね？」

「俺に背負い切れない重さの愛は謹んで遠慮させていただきます。つていうか、いくら何でも火遊びが過ぎるだろ」

「あれ、砂子は知らなかったっけ？ 私こつ見えて火の扱いは上手いんだよ？」

「お前さんがいくら火の扱いに長けていようと、大火傷するのは主に俺なんだよ……」

俺の言っている意味が分からないといった風に首を傾げるフランドル。こついった世間知らずな部分が、彼女の箱入り娘足る所以である。

万が一にでもその様な関係になれば、まず俺は火傷程度では済まないだろう。肉体的・社会的に抹殺されること間違いないし、大人しく神社の娘でも紹介するのが吉と脳内御籤で出た。

「で、砂子は何でここにいるの？ あまりにも私に会わないから、フランちゃん成分が枯渴しちゃったとか？」

「何て有毒性の強そうな成分だろう。そんな危険物を欲した覚えは一度も無いよ」

「その毒は蜜より甘く、麻薬よりも依存性が強い……」

「麻薬捜査犬を呼ぼう。一発で逮捕されちまいますぜ？」

「うちにはそこらの駄犬よりよっぽど強くて優秀な犬がいるから大丈夫」

「ここに迷子がいるんだけど、案内してくれるお巡りさんを知らないか？」

「あんまり五月蠅いと首を絞めちゃいそう」

「にゃあにゃあ泣くのは自重しよう。キャラ的な事も考慮して」

「ちなみに、行き先は何処へ？」

「ちよいとハッピーエンドまで」

「うわぁ……」

「え、そこでドン引きしちゃう？」

そりゃあ、俺が主人公の器じゃないのは分かってるけどさ。これでも傷付き易いんだぞ？ 嘘だけど。

って、ああもう、話しが進まない！ フランドールめ、引き籠りの癖にノリが良過ぎるだろ。

「まあ、冗談はこれくらいにして。今日ここに来たのは、俺が前に起こしてしまった異変の謝罪の為だよ」

「ああ、あの異変って言ってもいいのかわからない程に小規模で、異変を起こした当事者が一番置いてきぼり喰らったアレの？」

「……詳しい説明感謝します、解説のフランドールさん」

「でも、今更って感じもするんだけど。私も砂子に言われるまで思いつけなかつたし、気にしてないよ？ 時効でいいんじゃないの？」

フランドールの提案は実に魅力的だった。彼女の瞳を覗いても俺を責める様なものは見えず、純粹にそう思っているのだろう。

俺だつてそうしたい。喧嘩をしてもまた自然と友達の輪に入っていく様に、知り合いたちとまた馬鹿をやりたい。でも、その為には、

「それは俺が勝手に決めていい事じゃないよ。フランドールみたいに気にしないと云う人がいても、俺を恨んでいる人だっているかもしれない。

それはお互いに辛いじゃないか。一方は何処に行ったかもしれない相手を恨んで、もう一方は誰に恨まれているのかと悩みながら日々を過ごす。まさに負の連鎖つてヤツさ。

俺はその連鎖を断ち切りたいんだ。自分が作り出したからこそ、俺がやらなくちゃいけない。だから、俺は疎まれようが謝って回ろうと思つている。俺なりのけじめだな」

長々と恥ずかしい事を並べ立てたが、一切の嘘偽り無い俺の本心

である。

「フランドールは分かった様な分かっていない様な微妙な表情をしている。まあ、極端に他人との関わりが少ない彼女には仕方の無い事か。」

「ふーん。マメだねえ、砂子は」

「博麗の巫女にも同じ事を言われたよ」

「人間って面倒な事が好きなのね。咲夜も暇があれば掃除してるし」「いや、彼女の場合は仕事だからな」

「フランドールの言う通り、確かに人間という奴は面倒事が好きだ。今の俺の様に、人間関係というどうしようもない束縛にいつも四苦八苦している。」

「だが、どうしてか人はそれを断ち切ろうとはせず、複雑に絡み合ったそれを元に戻そうと日々奮闘している。そこに魅力を感じるのは、俺が人間だからだろうか？」

「目の前で複雑そうな顔をしている超ベテランの引き籠り少女にも、いつかそんな悩める時がやって来るかもしれない。」

「その時は是非とも先達としてアドバイスしてやりたいものだ。先ずは酒を飲めるようにならなきゃだな、フランドール。」

「そーいう事なら連れて行ってあげてもいいよ、お姉様のいる所」

「分かるのか？」

「さすがにこの館の中くらいなら私だって知ってるわよ」

「いや、それもだけど、俺が何処に行きたいのかってこと」

「ああ、それ？ だって、砂子ったらお姉様の妖力の方へあっちこっちふらふら歩いてるんだもん。分からない筈がないわ」

「ふむ、つまりはずっと俺のことを見ていたという訳か。」

「このストーリーカー吸血鬼」

「それは私じゃなくてあいつに言って頂戴。ネーミングセンスが酷いなんてものじゃないわ」

「よく分からんが、道案内を頼む」

「頼まれたー」

機嫌良さげに上下へ揺れるフランドールの翼を見ながら、俺は彼女の後をゆっくり付いて行く。

「そういえば、お前は俺の後をずっと付いて回ってたんだよな」

「そうだけど、それがどうかした？」

「いや、妖力はどうやって抑えてたのかなって思ってたさ」

「そんな事？ ちよいと魔法を使って隠してただけよ」

「ほう、魔法とな」

確か他にも何人が居たな、魔法使い。そんなファンタジー要素がごろごろ転がっているとは、流石は幻想郷か。

「うふふ、リアル魔法少女だよ？ 興奮する？」

「興奮するどころか、酷く夢を壊された気分かな」

「砂子って偶に凄く命知らずよね……」

「そうか？ うーん。知らずに死亡フラグを建てるのも怖いし、良かったら魔法を教えてもらえないか？」

「魔法少女を馬鹿にする様な男に教える魔法なんて無い！」

断られてしまった。しかも結構理不尽な理由で。いや、だってなあ……。

俺の頭の中にポップな字体で『魔法少女バイオレンスふらん』
魔法少女ふらん カニバ』という文字が浮かんでは消えた。

何だろうね、この噎せ返るような血臭と大きなお友達臭は……。

「危うい……」

「何!？」

「いや、独り言……」

俺はそれ以上は何も言わず、ぶんすかと肩を怒らせるフランドー
ルの後を追った。

第4話 メイドたちの沈黙 前編（後書き）

後編へ続きます。

第5話 メイドたちの沈黙 後編

「はい、着いたよ」

「え、ああ、本当だ」

フランドールの後ろを付いて歩くこと数分。ようやく当主様の居る部屋に着いた。

言われてみれば確かに覚えがあり、この部屋で間違い無いだろう。まあ、それは良いのだが……、

「……何？ 入らないの？」

「いや、入る入る。今すぐ入ります、はい」

どうやら先程の件をまだ引き摺っている様子のフランドール。苛々の為か、床を爪先で叩いているのだが、ピシピシとひび割れているのが地味に怖い。

廊下を歩いている間も、あれだけの大車輪振りを見せてくれたフランドールの舌が回ることには無かった。お陰で二人分の足音が実に響くわで、気不味い事この上なかった。

非常に危うい状態である。フランドールの機嫌的に、俺の生死的に。これ以上の不用意な発言・行動はすなわち死に直結すると俺は確信した。

何時爆発するかも知れぬ爆弾を前にした処理班の様な心情で、俺は数回のノックと共に目の前の扉を開けた。

「失礼しま……」

そして、俺は目の前に広がる光景に声を失った。

別に部屋の内装が紅一色という悪趣味ながらも、豪華なシャンデ

リアや高そうなアンティークで彩られていることに驚いたとか、そんな俗な理由ではない。

では、部屋の中央にある椅子に鎮座するこの館の当主様であり吸血鬼の真祖とも噂される、レミリア・スカーレットに今更になって畏怖を抱いたかと言えば、そうでもない。

ならば、何故に俺が呆けているかと言うと、

「んゆっ……。さくや、こつちゃの、おかわり……。んにゃ……」

爆睡していたから。この上ない程にレミリアお嬢様が爆睡していたからだ。しかも、鼻ちようちん付きで。

「え、えっ?」

俺の口からは特に意味の無い疑問詞ばかりが吐き出されていく。自分の状態を確認出来るなら、間違い無く『混乱』の二文字が表示されているだろう。

門番さんが起きていると太鼓判を押していたから、俺も全く心配せずに来た訳だが、大きく裏切られる形となってしまった。

それに、俺が知っているお嬢様は常に不遜な態度を崩さなかったので、こんなに無防備な姿を見てしまい、少々戸惑っている。

「うーん、無理矢理に起こすのも気が引けるし……。どうしたもんか……」

「れえいむ……。おちゃー……」

その場で突っ立っているのもどうかと思い、とりあえず断りを入れて入室してみたのだが、一向に起きる気配がない。

むにゃむにゃと口を動かし、何事か寝言を呟くお嬢様。相手は吸血鬼であり当主様なのだが、それを差し引いても普通に可愛らしい。だからこそ、こちらの勝手な都合で起こすのも気が引けてしまう。

「どうしたら良いと思う、フランドール？」

俺は堪らず、一緒に部屋へ入ってきたフランドールに話を振ってみた。彼女はお嬢様の親類故、こういつた時の対処は俺よりも適任であると考えたからだ。

……ここで何とかフランドールとの会話の糸口を掴みたいという思いも、無くはない。

「普通に起こせば良いんじゃないの？」

「いや、それをしても良いのか悩んでいるから、お前に話を振ったんだけど……」

しかし、返ってきたのは実に簡潔明瞭にして高難易度な答えであった。それ以外の答えを期待した訳だが、どうやら相談する相手を間違えてしまったようだ。

「悩む必要なんで無いじゃない。砂子はお姉様に用があつて、肝心の相手は爆睡してる。だったら、叩いてでも起こす以外に選択肢なんて無いでしょう？」

「いや、確かにそうだけど……」

フランドールの言う事も尤もであると分かってはいるのだけれど、他にもっと良い方法があるんじゃないかとうじうじ考えてしまう。

しかし、俺がそんな優柔不断な態度を続けていたのが悪かった。

ピアノ線の如く細くて危険なフランドールの堪忍袋の尾が、遂に切れてしまったのだ。

「あああああつ！ ぐちぐちぐちぐちうるっさいっ！ こうすればいいだけでしょっつ！？」

「お、おい、フランドール……？」

人形染みた容姿からは想像も出来ない雄叫びを上げたフランドール。何を思ったか、彼女は自分の回りに数え切れない程の弾幕を生み出している。

一発一発が半端でない密度の妖力で固められていて、正直、俺がどうこう出来る様な代物ではなかった。それでも、己の直感に従い、何とかフランドールを止めようとしたのだが、

「何時まで寝てるつもり！？ さっさと起きろ、この馬鹿姉があああつ！！！」

弾幕は無情にも彼女の姉のもとへ殺到した。

飛び交う弾幕、吹き飛ぶ家具やら何やらの破片、吹き上がる煙。絢爛豪華であった部屋は、一瞬にして戦場へと様変わりしてしまった。

あまりの事態に引き続いて呆ける俺だったが、今度は復帰が早かった。慌てて下手人であるフランドールに詰め寄る。

「フ、フランドール！？ お前、自分の姉に何て事して……！！」

「ふんっ！ 吸血鬼があれくらいでくたばる訳ないじゃない。ほら、

後ろ」

憎々しげにそう宣のたまうフランドールの言葉に釣られ、俺は後ろを振り返った。

視界一杯の煙は相変わらず、と思っていたら、白くて細い腕がそれを一瞬にして薙ぎ払った。一変にして晴れた視界の先には、

「随分と手荒な起こしてくるじゃないの、フラン？」

あれだけの弾幕を浴びたというのに傷一つ無く、荒れた床の上で傲岸不遜に仁王立ちしているレミアお嬢様がいた。

寝ていた時とは正反対に何者も近付けない風格がその身から醸し出され、卑小の身である俺は思わず吞まれてしまった。

だが、親類だからなのか、ただ単に面の皮が厚いだけなのか。フランドールは一切物怖じすること無く自分の姉と対峙する。

「あら、おはようございます、お姉様。弾幕で起きられる気分はいかがでしたか？」

「ええフラン、まったくもって最悪の気分よ。もっとこう、起こし方ってものがあるんじゃないかしら？」

「いえいえ、あれが私が考える限り最善の起こし方でしたわ」

「へえ、理由を言ってみなさいな」

「だって、お姉さまっいたらあんまりにもぐっすり眠ってるんですけど。生半可な起こし方じゃあ意味が無いと思いましたわ。それに…」

…」

一旦間を置き、フランドールは俺の方を見て言った。

「いくら相手が砂子とはいえ、客人は客人。それを前にして眠るなんて醜態もいいところ。だから、お姉様に恥をかかせまいと健気に奮闘する、愚妹なりの気遣いですわ」

……よくもまあ思ってもない事をぺらぺらと吐き出す口である。何処の誰が、姉の事を想って非殺傷の弾幕をぶち込むだろうか。それを気遣いと言うのなら、俺は今すぐにでも銀製の弾丸をフランドールに撃ち込んでやる所存である。

「……そう、あれがあなたなりの気遣いなね。分かったわ、そう思い込む事にするわ……」

「まあ、起こしてって私に頼んだのは砂子だけだねー」

これにはお嬢様も呆れたのか、額に手を当てて頭を振った。

そして、フランドールよ、何を俺にキラーパス回してるんですか。確かに起こす方法はないかとは聞いたけど、あんな起こし方を頼んだ覚えは断じて無い。

「……苦労しているのね、お前も」

「……レミリアお嬢様こそ」

同じ苦労を感じる者同士、通じ合う時があるものだ。俺とお嬢様の間で、奇妙なシンパシーが生まれてしまった。

そして、フランドール。お前は何で面白くなさそうな顔をしているんだ？俺が八つ裂きにされる展開を望んだとか？ありうる……。

何となく空気が緩んだところで、本題に入るとしよう。雑談に興

じて帰るつもりなど毛頭無いのだから。

お嬢様も俺の意思を汲んでくれたのか、指を一つ鳴らす。すると、何処からともなく豪華な椅子が二つ現れ、お嬢様方二人は当然の様にそこに座った。

「さて、何だかごたごたしてしまっただけど、改めて挨拶をするのでしょうか。こんばんは、砂子。お前と会うのも半年振りかな？」

「こんばんは、レミリアお嬢様。そうですね、最後にお会いしてからちょうどそれくらいになります」

「その半年で大分良い面構えになったじゃないか、ええ？」

「そうですね。自分じゃあその辺りはとんと分からなくて……」
「ビビりは相変わらずだしねー」

挨拶から始まった談話であったが、お嬢様が先程の件を引き摺っていないようなので助かった。

逆に、フランドールは構ってもらえないからか、また拗ねている。実に対照的な姉妹である。

と、そこで俺はある事に気付いた。普段の紅魔館ではまず見られないであろう光景、それが目の前にあった。

「ごほん！ それはそれとして、咲夜さんは何処に？ お嬢様が咲夜さんを連れていないというのは珍しいですね」

「ああ、咲夜か。あれには少し席を外してもらってるんだよ」

「何故？」

「なに、今夜ここにお前が来るといふ運命を私が見た。そして、咲夜とお前を会わせるのはまだ早いと判断した。ただ、それだけの理由よ」

「……ああ、なるほど」

お嬢様の話を聞いて、そういう事かと納得した。同時に、自分が

まだ他人の人生を振り回していたことを思い知らされ、胃の辺りに鈍い重身を感じた。

分かっているつもりだった。しかし、現実とはそう甘いものではない。隙あらば容赦無く過去の自分を責め立ててくる。

辛い、受け止めるしかない。今はとにかく、目の前の懸案事項を済ませることが先決。ここで誤れば、その他の謝罪すら覚束無くなってしまうだろう。

俺は心中で今一度気合いを入れ直した。

それにしても、俺が今夜ここに来ると分かっていたとは驚きだ。

よくよく思い出せば、ここは確か謁見室だった筈。最初から俺がここに来るといふ事が分かった上での部屋のチョイスという訳か。

当人は手元に紅茶が無いと落ち着かないのか、ふらふらと手を宙に彷徨わせているが、流星は『運命を操る程度の能力』を持つ御方である。

と、俺は内心で感心しまくっていた訳だが、ここで天の邪鬼娘がまた本領を発揮する。

椅子の背もたれに手を掛け、つまらなそうにロデオごっこに興じていたフランドールだったが、姉の口から運命という言葉が出た途端、皮肉げに言い放った。

「運命運命って、よく飽きもせず言い続けるものよねえ。知ったか振りの癖にさー……」

「……何か言ったかしら、フラン？」

「きつと空耳ですわ、お姉様。私たち吸血鬼の耳は兎ほど長くはないんですもの」

「ええ、そうね。私の気も兎の耳ほど長くはないのだけれど、知っていたかしら？」

「へー、そうでしたの？ 私は495年も地下に閉じ込められてたから、ちーっとも知りませんでしたわー」

「あら、じゃあ今この場で教えてあげようかしら？　ちょっとだけ痛いかもしれないけれど……」

「じゃあ、私もお姉様に身の程つてものを教えてあげますわ。コンティニュー無しの実践形式でねえ……」

仮初の笑顔を貼り付け、二人の吸血鬼姉妹がうふふうふふと笑い合う。

部屋には姉妹の妖力がこれでもかという程に溢れ、このままでは飽和状態を超えて爆発でもするんじゃないかと危機感を覚えさせる。そして、そんな渦中の真っ只中にいる俺が無事である筈がない。身体は震えて、嫌な汗が一向に止まらない。

どうすると中身の無い疑問ばかりが頭の中を駆け巡る。このまま姉妹喧嘩に発展してしまつては謝罪どころではなくなつてしまふ。それだけは阻止せねば……。

何か二人の気を引くような物はないだろうか、俺は藁にも縋る思いで手元の袋の中を漁つた。

そして、何か何かと焦る俺の手はソレに触れた。本当にくだらない玩具ではあるけれど、この場で効果がありそうなのはソレくらいだった。何より、もう選んでいる時間がない。

一触即発の空気が強まる中、俺は祈る様な思いでソレを引いた。

パンッ！！

ぎゅっと閉じていた目蓋をゆっくりと開くと、火薬の匂いに混じって色とりどりの紙吹雪がひらひらと舞っていて、呆気にとられた

表情で俺の方を見る姉妹がいた。

何故だか無性に恥ずかしさを感じながらも、俺はわざとおどけた風を装い、ソレの名前を言った。

「びつくりしました？ クラッカーって言うんですよ、これ。やっぱり日本のちゃっちいのと違って、本場のは派手だなー」

「クラッカー……？」

「はい、クラッカー。外の世界のパーティーグッズです」

袋の中に雑多に詰め込まれていた小道具の一つである。無駄に外国仕様なのはご愛嬌。何時入れたのか自分でも定かではないが、今回はこれに救われた。

お嬢様は何時の間にか妖力を引っ込めているし、フレンドールはすっかり毒気を抜かれた顔をしている。どちらも矛を収めてくれたようだ。

「……見苦しい所を見せて悪かったわね」

「いえいえ、気にしないでください。それに、喧嘩するほど仲が良いいと言いますし、俺が帰った後にも存分に取っ組み合ってください」

「……ふん」

気不味そうにこちらを見てくるお嬢様と、言われなくても分かっているとはかりにそっぽを向くフレンドール。

何だかこの姉妹を見ると、某ネコとネズミのアニメを思い出してしまう。仲良く喧嘩しなって感じて。

「そうするわ。じゃあ、その前に砂子、お前の用件を済ませてしまおうか」

「はい。俺が今夜ここにお邪魔させていただいた用件は、前の異変

についての謝罪です」

「異変……。ああ、あれか」

さて、大分遠回りしてしまったが、ようやく始まった本題。お嬢様は少し思案し、すぐに納得した表情を浮かべた。

「また古い話を持ち出してくるじゃないか。つい最近に起こった、聖人が現れたとかいう異変かと思ったよ」

「あれは俺が関与する隙は一切ありませんでしたし、比べるようない程に規模が違い過ぎます」

「だろうねえ。聖人と一介の人間が起こした異変じゃあ、ネームバリューの時点で差が出来るしまう」

「そうですね。それに、俺の起こした異変は生憎とほとんどの人が気付かない内に始まって、そして、終わりましたから」

「ああ、私も紫の奴に言われるまでは気付かなかったよ。あれは余りにも静か過ぎた」

懐かしげに語るお嬢様だが、俺からしたら黒歴史も同然である。何せ、あのスキマ妖怪が動く必要があると判断したのだから。

「あの異変では少くない人々に悪影響を与えてしまいました。それはここ、紅魔館に住むあなた方にも同様に」

「そういえば、そうだったねえ」

「あの異変は俺の無知と未熟が引き起こしてしまった最悪の産物でした。力の使いに慣れた今、遅まきながら謝罪をして回っています」

「なるほど。半年も姿を見せなかったお前が突然やって来た理由はそれだった訳か」

「その通りです。安易に許されるとは思ってはいませんが、本当に申し訳ない事をしたと思っています。すみませんでした」

謝罪と共に頭を下げる俺と、俺の言葉に得心が行ったとばかりに
頷くお嬢様。すると、彼女は神妙な面持ちでこんな事を提案してき
た。

「よし、分かったわ。要は、紅魔館の面子を誑かしたお前を張り倒
せばいいのね？　K O?」

「いや、その解釈はあまりに雑把が過ぎるといっつか、色々と間違っ
てます」

「ああ、O Kだったわね。じゃあ仕切り直して、要は紅魔館の面子
を誑かしたお前を張り倒せばいいのね？　O K?」

「だから違いますって。それに残念ながら、俺はN Oと言える人間
です」

「あらそう。それは残念ね」

「何故にそこであからさまに残念がりますか」

いや、殴らなきゃ気が済まないって言うのなら甘んじて受けます
けどね？　でも、お嬢様からそんな雰囲気は感じないし、俺も痛い
のは勘弁したいし……。

「ねえ、グーでいい？　グーで!」

「こつちも何かやる気満々だ!？　お前はロデオこつちでも続けて
る!」

N Oと言ってるじゃないか!　吸血鬼にグーで殴られるとか、K
O (knock out) どころかD . O (die out) 確定
じゃないか。

どうしていがみ合ってる癖に、こつちう所は気が合うのか。あれ
ですか、S っ気ですか。なら納得だ。

俺が心の内で戦慄していると、またもお嬢様の方から口を開いた。

「まあ、冗談は置いておくとして……」

「あ、冗談ですよ」

「五分の一くらいはね」

「実は結構本気でしたか？」

「ええ。お前のその負け犬根性が染み付いてる部分が癩に障ってね」

途端、先程のおふざけの混じった雰囲気は彼方へと吹き飛び、俺の目の前にはカリスマの権化の姿が現れた。

「確かにお前は異変を起こし、幻想郷の住人に悪影響を与えたんだろっ」

「……はい」

「そして、その中には私やフラン、咲夜も含まれていた。それに関しては、私も謝罪に値する事だとは思っ」

「じゃあ、俺の何が癩に障ったと？」

「分からないかい？ 砂子、お前が自分の起こした異変に関して負い目を感じている事だよ」

圧倒的な畏怖に膝を屈しそうになりながら、俺は何とかお嬢様の言葉の意味を読み取るうとしていた。

謝罪をすることは間違っていない。だが、異変を起こしたことに負い目を感じる事は許されないとはどういう意味だ？

そんな疑問は表情に表れていただろうが、お嬢様は特に気分を害した風でもなく言葉を続けた。

「お前には前に話したかもしれないが、私は以前に異変を起こしている」

「紅霧異変ですね」

「そうだ。そして、その異変の規模は幻想郷全体に及んだ。お前の

起こした異変よりも遙かに大規模に、目に見える形でな」

「……………」

「理由も自分で言うのも何だが、自分勝手なものだよ。吸血鬼にとって太陽は鬼門。それを隠してしまいたいと思うのは、当然だとは思わないかい？」

それは確かに分からなくもない。だが、俺には相変わらずお嬢様の言いたい事が理解出来なかった。

「私の身勝手から始まった異変。脆弱な人間は弱り、妖怪の幾許にも少なからずの悪影響を与えた異変だったと思うよ」

「お嬢様は、その事を後悔しているのですか？」

もしま、お嬢様も俺と同じ想いをしていたのかと思わず喰い付いた。だがしかし、

「後悔？ この私が？ するわけがないだろう」

心底呆れた様に、侮蔑する様に、不遜な態度を崩さず、レミリアお嬢様は言い放った。呆然とする俺に頓着することなく、彼女の話は続いていく。

「確かに巫女に痛い目に遭わされたりしたのは悔しかったさ。スペルカードルール上とはいえ、吸血鬼であるこの私が人間に倒されるとは思わなかったからねえ。」

だがね、砂子。私は異変を起こしている時、実に生き生きしていたんだよ。自分が妖怪としての本懐を遂げている、まさにそんな気分だった。

それに、異変自体は終息はしたけど、私は今の幻想郷連中との馴れ合う日常も嫌いじゃない。そう、異変が私にとっての転機だっ

たとも言ってもいいのさ」

お嬢様は一息にそう言った。彼女の異変に対する考え、それは俺とまったくの正反対であり、俺からすれば目から鱗の事である。

「だからこそ、無意識とはいえ自分の起こした事に対して負い目を感じているお前を、私は不快に思ったのよ」

「俺は……」

俺の何が気に障ったのかはここでようやく理解出来た。でも、俺にはとても共感出来るものではなかった。

反論するなど分不相応だと知って尚、言葉を吐き出さずにはいられなかった。

「俺は、レミリアお嬢様のようにには考えられません。迷惑をかけたのは事実ですし、ましてや俺は妖怪では……」

「それはお前が弱いからさ」

だが、お嬢様の言葉は俺の心にナイフの様にスツと刺さってくる。まるで凶星を突かれたみたいだと、他人事のように俺は思ってしまった。

「弱いから自分の起こした事に恐怖を感じるんだよ。暴論だけど、人であろうと妖怪であろうと、誰かを殺した時、弱ければ恐怖を感じるだろうし、強ければ何も感じなくなる。

お前も今より強くなった時に、過去に自分が起こした異変を思い出せばいいさ。その時には自分はまだ未熟だったと、きつと笑い話に思えているだろうからねえ」

まあ、それはお前が強くなっていればの話だが、とレミリアお嬢

様はくつくつと笑っていた。

そして、もう一度その深紅の瞳に真剣な色を浮かべて、俺に向かつて言った。

「砂子、自分がした事に負い目を感じるな。むしろ前向きに考えなさい。それが異変を起こした者としての礼儀よ」

「はい、レミリアお嬢様……」

共感は、出来なかった。それは俺が弱いからなのか。今はまだ分からない。

しかし、方針はより強固になった。強くなるう。そして、お嬢様の言葉の真意を、俺も何時か知りたい。

「ああ、喋りつ放しで喉が渴いたわ。紅茶は咲夜を外しているから飲めないし……」

「私も喉が渴いたな」

と、カリスマタイムは唐突に終わりを見せた。さつきといい、ONとOFFの切り替えが激しい方だ。

そして、その間は珍しく大人しくしていたフランドールだったが、何故か俺をじつと見ている。何だ？俺はさっきのカリスマに当てられて思考が鈍ってるんだが？

「砂子の血ってあんまり美味しくないのに、癖になる味だったわよね」

「そういえば、そうだったわね。砂子、お前の血を寄こしなさい」

「はい、お嬢様……って、あげませんっ！あげませんからっ！」

「あら、どうして？」

「だって、お嬢様は吸っても大半を溢すし、フランドールは加減を知らないしで俺が死にます！」

前にそれで貧血を起こして倒れたことがある。あの時は咲夜さんが介抱してくれたが、彼女がいない今では本当に死にかねない。

吸血鬼姉妹は揃って少々膨れたような顔をしているが、そんな事もあるうか？こちらの準備も抜かりはない。

「だから、今日はこちらを用意しています」

「それは、ワインかしら？」

「はい。日本酒も考えましたが、こっちの方がらしいかなと思いついて。お詫びの品として受け取ってはいただけませんか？」

「ふーん。ボルドーの赤ねえ……」

「あと、61年のヴィンテージ物だとか言われました」

「誰に？」

「香霖堂の店主です。交渉の末に何とか買い取ってやりました」

「ああ、あの店主ね。まあ、受け取ってやらないこともないわ。でも、グラスが……」

「グラスでしたらここに」

「お前は偶に恐ろしく準備が良いわよね……」

何事も備えあれば憂いなしである。お嬢様もよく見ると口元が緩んでいるので、喜んでくれてはいるようだ。

と、俺が部屋の隅に置いてあった机を運んでいると、またも横からの視線が。その視線の主は、やはりフランドールだった。

「どうした、フランドール？ 血ならやらないぞ？」

「そうじゃない。私もワインが飲みたい」

「え？ でも、お前、酒は飲んだことないんじゃないか？」

「だからこそ飲んでみたいのよ。何、飲ませてくれないの？」

「いや、いいけど。精々、飲まれないように気を付けてくれ」

そう言つて、俺は袋の中からも一つグラスを用意したのだが、実はこの時点で嫌な予感しかしていない。

だがまあ、フランドールにも迷惑をかけてしまったのは事実であるし、彼女にとつても良い経験になるだろうと思ひ、了承したのである。

俺も伊達に一年近くを幻想郷で過ごしていない。酔っ払いのあしらい方はそれなりに手慣れたもの。多少、フランドールが酔っ払つても大丈夫だろう。

「それじゃあ、給仕はお任せしようかしら？」

「はい、喜んで」

「砂子、クツキーは無いの？」

「ワインに合うかは分からないけど、ほら」

「本当に節操が無いわねえ……」

本当にねえと思ひながらも、今度はコルクの栓抜きを袋から取り出す。何でもありというか、何でもある状態だ。

ポンという小気味の良い音を立て、ワインのコルクが抜ける。すると同時に、品の良い香りが俺の鼻孔をくすぐった。

もしかしないでも、当たりのワインだったのかもしれない。あの偏屈店主が売る商品としては、珍しく見た目も中身もマトモだ。

「なかなか良さげなワインみたいじゃないか」

「そうですねえ。これはきつと期待が出来ますよ」

「それじゃあ、一つその味を台無しにしてみようか」

「はい？」

言つが早いか、お嬢様は俺の手を取り、手首を露出させて、そして、

「いったあああつ!？」

「我慢しなさい。男の子でしょう?」

「いや、この血の勢いは絶対に静脈までスッパリいつてますからっ
!!!」

「ああ、勿体無い勿体無い。何を垂れ流しているのかしら、まった
く」

そう言ってお嬢様は、俺の手首にグラスを押し当てた。当然、滴
る血はグラスを伝い落ち、中のワインを汚していく。

「ちよ、何をしてるんですか!? そっちの方が明らかに勿体無い
でしょう!」

「勿体無くなってるわい。カクテルよ、カクテル。語源は雄鶏の尻
尾だったかねえ」

「そんなマンガで仕入れたみたいなき知識の披露はいいですから。う
わあ、これ絶対に不味くなってますよ……」

「台無しにするって言ったでしょう。いいのよ、吸血鬼からした
らただの葡萄酒よりは血が混じった方が飲み易い」

「そうかもしれないですけど……」

「ほら、泣き言をごちゃごちゃ言わない。お前は大人しくフランの
グラスもカクテル風味にしていればいいのよ」

そう言われてフランドールを見ると、凄く嬉しそうな顔で俺の手
首を見ていた。もう何と言つか、これ以上横暴な事をされても何で
も許せる気分だ。

俺が諦観の境地に陥っているのを尻目に、お嬢様は言う。

「ここまででようやく謝罪の範囲よ。うちのメイドにまで手を出し
ただなもの、これくらいは安いもんでしょう?」

「そうですね……」

「分かったなら乾杯するわよ。砂子も突っ立ってないで自分の分を
用意しなさい」

「ありゃ、俺もご相伴に預かって良いんですか？」

「お前の持ってきたお酒だろう？ それくらい構わないわ。ほら、
フランもグラスを持って」

「言われなくても分かってますわよ、お姉様」

「どうだか……」

「やっぱり今ここできゅってしてあげる。それはもう惨めったらし
い下半身にしてやるわ……」

「生意気言つてすみませんでした勘弁してください」

「馬鹿を言い合ってないで、早くグラスを持ちなさい……」

呆れ気味なお嬢様の声に急かされるように、俺とフランドールは
グラスを持った。

俺たちがようやく乾杯の準備を終えたことで、乾杯の音頭がお嬢
様の口から発せられた。

「私は知り合いでもない神なんて存在は大嫌いなんだけど、今こ
の時だけは、この三人で杯を交えられることに感謝してあげてもい
いわ」

丸つきりクリスマス思考ね、とお嬢様は苦笑しながらグラスを
掲げた。俺とフランドールもそれに続いた。

そして、入ってきた時よりも少し荒れ果てた部屋の中に、三つの
音と声が響いた。

「『乾杯』」

ちなみに、俺の血入りカクテルは案の定、不味かったそうなのだが、もう一杯飲みたくなる癖があるのだとか。

俺の血は青汁か、と思わずにはいられなかったのは、外来人特有の性だろう。

#

さて、どうしてこのような状況になってしまったのだろうか？

「いざこー……。のうりよくつかいなさいよ、よえないじゃない……」

「駄目です。それに、俺にはどう見ても既に酔っ払ってるようにしか見えませんか？」

「よってない！ わたしはまだ、よってないわよお……」

お嬢様は酒に漬れ、

「あははっ！ あはははははっ！！」

「うおっ！？ こ、こら、フランドール！ 剣玉はそんな風に振り回して遊ぶもんじゃな、ぎゃあああっ！？」

「ほらほらー、よけないとみんちだよー？ はんばーぐだよー？」

フランドールは酒に酔って暴走していた。

甘かった。それはもうクリスマスプディングもかくやと言わんば

かりに甘い見通しだった。

まさかここまで姉妹揃って酒癖が悪いとは思わなかった。姉は絡み酒で、妹に至っては酒乱ときたものだ。面倒臭いことこの上ない。

「ちのがわるいわよー……。さーばーのくせにい……」

「人をファミレスのドリンクバー扱いしない。治りかけてるんですから、あんまり手荒にしないでください」

「なによ……。いさごのくせに、なまい、き……。んにゃ」
「あ、寝落ちた」

先ずは姉の方が陥落か。まあ、あれ以外にもばっかばっかと栓を開けていたから分からもない。問題は、

「いーさーごー。おねーさまにばっかばかりかまってないで、わたしのあいてをしるー」

こっちの酔っ払いだ。まさか、グラス一杯程度でここまで出来る。がるとは、妖怪にあるまじきアルコール耐性の無さである。

「何だ、いきなり構ってちゃんに成りおってからに。構って欲しければ、その得物を床に置きなさい」

「んー？ これはけんだまっていうおもちゃで、えものなんかじゃないわよー？」

「そんな事は持ってきた俺が一番知ってるよ。問題はその玩具をお前が持った時点で凶器になることだ」

剣玉がモーニングスターに早変わりなんて何処その狂戦士かと。

「ほーら、ふつーのけんだまだよー。こわくないよー？」

「そうだな。お前がそれを振り回してなければな」

「うふふ。あしたの日は、さくやにたのんでいさこのはんばー
ぐー！」

「俺を漬して食べる気満々じゃないかっ！！」

そう言ってフランドールは剣玉の剣の部分を上に振りかぶり、

「にゃっ！？」

遅れて引かれてきた玉の部分が頭に当たり、仰向けに床に倒れた。
見事なまでの自爆、阿呆だ。

「こいつも寝てやがる……」

普段の状態なら、間違ってもあの程度の衝撃で気絶する筈はない
だろうが、アルコールですっかり弱っていたみたいだ。

飲まれるなという俺の忠告はやはり無駄だった。すうすうと気持
ち良さそうに眠るフランドールが何かムカつく。

「やれやれ……」

とりあえず、床で寝かせるのもなんなのでフランドールの身体を
を抱え上げる。軽いなあ。

何処かに寝かせられる場所は、と部屋を見回してみるとかなり大
きめのソファがあったのでそこにポイ。

お嬢様の方も何時までも机に突っ伏したままは辛いだろうし、失
礼して抱え上げる。やはりこちらも軽い。ご飯はちゃんと好き嫌い
せずに食べているのだろうか。

そして、そのままフランドールの横に寝かせて完了。こうして並
んで寝ていると、猫鍋みたいな構図である。

「さてと……」

多少のトラブルはあったものの、用事は済ませた。となると、俺がこれ以上この館にいる必要は無い。

「帰るとしますか」

勝手にお邪魔して挨拶も無しに帰るのは失礼だろうが、見た目少女な存在が寝ている部屋で男が何もせずに突っ立っているというのも気不味いものだ。

酔っ払い吸血鬼姉妹については、真に勝手ながらこのメイド長に頼むことにしよう。

「後はお任せしました。そして、失礼しました」

誰もいない空間に向かって呟く俺。だが、あの完璧で瀟洒なメイドさんならきつと聞き届けてくれている筈だろう。

今度来る時は、彼女への謝罪込みのお礼をしなければならぬ。ベンスナイフとか幻想入りしてないかな？

「んー、あーっ……」

そんな馬鹿な事を考える一方で、俺は今日お嬢様に言われた事を反芻してみた。

やはり今の俺には理解出来ない。彼女のそれはまるで強者の理論であって、凡夫である俺にはまるで天上の言葉であるかの様だった。だがしかし、俺にも分かる部分はあった。それは、自分の起こした異変という現実から逃げてはいけないという事。

確かに、俺は異変を起こした事に対して負い目を感じてはいる。しかし、逃げてはいない。それを裏付けるのがこの謝罪だ。

自己満足と言われようと構わない。俺は自分の異変から逃げないという強さを得ているのだ。

そして、今日のそれも俺の強さを磨く為の一步であったと信じた
い。

「うん、頑張ろう」

誰に言うでもなくそう呟き、俺は吸血鬼の館を後にした。

「さて、お帰りなられる前にテストです。紅魔館の門番である私の名前は何でしょうか？」

ああっ……！？

第5話 メイドたちの沈黙 後編（後書き）

カリスマのレミアアって難しいですね。

第6話 魔女は一途に夢を見る

「はあぁ……」

人生に起こりうる幸運の内、三つぐらいは放出してしまったかもしれない特大の溜息と共に、アリス・マーガトロイドは憂鬱な気分を味わっていた。

その最たる理由は、彼女の視線の先の窓の外にあった。

「何時になつたら止んでくれるのかしら、この雨……」

雨。 飴ではなく、雨。 それがここ数日ずっと降り続けているのだから、いくらインドア派だと自負しているアリスであるのと、鬱陶しく感じるのは仕方が無いことだった。

洗濯物を気持ち良く干すことも、部屋の換気だって碌に出来やしない。

何より、アリスにとってのアイデンティティと言っても過言ではない、自作の人形たちにカビでも生えられては目も当てられない。アリスは今、幻想郷中の誰よりもこの雨が降り止むのを待ち望んでいるかもしれない。

季節は五月特有のカラツとした心地よさが消え去り、湿気と雨が支配する梅雨へと変わっていた。

しかも、今は日本列島を梅雨前線が絶賛通過中の為、この長雨は幻想郷であろうと避けられないことであった。

直情的な人妖の多い幻想郷では、鬱憤が溜まってこの長雨を払ってしまおうなどと考える者も少なくなかったが、アリスは特に何のアクションも起こしていない。

やろうと思えば出来ないこともないかもしれないが、それに見合

うだけのメリットは感じられないし、逆にどれだけの出費がかかるのかと考えるだけで頭が痛くなる。

それにこれは異変でも何でもなかったあの自然現象。自然と始まれば、自然と消えていくもの。誰かが手を加えるまでもないのだ。

では、どうやってこの長雨を乗り切ればいいのかと言つと、ひたすらに我慢してやり過ぎすしかない。

幸いにもアリスは魔法使いである。彼女の人生の殆どは魔法の研究・研究に充てられている。つまりは、雨が降ろうが槍が降ろうが彼女のやる事には変わりはないのだ。

なので、彼女はここ数日は家を出ることも寝食も碌に取ることもなく、机に嚙り付いていた。手先が器用な者は、集中力も長続きするものだ。

しかし、そんなアリスですら鬱陶しく思つのであるから、この年の梅雨は相当な曲者である。

「うーん、さすがにこれ以上は集中が続かないし、人形たちの整備も先週に終わらせたばかりだし……。何をしようかなあ……」

いくら集中力があるとしても限度がある。また、生来の几帳面がこの時ばかりは仇となり、彼女の暇を増やしてしまう結果となつてしまっていた。

暇は退屈を生み、また退屈は妖怪を殺す。物騒なサイクルだが、精神が力の源である妖怪には珍しい話ではない。だからこそ、彼等は祭り事が好きなのかもしれない。

アリスは妖怪ではなく魔法使いであるため、それほど死に頻するような事はないが、暇潰しぐらいはしたいと思つている。

こういつ時に限つて、あの騒がしい白黒魔法使いはやって来ない。お茶くらいは出してやってもいい気分なのだが、一向にその気配も無い。使えない奴だと理不尽に溜め息。

「……人形劇の練習でもしようかしら」

本格的にやる事が限られた中で、アリスが考え出した打開策がそれだった。というか、それしか思い浮かばなかった。

彼女の収入の内の何割かを占めているのが人形劇である。人里や寺で祭や縁日が行われる度に開いているのだが、これがなかなか受けが良い。

元々は人形を操る練習としての行いだったが、アリスも何だかんだで続けており、彼女の数少ない他人との交流の場と化していたりする。

しかし、そんな場だからこそ失敗はしたくない。

アリスは自分の人形操作に絶対の自信を持つてはいるが、世の中に絶対は無い。猿が木から落ちる様に、人形もアリスの手の内から落ちてしまいかもしれない。

それはきつとアリスの劇を楽しみにしている人の信頼を裏切るだろうし、何より、自身の人形使いとしてのプライドを貶めるだろう。そうならない為にも、何百何千と繰り返した動きを練習する必要があるのだ。

「じゃあ、まずは挨拶から……」

そう言ってアリスが指を微かに動かせば、柵から人形たちが彼女の下へ、スイツとやって来る。

まずは手始めとして、劇開始を告げる人形たちの挨拶からと意識を指先に向けるアリス。しかし、

「……？ 何かしら、今の音」

外から何か倒れる様な音が聞こえ、アリスは人形に向けていた意識を中断せざるをえなかった。

集中しようとしていたところに邪魔が入り、顔を顰めるアリス。しかし、よく見ると口元は弓の形を描いている。

まったく魔理沙め、来るのが遅すぎだと思いつつながら、アリスは玄関の方へと足を向ける。

大方この雨に足を取られて着地にでも失敗したのだろう。気遣いの出来る女であるアリスは、タオルを用意することも忘れない。

「魔理沙、家に入るのはいいけど、先ずは身体を拭いて……」

タオル片手に玄関扉を開けたアリスの視線の先に、件の白黒魔法使いの姿はなかった。代わりに、

「うう……」

「……誰？」

見知らぬ男が扉の前にうつ伏せに倒れていた。黒髪に着物と草履を身に付けた、如何にも幻想郷の住民であると分かる格好をしている。

長く雨に打たれたのか、頭先から下まですべ濡れで、そこそこ見れた顔も、今は死人の様に青白い。

しかし、幻想郷の住民であるのならここ魔法の森が危険である事は承知の筈。森中に胞子が舞っていて、人間どころか妖怪すら碌に踏み入れない場所なのだ。

そんな場所だというのに何故？ 無謀というか、馬鹿というか……。

「って、そんな事を考えてる場合じゃない！ 大丈夫っ!？」

アリスはいつもの様に冷静に状況を把握しようとする自分を叱咤し、倒れている男の上半身を抱え起こす。服が濡れてしまいが、そんな事を気にしている場合ではない。

幸いにも怪我は無く、息もしている。だが、毒性の強い孢子でも吸い込んで身体を悪くしているのかもしれない。事態によっては一刻を争う状況に変わってしまう。

「う、あっ……………」

「ほら、しっかりしなさいっ！」

「……………ら……………った……………」

「何？ よく聞き取れないわよ！」

男の口がアリスに何かを伝えるように動くが、小さ過ぎてよく聞き取れなかった。男の口元に耳を近付け、今度は意識を耳に集中させる。

途切れがちだった言葉が微かにだがアリスの耳に届く。その内容は、

「はら、へったあ……………」

「……………は？」

何とも気の抜けるものだった。そして、伝えるべき事は伝えただけに男は勝手に意識を手放し、アリスは暫し呆然としてしまった。

五秒ほど意識が明後日に飛んでいたアリスだったが、じんわりと濡れていく服の不快感によって帰還。そして腕の中で眠る男を見て、

溜め息と共に一言。

「はあ、また厄介な暇潰しがやって来てくれたものね……」

とりあえず、このまま一緒に濡れる訳にもいけないので、人形を二体操り、男を運ぶことにする。

されるがままに運ばれていく男に、まるでマリオネットみたいだな、と思うアリスだった。

#

これは夢なんだろうな、と浅い微睡みの中で俺はそう思った。

何せ俺の視点からは、鬱蒼とした森の中に、絵本や映画か何かに出てくる様なお菓子で出来た家があるからだった。

壁もドアも窓も屋根も煙突も、全てがお菓子。甘い物が苦手な人であれば、見ているだけでも胸焼けがしそうな存在感を放っている。夢は見る人の精神によって反映されるらしい。精神性が高ければ複雑な、逆に低ければ単純な夢として表れるのだとか。

では、絶賛こんなにファンシーな夢を見ている俺は一体どれ程の精神性を有しているのだろう。正直、大の男がこんな夢を見ていても気味が悪いだけだ。

そんな風に思っていると、唐突に凄まじい飢餓感が俺を襲った。いや、違う。忘れていただけで、飢餓感は常に俺と共にあった。

途端にふらつく自分の身体。殊更に重みを感じるのは、きつと疲れも相当に溜まっていたからだろう。

夢の中だというのに感覚は妙にリアルで、その癖に視線の先のフ
ァンタジー極まりない家が変わりは見られない。つくづくおかしな
夢だ。

飢餓を感じれば、食べ物を求めるのは当然の事。そして、俺の足
がお菓子の家に向かうのは、例え夢の中であろうと生物としてまた
当然の事であった。

レープクーヘンで造られた壁に、透き通った水飴製のガラス。屋
根はチョコレートで固められ、その上を色とりどりのフレークが装
飾している。

早く胃に収めると鳴く腹。それに応えようと進む足。しかし、そ
れを阻もうとする圧倒的な疲労感と飢餓感。

目と鼻の先にまで来たというのに、あと数歩が踏み出せない。待
てを食らうどころの話ではない。気が狂いそうな状況だ。

そして、ふらふらと揺れる身体は、遂に支えることを放棄して倒
れ込んだ。ご馳走を前にして食べられない。夢の中では珍しくもな
いのに、俺は心の底から絶望した。

そんな時だった。パイ生地で形作られた家の扉が開いたのは。

扉を開けたその人の姿を端的に言い表すならば、魔女だった。

古めかしいローブをその身に纏い、手には節樽立った杖を持ち、
如何にも俗世に興味無しという感じの鉤鼻をした老婆。これを魔女
と言わずに何と言っただろう。

お菓子の家に老獺な魔女。この組み合わせに頭の片隅である疑問
が生じたが、それを気にする余裕は夢の中の俺には無かった。

ただこの飢えを解消して欲しかった。その為なら、この魔女が何
者であろうと、何をされようとも構わないと本気で思っていた。

だから、俺は魔女へと精一杯に手を伸ばした。すると、

むにゅ。

俺の手に何とも言葉にし難い感触が返ってきた。それは柔らかいような固いような、しかし、絶妙な揉み心地を誇る何かだった。

一瞬、呆気にとられてしまう俺だったが、手のひらにほんのり伝わる温かさ、あまりの心地良さに飢えも忘れてしまう思いだった。

これは一体何だろうか。一度行ったことのある天界には、この世の物とは思えない様な物で溢れていたが、それに準ずる何かなのだろうか？

夢見心地でやわやわとそれを揉み続けていると、不動であった老婆に動きがあった。何故か、何故かその細い腕を振り上げていた。

どうしたのだろうか、とぼんやりとした思考の中でそれをただ見詰めているだけの俺。そんな愚かな男の疑問に、魔女は単純な行動をもって答えてくれた。

「ぶぐぶぐぶぐぶ！？」

すなわち、俺を夢の世界から叩き起こすという単純な行動をもつて。

「うっ、ごぼっ！　　がはっ！　　……な、何が!？」

天界気分を味わうのも束の間に、今度はまるで地獄の様な苦しみが俺を蝕んでいた。主に腹部を中心に。飢えの次は鈍痛である。

度重なる急展開と苦しみに、さすがに目を白黒せざるをえない。

「目は覚めたかしら、寝坊助さん？」

と、頭上から声が掛けられた。今になって気付いたのだが、俺は夢と違って仰向けに寝ていたらしい。

だから、声の主の顔を拝めた訳で。やはり夢とは違って、そこにいたのは魔女ではなく少女。それも、金髪の恐ろしく造形の整った少女だった。

「お、お陰様で……」

皺々の老婆から一転して美少女に変わるといふ、何処のマジックだと突っ込みたい思いを抑えて、俺は何とか返事をした。

それを聞いて少女は笑みを浮かべる。のだが、何故だろう、彼女からびしびしと威圧感が伝わってくるのは……。

「そうでしょうね。あれだけ好き勝手やってくれたんだから、さぞ良い夢を見せてのお目覚めなんでしょう」

「え、あ、いや……」

どうやら俺は何か少女の癢に触れる様なことをしてしまっただけらしい。

とはいえ、つい先程まで夢の中で飢えに瀕していた俺が、現実で何を仕出かしたかなど分かる筈もなく、口調に吃りが生じるばかり。会話の体を成さない俺に少女の視線は強まる。何故に彼女は痴漢の被害に遭った女子の様な目で俺を見るのだろうか？なまじ可愛らしいだけに、勝手に罪悪感が湧いてくるのだが……。

「……態とじゃないでしょうね？」

「へ、態と？ いや、うん、態となんかじゃないよ、まったくもって本当に、ばっちゃんの名に懸けて」

「ふーん……」

少女の口から事実確認の言葉が告げられるも、こちらはほとんど記憶に無い。

かといって、ここで否定してしまっただけは何やら途轍もなく拙い事になりそうなので、俺は馬鹿の一つ覚えの様に首を縦に振って肯定する。

痴漢被害の女子から、一転して白状を迫る取り調べ人の目になった少女は、俺の顔をじっと見詰めてきた。

それに対して俺は、見詰められて面白くも何ともないですよ、と胡散臭い笑みを浮かべて応戦する。

こんな状況でなければ、美少女とにらめっここという美味しいイベントなのになあ……。

「はあ、もういいわ……」

「あ、やった。俺のか……」

「何が、やった、なの？」

「何でもないよ、独り言」

少女が顔を反らしたことで、勝手に脳内でにらめっこしていると考えていた俺はつい口を滑らせてしまった。グリースでも塗ってあるんだろうか、この口は。

「まあ、あれだけ深く寝ていたんだから態とじゃないのは何となく分かってたけど……」

「分かっていたら聞く必要もなかったんじゃない？」

「……聞かなきゃ気が済まなかったのよ」

そう言ってそっぽを向く少女だったが、頬がほんのりと赤みがかっていた。はて、特に気障ったらしい台詞を言った覚えはないのだ

けれどなあ。

とか思っていると、俺の腹が地獄の釜でも開く様に盛大に鳴いた。ぴしりと身体が固まる俺に、少女は呆れた風の視線を投げ掛けてくる。

「そういえば、お腹が空いてたんだっけ？」

「俺はそんな事言っただけな？」

「倒れる前に言っただけど、覚えてない？」

「いや、全く。何でここで寝てたのかも分かってないし」

「ふー。それも話さないといけないのかあ……」

やれやれといった感じの表情を浮かべる少女に、また自分は他人に迷惑を掛けてしまったのかと、俺は軽く暗澹とした気分になった。そんな途端に荒みかける俺の心情を察したのか、少女は慌てた様子で話を続けてくれる。

「ああ、別に面倒とか思ってないから安心して！ どうせ食事ついでに話そうと思ってたし」

「本当に？」

「本当によ。こっちも雨で暇していたからね、ちょうどいい暇潰しになるわ」

俺を安心させる為なのか、多少ぎこちなくはあるものの微笑んでみせる少女。

さすがに美少女に微笑まれたからといってドギマギする程に初心ではない。だがまあ、頬が緩むのは仕方ないと思うのだ。俺も男だし。

そんな俺の弛んだ顔を少女はどうとったのかは分からないが、俺から少し距離を置いて、

「あ、じゃあ、私は食事の用意をしているから、あなたも準備ができたらかつちに来てちょうだい」

慌てた感じで部屋を出ていった。そんなに助平な顔をしていただろうか……。

さつきとは別の事で落ち込みそうになりながら、少女の言葉を思い出す。彼女は準備が出来次第来いとは言っていたが、

「これといって必要な物とか持ってないよなあ」

服も金もさあと多少の自虐を交えながら、ベッドから起き上がり、容姿を部屋に備えてあった姿見で一応チェックする。

寝起きだから髪は跳ねているが、押さえ付ければ大丈夫。弛んだ顔の筋肉もキリツと整える。最後に着ている洋服の皺を軽く伸ばして準備は完了した。

「おっし、行くか……ん？」

と、部屋の扉を開けようとしたところで、部屋の壁に掛けられたある物を見つけてしまった。

俺が着ていた筈の着物と下着である。

「んん？」

おや、何故に着ていた筈の服が干してあるんだろうか。それに俺は洋服の持ち合わせは無いのだけれどなあ。

となると、あれか。俺を介抱してくれた少女が、寢床を与えるついでに俺を着替えさせたと！

「ははっ……」

俺の口から乾いた笑いが漏れる。ははは、はははと垂れ流しである。

このまま口から魂までも抜けていかなないようにしなければの精神で押さえ付けながら、俺はふらふらと部屋を後にした。

#

「あら、もう動いても大丈夫なの？」

部屋を出ると、ぷんと鼻に良い香りが漂ってきた。すると、それに目敏く反応した腹が直ぐにまた地獄の番犬の如く唸りを上げ始める。

最早痛みにも近い空腹を抑え、所々に飾られている人形たちに見守られながら、俺は匂いの元であろう部屋の扉を開けた。

すると、そこにはさっきの少女の姿があり、俺に話し掛けてきた。返事をするのも億劫な程に腹が減っていたが、何も返さないのは失礼なので、何とか頷きだけはする。

「そう、ならいいんだけど。とりあえず、椅子にでも座ってて頂戴。もう少しで料理も出来るから」

少女はそう言い、俺はもう一度頷いて返してから食事用と思われる椅子に着き、そのままテーブルに突っ伏した。

限界だった。体力的ではなく、空腹的に。まさか、食べ物の匂いだけでこうまで削られてしまうとは思いもしなかった。着替えの恥

ずかしさなど、彼方に消え去ってしまった。

ここでお預けなどされようものなら、俺はこの場で首をかつ切るやもしれない。それ程までに飢えとは苦しいものなのだ実感させられる。

早く何か納めろ、と今にも外へ飛び出してしまいそうな胃袋と格闘すること数分。万事休すかと思われたところで、前方から今まで以上に強い香りが漂ってきた。

瞬間、弾かれた様に顔を上げる俺。少女が俺の奇行に目を大きくしていたり、その回りに小さな人形たちが浮いていたりするが、そんな些末事などどうでもよかった。

今はただ、その香りの源を食したいという想いだけで頭が一杯だ。

「え、えつと、料理が出来ただけど……」

分かってる。分かってるから、それを早く置いて欲しい。でない、君を押し倒してでも手に入れざるを得なくなるから。

「そ、そう。それじゃあ上海、器を置いてあげて……」

少女の回りを浮いていたり人形の一体が持っていた食器をテーブルに置いた瞬間、俺の手は飛燕の如くテーブルを舞った。

料理はどうやらシチューだったようで、俺の視界には乳白色のスープと銀色をしたスプーンが映る。

真っ先に俺の手はスプーンを掴み、間髪入れずにシチューの皿へと侵攻。そして、一滴も溢さぬように、且つ、出来るだけ早く口にした。

当然ながら、俺の口の中を猛烈な熱さが襲う。しかし、胃に食べ物を含め、何より、シチューがこれまた極上の味だった事で全く気にならなかった。

少女が慌てた風に大丈夫か、火傷していないかと尋ねてくるが問題無い。こんなに美味しい物を食べさせてもらっているのだから、問題なんてある筈がないじゃないか。

「そういう事じゃないんだけど……。おかわりはいる？」

さっきから困り顔の多いように思える少女に言われ、手元の皿を見ると既に空であった。

自分で食べておきながら言うのも何だが、自分の健啖振りに驚いた。そして、

「……はいはい。次はもうちょっと味わって食べてよ？」

おかわりの申し出には快く応えることにしよう。

しかし、少女の願いには残念ながら応えられそうにない。何故なら、こんな美味しい料理を前にして、匙をゆっくりと動かすような真似など俺には出来ないからだ。

ああ、おかわりがやって来た。また口の中を火傷するかもしれないが、どうせ直ぐに治るし気にしない。

今はただ、胃袋と舌を満足させる作業に勤しむとしよう。話はそれからだ。

あっちい……っ！！

#

「ふーん。茸狩りねえ……」
「そ、茸狩り」

食事というよりは摂取の様な時間を終えて、場は質疑応答へと移行していた。久し振りに腹が満ちたからか、俺の会話のテンポは軽い。

俺はどうして家にいたのかの経緯を尋ね、少女改めアリスはどうして俺が魔法の森をうろついていたのかを訪ねてきた。お互いに気になっていた事なので、無視の出来ない事項である。

さて、俺が魔法の森をうろついていた理由は、簡潔に言うと魚に飽きたからだ。

俺も一応は日本人、来る日も来る日も同じ食材と調理法では舌が満足しなくなってしまうのだ。

となると、何を食そうかと考えたのだが、いの一番に上がったのが、かつて師匠と食べた魔法の森の茸だった。

食事にはあまり頓着しない人だったので、所謂『あたり』を引くことも多かったが、クセのある味で酒の肴にはもってこいだったのを覚えている。

おまけに時期は雨季の真っ盛り、湿気で茸も豊作だろうと、俺は意気揚々と魔法の森に入り込んだ。

結果から言うと、確かに豊作だった。これでもかと言う程に豊作だった。いや、豊作が過ぎた。

俺が手製の竹籠一杯に多種多様の茸を詰めて歩いていると、ふと背中に重みを感じた。はて、茸の代わりに女に化けた狸でも入ったかと思えば、そこには茸を喰らう茸の姿があった。

わあ、共食いだと思える俺を尻目に、がっがつと着実に量を減らしていく化け茸。はっと意識を取り戻し、慌てて炎術で追い払うも中身は半分以下にまで減っていた。

多少は気落ちしたものの、食い物を奪われるのは幻想郷では茶飯事なので、まだ前向きでいられた。問題はその後にあった。

数分前に、良い焼き加減で追い払った化け茸が、その親玉と一杯の仲間を引き連れやってきたのである。

どんな生態系が出来上がっているのか、人の丈以上の肉食茸が蔓延っているのが魔法の森の現状だ。当然、俺は襲い掛かれた。

一転して捕食される側となってしまった俺。飛んで逃げようにも、ぴーぴーと声を上げながら、絶妙なコンビネーションでそれを阻む茸。茸の癖に妖怪よりも質が悪かった。

そうして、何度か身体の一部を食い千切られながらも何とか撃退すること数刻。そこには見事体力と靈力をギリギリまで使い果たした俺の姿があった。

何とか回復に努めようと竹籠の中身を漁るも、中はさっぱり空っぽで、疲労感と空腹感をより強いものにするだけだった。

魔法の森が胞子に溢れているのは知っていたので、常時簡易的な結界を張っていたのだが、それにも限度がある。

遂に結界が解け、徐々に胞子による幻覚が見え始めた頃、そこで俺はお菓子で出来た家を見つけて……。

「ああ、あの夢は続きだったのか」

「？ 何の話？」

「いや、夢の話」

勝手に一人で納得するのも何なので、アリスにも夢の内容を話してみた。

話の途中で彼女の顔が若干歪んだのは気のせいではないと思う。

まあ、夢の中とはいえ自分が老婆扱いされるのは女性なら気にするのは当然か。

それにしても、森の中をさ迷い、そこで偶然見つけた家の人に拾われるなんて、本当に童話みたいな話だ。これで、

「これでアリスが魔女だったらなあ……」

「魔女だったら何なの？」

「俺の気分は正にヘンゼルだなあ、つて」

「それは良かったわね、ヘンゼルさん？」

と、思っていたら本物だったらしい。

「魔女というか、魔法使いの方が正しいかしらね」

「でも、魔女でも間違いではないよな？」

「まあ、そうかしらね」

「うわあ。じゃあ、俺はアリスに食べられちゃうとか？」

「あなたは痩せ過ぎて美味しそうじゃないから却下」

「じゃあ、肥らせてから食べるんですね。フォグラか、俺は！」

「どうしてそう食べられたがるのよ。それと、わざわざ鴨を肥え太らせて食べるような手間、私ならしないわ」

「でも、この場にグレーテルがいなくてという事は既に……」

「どうしても私を食人趣味にしたいようねえ……」

そう言うアリスの口元が引くついていたので、冗談はこれくらいにしておこう。俺のグレーテルは多分、人里にいるだろうしな。

「んで、魔法使いのアリスはどんな魔法を使うんだ？ 前に逢った魔法使いはド派手に光線ぶっ放してたけど、アリスもあんな事が出来るのか？」

「あんなパワー馬鹿の白黒と一緒にしないで頂戴。私が扱う魔法はこれ」

そう言ってアリスが微かに指を動かしたかと思うと、キッチンの方から盆を抱えた人形が二体やって来た。盆の中身はティーセットとクッキーのようだ。

「へー、アリスは人形使いなのか。そういえば、さつきもアリスの周りを浮いてたなあ」

「ご明察。青い子が上海で、赤い子が蓬萊よ」

愛しげに人形の頭を撫でながら、自分の人形の名前を教えるアリス。何処と無くクールな雰囲気のアリスも、人形の事となると柔らかくなるのか。

相手は少女だというのに、思わずドキッとしてしまった。いや、ここは幻想郷だしアリスが年上でもおかしくないか。

「ん、どうかした？」

「いや、何でもない。それよりも、魔法って事はこの上海や蓬萊たちはアリスが操ってるのか？」

「そうよ。あんまり複雑な事は出来ないけど、家事程度ならこの子たちで十分事足りるわ」

「いや、家事程度って……」

今、紅茶を注いでいる上海や蓬萊の動きを見ていたらそれこそ何だってこなせてしまいそうだ。人形なのに熟練の技っばいのが見えるし。

あ、紅茶ありがとう。クッキーも美味しいです。

「疑うようで悪いけど、これ本当に操ってるのか？ 自律して動いているようにしか見えないんだけど……」

「よく言われるわね。でも、操っているのは本当よ。人形の自律化は、私の最終的な目標だけ」

「へえ……」

実際にアリスが魔力を可視化してくれたから分かったのだが、確かに人形の駆動部に細い糸が見え、それはアリスのそれぞれの指へと繋がっていた。

二体を動かしているだけでも凄いのだが、多い時は何十体も動かせるらしい。どういう風にするか聞いてはみたが、そこは企業秘密らしい。ケチだねえ。

「そうだ、ちょうど良い機会ね。砂子、あなたに私の人形使いとしての實力を見せてあげる」

とか思っていると、アリスの方から思いがけない言葉が。やばい、愚痴という名の電波が勝手に送信されちゃったとか？

「え、それって弾幕ごっここの事？ だったら、俺は勘弁して欲しいんだけど……」

「違う違う。今から人形劇の練習をするんだけど、それを見てもらいたいだけよ」

「ああ、そういう事なら全く問題無し。っていうか、是非見てみたい」

アリスの申し出を快く受け入れはしたものの、それが弾幕ごっこだった場合はそれこそ丁重にお断りしていたことだろう。

パターン作りだのああいっただ遊び心の必要な競技は昔から苦手だ。いくら非殺傷の弾幕とはいえ、痛いものは痛いしな。

大体、女の子がやってこそ弾幕ごっこは華がある訳で、そんな中を大の男が飛び回るなど華の回りを飛び交う蛇の様、つまり邪魔でしかないのだ。

そんな訳で、オトコノコな俺は弾幕ごっこよりもアリスの人形劇

の方が百倍興味があるのだった。

「そう言ってもらえるのは嬉しいけど、あんまり大したものじゃないかもしれないわよ？」

「いやー、大したものじゃなければ、普通は進んで人に見せようなんて思わないでしょ」

「……それもそうね」

呟くアリスの顔は若干赤い。大方、自分でも気付かない内に人形練りの技術に自信を持っていた事を恥ずかしく思っているとかそんなんだろう。

俺は別に良いと思う。自信が無ければ、技術は何処かで打ち止めになってしまうのだから。まあ、そこはアリスの性格だろう。

どうでもいいが、アリスは色白なので顔の赤味が分かり易い。性格といい、実にからかいがいのありそうな少女だ。可愛いねえ。

「こほん！ まあ、とにかく始めましょう」

「はいはい。拍手はいるかな？」

「ご自由にどうぞ」

「では、好きにさせていただきますませい」

ぱちぱちと俺一人の手を叩く音が部屋の中に響く。客は俺のみ、アリスを独り占め状態である。

しかし、アリスは既に集中しているのか俺の若干不躰な視線にも気付いた様子はない。嬉しいような、悲しいような……。

微妙に煩悶する俺の心境を余所に、アリスの人形劇は人形たちによる挨拶から始まった。

人形劇なんて見るのは初めてだったが、俺は一瞬にしてアリスの劇に惹き込まれた。

劇の内容は子供向けの分かり易いお話。上海や蓬莱、色んな動物を交えながらの遣り取りが進み、時折アリスが歌う様に台詞を紡いでいく。

アリスの指は本当に微かにしか動いてはいないのだが、人形たちは舞台を華麗に動き回っている。その動きは到底操られているとは思えない程に滑らかだ。

物語は序盤は和やかに、中盤からは時にハツとしてしまう様なシリアスを含み、終盤は劇らしく賑やかに終わりを迎える。

人形たちの軽快な動きとアリスの弾んだ声が、小さな舞台の上で踊っている。それは文字通り一人芝居なのだが、何とも言えない活気というか明るさに溢れていた。

本当に人形劇とは思えないクオリティで、人形劇というよりはまるで小さなミュージカルを見ているみたいといった気分だ。

気付けばあつという間に劇は終わっていて、アリスの人形たちがぺこりと可愛らしく頭を下げた。俺は恥ずかしげも無く、アリスへの称賛を拍手に込めた。

アリスは恥ずかしいのか単純に声を出し続けたからか、また頬を上気させながらも、俺に軽く笑みを返してくれた。

「どうだったかしら、私の人形劇は。目立った失敗は無かったと思うんだけど」

「素晴らしかった！ いや、本当にお世辞抜きで！ というか、失敗したところとかあったっけか？ 全く分からなかったんだけど」
「だから、目立たない様な失敗だったのよ。観客は気付かなくても失敗は失敗。点数にするなら、ざっと90点つてところかしら」

素人の俺から見れば、100点満点中の120点な上に花丸をあげたいくらいのレベルだったのだが……。

「厳しいねえ、職人気質ってやつ？」

「そうでもないんだけど。むしろ、普段なら90点なんて点数を自分あげたりしないと思う」

「というと？」

「あなたが見ていてくれたおかげかしらね。やっぱり観客がいるのといないのじゃ気合いの入り方も違うし」

「あ、さいですか」

そう言ってもらえるのはありがたいのだけれど、こうもストレートに言われると照れてしまう。

明後日の方向を見ながら頬を掻き掻き。視線だけアリスの方をやるも照れた様子無し。素で言ったのか、おれにはとてもできない。

「ふう、久し振りに練習なんてしたから疲れちゃった。紅茶を入れるけど、砂子もいる？」

「そうだな、いただきます」

何だかんだ劇に見入っていたおかげで喉が渴いてしまっていたので、紅茶のおかわりをいただくことにする。

アリスがテーブルに着いたので、俺もそれに従う形で彼女の対面に座る。紅茶は新しく入れに行くのは人形の役目らしい。

楽が出来て良いなあと思うも、結局はアリスが操っているのでもうでもないのかと思ひ直す。と、同時に一つ好奇心に引っ掛かるものがあった。

「なあ、アリス。質問があるんだけどさあ」

「何かしら？」

「疑ってる訳じゃないんだけど、本当にアリスの人形って自律してないのか？ さっきの劇の動きといい、紅茶も入れられるので、た

だの人形の動きとは思えないんだ」

今もそうだ。紅茶の準備をしている人形だが、その位置はアリスのほぼ真後ろなのだ。

アリスは魔法使いだからで片付ければそれで終わりなのだが、それでも全く目も向けずに人形に紅茶を入れさせるなんて芸当は出来るのだろうか。

だから、俺は思ったのだ。アリスの人形は、本当は自律した意志や思考を持っているんじゃないかと。

アリスは一瞬考える様な素振りを見せたものの、問題無いと判断したのか、俺の質問に答えてくれた。

「砂子の疑問は尤もだと思うけど、残念ながら私の人形は本当に普通の人形よ」

「あ、やっぱりそうなのか。疑う様な事を言ってごめ……」

「その言葉、待った。確かに私の人形はただの人形だけど、別に自律していない訳じゃないわ」

「へ？」

アリスの人形は何の変哲も無い普通の人形、なのに自律した動きをしていない訳ではない？ どういう事だ？

「訳が分からないって顔をしてるわね。答えは簡単、私は完全に自律した人形は作れていないけど、半自律化の域には達しているという事」

「半自律化？」

「そう。定期的に命令さえすれば、その通りの動きをしてくれるの」

「という事は、アリスの後ろにいる人形は……」

「紅茶を入れてくれ、っていう命令を打ち込んだ人形よ。だから、私が後ろを向いていようと準備をしてくれる訳」

そのアリスの言葉を裏付けるように、準備をしていた人形がティ―セツトを小さな身体で運んできた。

そのまま二人分の紅茶を注いでくれるのだが、これがまた香りが良い。きつと蒸すのにも最適な時間を調整しているのだろう。芸の細かいことだ。

何でも冬になれば人形たちに雪掻きまで任せているのだとか。そこまでいくと、ただのぐーたらではないかと思わなくもない。

とはいえ、それはやはりアリスの努力の賜物、認めざるを得ないだろう。どうにかして、一体ぐらい分けては貰えないだろうか？

「でも、それだけ便利な事が出来ても、完全な自律化を諦めようとは思わないんだな」

「まあね。逆にそこまで出来てしまったからこそ、止めようという気も起きなくなっただってのもあるわね」

「なるほどねえ」

「それに氷精が言うには、私の人形には心が詰まっているそうなの。心があるのなら、完全な自律化も夢じゃないと思わない？」

「心が、確かに……」

意外とアリスの夢が叶う日は近いのかもしれない。でも、それだと一つ問題が起きる可能性も考えられる。

「アリス、これはあくまで外の世界の、それもフィクションの話なんだけどな？」

「うん、何？」

「外の世界の物語の中にも、人形が心を持つ、っていうのは割とよくある事なんだ。切欠は人との触れ合いだったり、それこそ唐突であつたりするけど。」

それでな？ 心を手に入れた人形たちが、大抵まず初めに起こす

行動って何だと思う？ まあ、これはあくまで外の世界の架空の話の設定だけだよ」

アリスは俺の問いに目を瞑ってまで真剣に考えている。

その瞼の向こうには、結界を超えたアリスなりの外の世界のイメージが浮かんでいるのだろう。覗いてみたい気がしないでもない。

でも、アリスなら俺の期待する答えを見つけ出ししてくれるだろう。そして、案の定、

「あくまで、私なりに考えての事なんだけど……」

「いいよ、教えてくれ」

「おそらくは創造主への反抗、謀反かしら」

「その通り」

アリスは俺の期待に応え、答えてくれた。

「一流から二流の物語まで、心を手にした人形やロボットは人間に逆らうのが外の世界のお約束」

「でも、創造主であれば、自分に歯向かわないようにするのが普通じゃないの？」

「そこはあれだよ、心だの友情だのの不思議パワーが働いてだな……」

「アホらしい。心を持っておきながら初めに起こす行動が人間への逆逆だなんて、ゆとりが無さ過ぎるわ……」

口を尖らせながら紅茶に口をつけるアリス。拗ねているのだろうが、彼女の気持ちも分からなくもない。

「人間が物語を創っているからな。どうしても人間が上で、人形が下ってという法則が出来てしまう」

「人形たちからしたらいい迷惑でしょうね。人間の勝手に自我を持たされて、しかも人間の敵役を任されるんだから」

「必ずしもそうとは限らないけど。逆に、こういう発想も面白いとは思わないか？ 人形つてのは、字の如く『人の形』だろう？」

人と同じ姿をした者に倒されるかもしれない未来の可能性を物語に示して、もしもの時の人形に対する危機感を強めているのかもしれん」

とは言ったものの、邪推が過ぎた感は否めず。どこの三流シナリオライターの原稿だ、それ。

「そういえば、妖怪の賢者も似た様な事を言っていたわね……」
「ん？」

「人の形をした物には心が宿るって」

「あれの言う事だから、嘘か本当か判断し辛いなあ……」
「本当にね」

本人がいないのをいい事に、うんうんと頷き合う俺たち。アリスの頭にも、きつとあの胡散臭い笑みが浮かんでいることだろう。

「まあ、私も完全に自律した人形より、自分で操ったりする人形の方が便利と思わなくもないのよね」

「えっ、それじゃあ完全自律化の夢を諦めるって事か!？」

「それはさすがにないし、ちゃんと達成するつもりよ。ただ、達成したとしても、その人形は即お蔵入りするかも」

「何で、どうしてさ」

俺が今度は逆に聞き返す役に。もっと思考しなさいよ、といった顔でアリスは答えてくれた。

「砂子が言つてたじゃない。心、自我を持った人形は創造主に逆らうつて」

「いや、あれは物語の話だから。アリスがすっかりそこら辺を調整すれば、そんな事を起きないかもしれないじゃないか」

「起こさせる気は端から無いけど、別に反抗しなくても一緒だと思つて。自我を持つて事は、家の中を勝手に動き回る事でしょ？」

私が寝ていたら勝手に起こされるかもしれないし、時間も考えず下手な唄を歌うかもしれない。もしかしたら、同族である他の人形たちを傷付けるかもしれないのよ！？」

「冗談じゃないわ！ 私の人形を傷付けようものなら、即制裁よ！」

「待て待て。まず傷付けると決まった訳じゃないし、そいつも同じ人形である事を忘れてやるなよ」

「そつえば、私つてよく考えたら一人でいる方が気が楽なのよね。だったら、お蔵入りは決定事項ね」

「何もそう決め付けなくてもいいんじゃない……」

「ねえ、砂子。それだったら、喋らず文句も言わずに働いてくれるあの子たちの方が数倍マシだと思わない？」

「……ああ、そつだな」

アリスはもう俺の話など聞いておらず、一人で勝手に未来の生活を夢想していた。

俺はただ、後に生まれるかもしれない人形へと同情するばかりだった。

#

「あ、そうだ。アリス、突然で悪いんだけど、俺に魔法を教えてくださいませんか？」

「あなたは本当に突然何を言い出すの。大体、あなた色々と術を使えるんでしょ？ 何で今更魔法を習いたいなのよ」

「いや、ここに住む以上は最低限死なない努力をしようと思ってるさ。この前どつかの吸血鬼の妹に頼んだんだけど、断られちゃったんだよ」

「その妹に会う事態そのものが、死に行く様な事だとあなたは思わなかったの……？」

「ご尤も。でも、あれは強制イベント的な何かだったから仕方なかったんだなあ」

「まあ、私には被害が無いからどうでもいいんだけど。それよりも魔法ねえ……」

「やつぱり、アリスも駄目？」

「いえ、駄目って訳じゃないの。ただ、私の人形練りの技術は魔法という分野においてもかなり特殊だし、何より、自分の秘奥を軽々しく教えるのは魔法使いの流儀に反する訳。

私が砂子に教えられるとしたら、あくまでも基礎。それも魔法使いとして知っていて当選な事ばかりだけど、それでも良いと言うなら教えてあげる。どう？」

「いやいや、教えてもらえるのなら贅沢は言いませんよ。是非ともご教授願います」

「決意は固いつて訳ね。わかったわ、私で教えられる限りは教えてあげる」

「おおっ！ ありがとうござい……！」

「ただし！」

「ま、す……？ え、あの、アリスさん？ このテーブルに着々と積み上げられていくこの本たちは一体何でせうか？」

「砂子がこれから覚えていく魔法、その一端が書かれた書物のその

また一部よ。まあ、私のお下がりだけ。

魔法はね、習うも扱うも全ては知識の量で決まるの。知識を蓄える程に、私たち魔法使いは位階を高めていく。私の人形練りだって、本の知識を基に成っているのよ？

あなたも魔法使いの端くれに名を連ねる以上は、半端な知識じゃあ許さない。でも、安心して。私がつちり叩き込んであげる。教える以上はこつちもスパルタでいくから覚悟してね？

「……あい」

「それじゃあ、最初はこの本から始めましょうか」

「何か見たことない字で書かれてるんだけど？」

「大丈夫、初めは私が訳してあげるから。そこまで覚えるのは難しくないから、ある程度の段階で私抜きでも読むようになるのが今後の目標ね」

「なるほど、了解」

「うん。先ずはここからんだけど……」

「あっ」

「？ どうかした？」

「いや、何でそれを掛けているのかなって」

「ああ、気分よ気分。これ掛けてると何となく教える気が増すから」

「確かに知的に見えるしな。それに……」

「それに？」

「いや、何でもない」

「そーなの？」

「そーなんす」

ええ、魔法を習うのは大変そうだけど、眼鏡掛けたアリスが見れるなら良いかな、と思っただけですよ。

第6話 魔女は一途に夢を見る（後書き）

砂子は魔法（の基礎）を覚えた！

第7話 青猫の里（前書き）

オリキャラが出ます。

第7話 青猫の里

季節は初夏。次第に強くなる日差しと梅雨の残り香により、幻想郷全体を生温かく湿っぽい空気が漂っている。

「……でな？ その神社の巫女がまた酷いのよ。俺が持ってきた酒の栓をほとんど開けてくれてさー」
「なーっ」

とある場所のとある地面の上、そこで一人の着物を着た男が三毛猫を相手に話しこんでいた。

見ていて何とも寂しい絵面だが、両者共に気にした様子はない。回りに人氣が無いのが理由だろう。

それを良いことに男は猫に話を振り、猫は猫で絶妙なテンポで相槌を打っていた。

「いくら俺がお詫びで酒を用意したからって、そんなにぼんぼん開けられちゃあ困るってもんだよなー」

「んなー」

「あ、分かってくれる？ お前はイイ奴だなー」

「にゃー？」

そんな猫の反応が嬉しいのか、男は某巫女への愚痴の言葉を止めはしないものの、三毛猫の頭をかいぐりかいぐり撫で回す。

猫もされるがままに薄目を開けながら声を返す。それは何処となく疑問を含んだ様な声音であった。

「そう謙遜するなって。お前はイイ奴だ、俺が保証するから。だからな？ よければお前、俺の……」

「そこで何してるの？」

「うん？」

「んにゃ？」

男が三毛猫への言葉を続けようとした時だ。一人と一匹の後ろから声がした。

揃って目を向けた先には、一人の少女の姿。それも猫耳に尻尾、緑の帽子のオプション付きの少女である。

特殊な性癖の持ち主であれば垂涎ものの容姿をしているのだが、生憎と男にそんな性癖の持ち合わせは無かった様子。

これといったアクションを取るでもなく、淡々と返事をする。

「ん？ ああ、今はこいつとお話しついでにスカウト中なんだよ。既に他人様の式の子はお帰り下さいな」

「呼ばれた気がして飛び出てみたんだけど……」

「残念、俺はくしゃみも欠伸もしてないんだなあ。ほら、猫は猫らしくこの段ボールの中にお入り」

「んにゃー。やっぱり段ボールの中は落ち着、かないよっ！ 狭いわっ！」

「あれ？ おつかしいなあ、猫は段ボールが大好きな筈なのに……」

何処からともなく男が取り出した段ボールにちんまりと収まり、そして激昂する少女。見れば尻尾がピンと逆立っている。

男は少女のつれない反応に、カルシウムが足りていない、と呟きつつ首をしきりに傾げた。余程、自分の行動に自信があったと見える。

まあ、基本的に猫は狭い所が好きな生き物だから、少女の様に入らない猫がいる事に疑問を抱くのは仕方がない。

そんな二人を尻目に三毛猫は、入らないのなら私がお邪魔しますよ、といった感じですっぱりと段ボールの中に収まった。

「にゃう、ぐるるる……」
「あ！ あんた、何で入って……！」
「ほら、やっぱり。猫は段ボール好きなんだろ？ 無理しないでいいんだって」
「私を普通の猫扱いするなー！ 私は広い方が好きだもんっ！」
「とか言って、広い部屋に一人だったりすると落ち着かないんだろ？ そうだろうっ？」
「ううっ、……馬鹿にして、馬鹿にしてえ！！」
「いや、馬鹿にはしてないぞ？ 遊んでるだけ」
「あ、ああ……、うにゃーっ！！」
「ちよ、爪をいきなり伸ばして何を、って、ぎゃあああっ！？」
「ふぎやおっ！？」

ここはマヨヒガ、人妖迷いて辿る猫の里。この日は珍しく猫以外の悲鳴が里中に響き渡ったとか何とか……。

#

「いててっ……。あー、もう痛かったなあ……」
「ふんっ！ 自業自得、身から出た蚤のみよ！」
「錆ね、錆。考えただけで身体が痒いったらありゃしない」
「知らないわよ、そんな事」
「まあ、人間に蚤はあんまり湧かないから気にしないんだけど……」

「な、何？」

「痛かったなあ……」

「いや、それは……」

「とても痛かったなあ……」

「だから、それはお兄さんの……」

「すつつつごく痛かったなあっ！！」

「あう……、ご、ごめんなさい」

「あい、許します」

さて、ここマヨヒガにやって来ていた俺なのだが、猫と戯れるついでにちよいと他人様の式をからかっていたら、顔に大きな爪の跡をこさえてしまった。

とりあえず、痛かったので無理にでも謝らせてみた。短気は損気、一時の感情に身を任せると後が面倒だと教える為でもある。

まあ、元凶であるお前が言うな、と言われればそれまでだけど。

「私の仲間を誑かしたのはお兄さんなのに……」

「人聞きの悪い事を言わないでくれ。あくまで勧誘、スカウトだよ。つて、そういえば、橙と会うのは久し振りだねえ」

そう言いながら、俺は目の前の少女にして式神、橙の頭を帽子越しに撫でる。彼女の素体は化け猫である。手の甲に当たる耳の毛の感触が実に心地好い。

この子は身も心もまだまだ幼いが、実は幻想郷の有力者の式の式という、凄いのか凄くないのか、でもとりあえず凄そうなポジションにいる妖怪だったりする。

それでも本人に威厳がこれっぽっちも無いので、俺みたいな奴には今みたいによくからかわれたり、子供扱いされ易い。

「またそうやって話を逸らす……」

「いやいや、一体何の事だろう」

「……いいけどね、お兄さんがそんな人間だつてのは知ってるから……」

少しづーたれた顔で俺に不平を漏らす橙。さすがに話の逸らしが強引だったかと思ひ、お詫びではないがとりあえず、今度は彼女の頭をぼんぼんしておく。

俺に子供なんていないのだけれども、何故だか無性に父性を感じさせてくれる子なのだ。

「あー、橙のご主人様は元気にしてるか？」

「それはどっちのご主人様？」

「よく働く方のご主人様」

「えーと、藍様なら最近はこちらとお疲れ気味だけど、元気にしてる」

「そうか、それは良かった」

「うん。来る日も来る日も紫様に扱き使われて心身共にへろへろ状態だけど、私を抱き締めれば疲れがふっ飛んで元気が出る、って言うてたから」

「ちよつと待つてくれ、橙。藍さんは本当に元気なんだよな？ 空元気とかじゃないよな？」

「大丈夫よ。私と話す時はいつも元気な声だし、私がいる時の藍様の働きっぷりつたら凄いんだもの！」

それはあれじゃないだろうか。単に自分の式神の前で無様な姿は見せられない的な感じ。人はそれを空元気という。

「ちなみに、藍さんの休みつてどれくらいあるんだ？」

「へ、藍様のお休み？ んーと、えーと………、あれ？」

「よし、橙の反応を見てよく分かった。俺は藍さんのご主人様と

一回話し合わないといけないみたいだな」

「あ、で、でも……！」

「でも、何だ？」

「この前に藍様、『今日は良い日だ、久し振りに朝日が昇るまで眠れた』って言ってた！」

「そうか、それは良い事を聞いた。尚更あの女と話し合う必要が出来たってもんだ」

「あれえ！？」

紫様に怒られる、と橙は恐慌に陥っているが、別に彼女は悪くはないし、もしもの時は俺がフォローするつもりだ。そう、悪いのは全てあのスキマ妖怪なのだ。

年がら年中、自分の式を酷使しおってからの。俺が何度、藍さんの愚痴に付き合っただと思っっているんだか。

扱き使うのもそうだが、文々。新聞のバックナンバーを見た限りでは、過去に虐待の疑いもあったそう。とんだ主人がいたものがある。

同じ苦労人仲間として、俺は藍さんを見捨てる様な真似は出来ない。あの女に直談判でもして、彼女の雇用環境の改善を図るとしよう。

とは意気込んでみるものの、俺の話などのりくらりと躲されてしまうのは目に見えている。どうにか策は思い付かないだろうか……。

「うーむ……」

「何か考えてるみたいだけど、紫様に口で勝つのは無理だと思う」

「あ、やっぱり？」

たかが二十と数年を生きただけの若造が、年齢不詳の大妖怪を相手に舌戦を繰り広げるにはやはり無理があるか。

#

「ふうーっ……」

「えっと、落ち着いた？」

「ん、何とか。ごめんな、お茶ばかりかお昼までご馳走してもらって」

「別に、私もお腹が減ってたからついでよ」

時間は今から大体一刻ほど前に遡る。

一時的に錯乱状態に陥ってしまった俺であったが、橙によってマヨヒガの屋敷に入れられ、熱い緑茶を流し込まれた事で何とか回復出来た。舌は大火傷したけど……。

まあ、何はともあれ、橙のお陰で正気を取り戻した俺だったが、一度の恐慌が過ぎ去ると、次にやって来たのは空腹だった。

実を言うと、この日は（も！）まだ何も口にしていなかった。普段は気合いで我慢しているのだが、どうやらお茶を胃に収めた事で無駄に活性化してしまったらしい。

恥ずかし気も無く盛大に鳴る腹。そして、子供の前で腹を鳴らした事に羞恥を覚える俺。同じ身体だというのに、どうしてこうも協調性が無いのか不思議でならなかった。

そんな年甲斐も無く腹を鳴らす男を橙はどう思ったのか、おもむるに台所に立ち、包丁を振るい始めたのだった。

正直、橙が台所に立つ事に不安を覚えた俺であったが、意外や意外、橙は手慣れた感じで調理を進めていった。

聞けば、主人（間違つても主人の主人ではない）の手伝いをして
いる内に覚えたのだと言う。成程、全体的に油揚げが多いのはそ
ういう事かと俺は納得した。

次々に並べられていく和食のオンパレードを前にして俺は思った。
ああ、白米を口にするなど何時振りだろう、と。

気付けば何時ぞやの焼き増しの様に、俺は出された食事を米粒一
つ、油揚げの一欠片さえも残さず平らげた。橙の呆気に取られた顔
がまた可愛らしかったという事を付け加えておこう。

そして、食後は匂いに釣られた猫たちと戯れたり、橙と二人での
んびりとお茶を啜ったり。

そんな経緯を得て、時間は今へと至る。

「それで今更だけど、お兄さんがマヨヒガにいたのは何で？」

「え、言つてなかつたっけ？」

「言つてない。聞こうとする前にお兄さんが話をはぐらかして、お
まけに勝手に錯乱したんじゃない」

「そうだったっけ？ んー、じゃあ、橙の手料理を食べに来たんだ
よ」

「じゃあつて何さ。あんまり適当な事言つと、もう作つてあげない」

「それは勘弁。嘘です、嘘」

あと、吐け吐け言いながら腹を蹴るのも止めてくれ。今の腹具合
だと上と下、どちらから出るか分かつたもんじゃないのよ。

「まあ、本当の事を言つと、寝惚けてたら何時の間やらここにいた
「へ？ 寝惚けてた？」

「そう、寝惚けてた。ただ顔を洗いに川の方へ歩いていただけなん
だけだなあ」

前日は山の麓にある家（勿論、ボロ屋。無縁塚のは別荘）で夜を過ごしたのだが、はつきりと目を覚ました時には、山を登ってマヨヒガに辿り着いてしまっていた。

戻ろうにも元来た方向も分からず、空腹でどうも空を飛ぶ気も失せてしまった。

そして、情けないやら阿呆らしいやらで、何かもうどうでも良くなった果てに、猫と会話するという現実逃避に走った訳だ。

「いやいや、寝惚けてたで済ませられる事じゃないよ。私以外の山の妖怪に襲われちゃってたらどうするつもりだったの？」

あと、空腹くらい我慢して飛ぼうよ、お兄さん。飛ばない人間なんて、ただの人間じゃない」

「うん、それが普通なだけだな」

俺が豚さん顔の煙草と口髭が似合うダンディーなら話は違うんだろうが、生憎と俺は煙草は吸わないし、髭と言っても無精髭だ。

ダンディーにも限り無く程遠いので、俺が無理に飛ばなくても問題は無いのだ。うむ、論破。

「いや、そこはほら、効率？ の問題だから……」

「とはいえ、このままだと話は平行線。そこで、俺がこんな顔になれば問題無いだろう？」

「う、うにゃーっ！？ お兄さんの顔が、葉巻と口髭が似合うダンディーな豚顔になってるーっ！？」

「あれ、俺ってもしかして貶されてね？ とにかく、これで俺はもう人間とは言えないよな？」

「そ、そうだけど……」

「飛ぶ必要も無いよな？」

「うぐぐっ、そうだけど……！」

納得がいけないという想いをありありと浮かべる橙に、苦笑しながら種明かしをする。

「ぬはは、冗談だよ」

「あれ、顔が元に戻って……？ ああっ！ もしかして、変化の術！？」

「そういう事。これくらい見破れないと、化け猫の名前が泣いちゃうぞ？」

「くう……」

悔しそうな橙の顔を見て、ちよつと満足な下衆の俺。いやね、からかい甲斐のある子相手だと、どうも悪い癖が出てしまう。

そんな風に心中で満足と戒めを噛み締めていると、橙がこんな事を言ってきた。

「だって……」

「ん？ だって、何だ？」

「私の知り合いに似てたんだもん……」

「何だってえ！？」

い、いるのか？ あのニヒルでクールな飛行機乗りが？

架空の存在とはいえ、ここは幻想郷。何がいるかなんて分かったもんじゃない。だとしても、早過ぎる感は否めないが……。

「ちなみに、どんな姿をしてるんだ？」

「えっと、何時もコートを着て、頭には帽子を載せて……」

「ふむふむ」

「顔は勿論、豚ね。それで、黒いサングラスと髭を付けてて、煙草ばっかり吸ってるの」

「うむむっ……」

「ここまで格好や容姿は完全に合致。もしや、本当に……。」

「あ、あと空は飛べない」

「飛べないのかよっ!!」

と思っていたら、これである。

そこは飛んでいて欲しかった。真に勝手だが、夢を粉微塵に壊されてしまった気分だ。

「最近になって幻想入りしたらしいんだけど、外の世界の『あにめ』っていうのにハマってたらしいの。」

口癖もあって、何か出来ない事があるとすぐ『飛ばねえ俺はただの豚だ』って言うの「

「バカッ！」

何か格好良い事言って誤魔化そうとでもしてるのかもしれないが、単に自分を貶めてるだけではないか。

次に何処かで豚顔のコスプレ野郎を見掛けたら、尻を蹴り飛ばしなくても空を飛べる様にしてやろう。先ずはその曲がった性根の矯正が先かもしれないが……。

「まあ、とにかく。お兄さんは人間なんだから、一人でふらふら歩かない事。いい？」

「ん、ああ、はい。善処します」

「何か返事が適当に聞こえるけど？」

「いや、まったく違う事を考えてたから。……何であんな話になっただんだっけ？」

「知らないよ。多分、お兄さんのせいでしょう？」

橙に言われ、そんな馬鹿なと記憶を辿ってみれば、確かに俺のせいであつた。行動だけでなく、言動までふらふらしている俺である。これじゃあ、どっちが大人でどっちが子供だか分かったもんじゃ
ない。

「ま、まあ、それは置いておくとしてだ」

「それを置いておいたら、お兄さんの為にならない気がするんだけど……」

「子供は大人の事なんか気にしなくても良いんだよ」

「子供である前に、妖怪の私に心配されてるって事がおかしいと思
わない？」

「……橙、もしかして、俺の事が好き？」

「ふっ」

「普通……。普通かあ……」

いや、何を残念がっているんだろうか俺は。

出会った子が無条件に自分に好意を持っている、なんて思春期特有の妄想を抱いた記憶は遙か昔だというのに。

大体、万が一にでも橙に、その、好きだなんて言われたとしても困るだろう。いや、人間的にとかなら問題は無いんだが、額面通り
だった場合。

『マヨヒガに謎の惨殺死体！』とか『他人の式に手を出す変質者
現る！』なんて、文々。新聞の一面を飾る様な事態にだけはなりた
くはない。

むしろ、僥倖だったとすら思っても良いかもしれない。

「やっぱり、人間の男一人つてのが駄目だと思つた」

「あー、まあ、確かに生活がルーズになりがちなのは自覚してる」

「でしょう？ だから、さっさと適当な人間の女でも捕まえて、懇
ろになつて、家庭を築くのが一番よー！」

心中で安堵を味わっている俺を他所に、橙は薄い胸を張り、ドヤ顔でそう言い切った。

ふむ、確かに橙の言う事は尤もである。所帯を持てば、普段からふらふらしている俺も一ヶ所に留まらざるを得なくなるだろう。

しかし、まさかそんな事を橙に言われるとは思わなかった。シヨツクというよりも困惑しつ放した。

彼女も俺の知らない所で色々と男を知り、大人に成りつつあるという事か。……何故だろう、背中に寒気が止まらない。滅多な事を考えるものではないな。

だがまあ、橙には悪いが、俺はまだ所帯を持つ気は更々無い。

先の長いと思われる俺の人生、探すのなら、出来るだけ長い目で良い人を見付けたい者である。先ず、持てるかどうかも未定であるのだし。

それに、だ。

「橙。悪いけど、俺は所帯を持つ気は今のところ無いよ」

「えー？」

「その代わり……」

「その代わり？」

「……式神を持つのかな、と思っている」

妻や子を持つより、今、俺が一番欲しているのは自分の式神である。先日、アリスの人形たちを見て思った事だ。

他人の物を見て欲しがるなど、理由は子供のそれであるが、今の俺には所帯よりはよっぽど魅力的に思えてならない。

対価さえ払えば働いてくれるし、何より話し相手になってくれるというのが大きい。

「え、式神って……。お兄さん、式神の術まで使えるの!？」
「おう、一応な」

橙が驚くのも分からなくはないが、俺は一応、式神使役の術も修めていたりする。

というのも、俺は少しの間、人里に身を置いていた時期があり、護身の為に妖怪退治屋に弟子入りして陰陽術を齧っていた。式神についてもそこで教わっているのだ。

と言っても、期間自体は短かったので、そこまで深く学ぶ事は出来なかったのだけけれど。

「へー。人間の割りに、お兄さんは結構凄いのね」
「いやー、どうだろうなあ……」

大した実力も無い癖に、半端に色んな術を修めている辺り、我ながら実に節操が無いと言うか情けないと言っか……。

実力不足を補う為には、どうしても器用貧乏になるしかなかった訳だ。

実際口に出しはしたものの、過去に軽く手解きしてもらった程度の知識で式神の使役が満足に出来るのか、不安は尽きない。

「でも、私はまだ式を持てるだけの力は無いよ?」

「え、そうなのか?」

軽く何時もの自虐的思考を進めっていると、橙から意外な言葉を聞いた。

「うん。私も自分の式が欲しいとは思ってるんだけど、実力とか風格が無いらしくて、式神候補の猫たちは全然従ってくれないの。藍様も私にはまだ式を持つのは早いって教えてくれないしね……」

「あー……」

気落ちしながらの橙の言葉に、失礼ながら俺は納得してしまった。さつきも何匹か猫が集まってきたのだが、橙のご飯を狙ったり、肌を引っ掻いたりと、どう見ても彼女が猫たちを纏め上げている風には思えなかった。

むしろ、さつき見た傷有りの大層ふてぶてしい雄猫の方が、よっぽど風格があったやもしれない。

「お兄さんにも分かるだろうけど、私はまだ未熟なの」
「……うん」

ここは何となく同意すべきだと思い、頷きを一つ。

「だから、私よりも先に式神の使役が出来るお兄さんが羨ましいし、妬ましいし……」

橙は一瞬目を伏せた。しかし、次の瞬間には少しはにかんだ顔で言葉を続ける。

「でも、応援したいな、って思うの。同じ式を持ちたいと思う者としてね」

「橙……」

この子は、何て良く出来た式だろうか。

普通、自分に出来ない事をして見せる者が目の前にいれば、少なからず嫉妬を覚えるものだ。それが格下である人間なら尚更である。

橙は自分で言った様に、俺に嫉妬を覚えた筈だ。その度合いは覚でなく、また精神分析の心得なども無い俺には計り知れない。

だというのに、彼女はそれでも俺を応援すると言ったのけたのだ。想いを共にする仲間故にと。

かつて、あの女は橙を『バグだらけの式』と称した。確かに、彼女は八雲の名を背負うには程遠い、未熟で欠陥だらけの式であるかもしれない。

だが、否、しかし！今の俺には誰よりも最上の、それこそ俺の理想とする式の姿が橙に重なっていた。

「だから、ね？ 頑張って式を作ろうよ、お兄さん！」

「ああ、そうだな……」

「そうだよっ！」

本当は目の前にいる少女を式に迎え入れたいところだが、生憎と彼女はご主人様から溺愛されている様なので、諦めるとしよう。

しかし、こつも激励されて心が動かされない程に俺は落ちぶれてもいない。やってみようと、その想いが俺の心中に溢れていた。

失敗したって構わない。それは成功の母と成るものであるし、情けない姿など幾度となく晒してきたきたのだから。

何より、仲間の期待には応えるのが常識だろう。

「橙」

「ん、何？ お兄さん？」

だから、俺は橙に伝えなくてはならない。

「俺に……」

この心からの願いを……！

「俺に里の猫を譲って下さいっ!!」
「断る」

家の中だというのに、何故だか冷たい空気がぴゅーっと流れた気がした。思わず窓を見遣る。……うむ、窓はぴっちり閉まってる様子。

はて、と思いながら橙に視線を戻すと、彼女は先程と変わらず天真爛漫といった笑顔を浮かべている。

思わずこちらの頬も緩んでしまう幸せな笑顔である。その小さく可愛い気のある顔を見詰めながら、俺は頭に浮かんだ言葉をはっきりと口にする。

数瞬前に聞こえた言葉は、俺の滑舌の悪さ故であるっと思ったから。

「俺に、里の猫を、譲って下さい!」
「断る」

……はて、またもや室内に季節外れの冷風が……。

「いや、お兄さん。いい加減に現実逃避がくだいよ? やるなら一回、おーけー?」
「あい」

橙からNGを頂いたので、俺の僅かな現実逃避タイムは終了を迎えた。今から始まるのは、怒濤の追及タイムである。

「ちょ、ちょ、ちょーっと待ってくれ。え、何？ どういう事！？俺の耳が急にイカれたとか脳味噌が蟹味噌に変異しちゃったとか？ 橙に断るって言われたぞー！？」

「その通りだよ、お兄さん。だから、蟹味噌なお兄さんの脳味噌を食べさせてね？」

「ちよっと待って、どうしてそうなるの？」

「猫は須らく海産物が好きなんだよ？」

「海の味なんて知らない癖にどの舌が……、こら、何で俺に群がりやがりますかお前らは。俺は蟹の味なんてしない、あ？ 『これは嘘を吐いている味』？ 喧しいわっ！」

嘘なんて吐いてないから離れんか、この馬鹿猫共。カムバック、蟹味噌じゃない俺の脳よ……！

「そう、お兄さんは嘘を吐いてたんだ。嘘吐きは泥棒の始まり。マヨヒガは貴重品だから、嘘吐きで泥棒見習いなお兄さんにはお帰り願います」

「ええっ！？ 嘘なんて吐いてないよ！ 俺のはちゃんとピンク色をした脳味噌が詰まってるって！！」

「えー？」

「何なら舐めるか？ 蟹の風味なんて欠片もしないからっ！」

「ふーっ。嘘吐きで泥棒見習いで、しかも自分の身体を舐めさせる変態さんだったんだ、お兄さん……」

「ぐあっ、墓穴掘った……！ くっ、何と言われようが俺は帰らんからなっ！」

「とりあえず、変態で犯罪者なお兄さんはお帰り願いますにゃん」
「てめっ、橙！ 何でも語尾に『にゃん』を付ければ男が従うと思

うなよ!？」

「ちょっとキュンときたのは内緒だけどさ! とうか、俺のグレードがマイナス方面にアップしてないか？」

「じゃあ、代わりにこのお櫃ひつをあげるから諦めてよ」

「おいおい、橙。俺の意志の固さを嘗めてないか? 物に何かで簡単に釣られるような俺では……」

「お米がどんどん湧いてくる特別製のお櫃だけど?」

「ちよつと考えさせてくれ」

忘れていた。マヨヒガにはそんな夢の様な物で溢れているんだ。マヨヒガのマヨヒガたる所以である。

しかし、米の湧くお櫃か。常時、空きっ腹を(嫌々)維持し続けている俺には実に魅力的な一品だ。

さて、どうしようか……って、答えなど最初から決まっているか。考えさせてと言いながら、須臾の時間ほども必要なかった。

「決まった」

「決まったって、全然考えてる風には見えなかったけど?」

「そりゃあ、須臾の時を感じとれるなんて月のお姫様くらいだろうからなあ」

次点で紅魔のメイド長か。元々、時間は感じるものではないのだが、何事も例外は存在するものだ。

「それで、このお櫃を受けとる?」

「いいや、受け取らない」

「どうして? お兄さんは何時もご飯に困ってるんじゃないか? 何があれば、最低でもご飯は食べれるんだよ?」

俺の目の前に差し出された一見何の変哲も無く、しかし、明らかに不思議な力を備えているのが分かる米櫃。

これがあれば橙の言う通り、ご飯は食べられ、飢えに苦しむ日々からは解放されるだろう。

しかし、である。

「それよりは、橙の式神候補の中から俺に一匹譲って欲しいな」

「断る、って私は二度も言ったよね？ 三回目はさすがに出禁ものだよ？」

「マヨヒガって基本的に二度とは来れないもんだろう。それならこの機会に食い下がって貰い受けていくまでだ」

「うつつ、面倒臭い人間……」

本当にそう思っているといった風に顔を歪める橙。俺の、いや、人間のしつこさ加減を嘗めていたというのがよく分かる表情だ。

基本的に人間よりも優れている妖怪なら仕方のない事なのかもしれない。

「さあ、橙よ。俺はお前が折れるまでここにいろぞ！」

「ヤクザ並みに性質が悪い人間っているんだね。自覚してる？」

「自覚はしてるが、俺よりよっぽど性質の悪い人間なら何人か知ってる。俺なんてまだ可愛いもんだ」

「ああ、私にも何人か心当たりがあるかも……」

そう言ってさらに眉間の皺を深める橙。折角可愛い顔をしているのだから、将来に跡が残らない事を願うばかりだ。

「はーっ。……諦める気は？」

「無いっ！」

「むー……。何でお兄さんはうちの猫たちにそんなに拘るの？」
「猫たちって言うか、実は譲って貰いたい猫は決まっているんだけど。そうだなあ……………」

橙の当たり前と言えば当たり前の問いに、しばし頭の中で言葉の取捨選択を行い、俺は答えを口にする。

「そいつが何となく気に入ったからじゃ駄目かな？」

「いや、理由になってないでしょう、それじゃあ」

「でも、本当にそんな感じなんだよ。大した理由は思い浮かばないけど、こいつじゃないと駄目みたいな感じ」

日々を過ごしている内に何度あるかは分からないが、そういう事があるのは事実だ。

他人からすれば何でもないものが、自分にとっては何故だか掛け替えのないものに思えて仕方がなかったりする。

それを他の言葉に言い換えれば、運命であったり、俗っぽくはあるが一目惚れだったりだろうか。

つまりは、俺もその猫に運命や共鳴するものを感じたという訳だから、俺は徹底して身を引かないのである。

「よく分からないけど、お兄さんはどうしてもその子じゃないと駄目って言うのね」

「いや、橙の物分りの良さにお兄さん感動ですよ」

「白々しい。まあ、お兄さんのその態度を見れば式を悪くする様な事はないんだろうけど……………」

「お、じゃあ……………！」

「まだよ！ まだ私はお兄さんにうちの子を譲る気は無いんだからっ！」

これはいけるかという雰囲気は漂いかけたのだが、橙の一言で霧消してしまった。

自分に懐かないとはいっても、やはり愛着はあるのだろう。橙は尻尾を逆立ててまで俺を威嚇してくる。

予想していた事ではあるが、これは中々に難敵である。

「じゃあ、どうやったら俺は譲って貰えるんだ？」

「ふん、簡単よ！」

俺の問いを吹き飛ばすかの様に、橙は荒い声でその条件を提示した。

「私と勝負して、もし勝てばその子を譲ってあげてもいいわ！」

「えー……」

橙の提示してきた内容、それは何ともお約束の様な条件だった。

『うちの子が欲しければ、俺を倒していきな！』みたいな、実に頑固親父的発想である。

……見た目は可憐な少女そのままのだけれど、どうしてそんな発想に至ったのやら。

しかし、困った。何が困ったかと言えば、当然ながら勝負についてである。

橙は勝負とだけ言って、その内容を告げてはいない。つまり、その勝負の方法が分からないのだ。

幻想郷において揉め事が発生した場合に用いられる解決方法と言えば、ご存じ弾幕ごっこである。おそらくはこの勝負もそれが採用されるのだろう。

だが、この勝負で弾幕ごっこを採用されてしまえば、まず俺に勝ち目は無くなってしまう。何度も言うが、俺は弾幕ごっこが苦手な

のである。

そうなれば、俺が式を得る権利は当然無くなってしまふ訳で、最も望まない展開が出来上がってしまう。

では、弾幕ごっこではなく、直接的な戦闘で勝負をするのはどうだろうか。

普通の戦闘であれば俺も妖怪と相対した時の心得があるので、相手が橙となると弾幕ごっこよりは確実に善戦する事は可能だろう。

当の橙も興奮状態の為、提案さえすれば案外あっさりこの勝負方法を受け入れてくれるかもしれない。

だが、残念ながらこれにも問題は存在する。

直接的な戦闘を行うとなれば、弾幕ごっこのように非殺傷なんて便利な機能は無い。となると、当然の事ながらお互いに傷つけ合う事になる。

……それはお互いに痛い思いをしなければならぬ上に、俺が橙を攻撃するなんて事は出来る限り避けたいので受け入れられない。

では、弾幕ごっこかと言われれば、俺の敗北はほぼ必然。

では、やはり戦闘かと言われれば、言わずもがな却下だ。

では、では、では、………如何すればいい？

簡単だ。どちらも傷付かず、かつ穩便に勝負を決める方法を取れば良いだけの事。

「勝負の方法は……」

今まさに告げられようとする橙の言葉の中へ、俺は第三の選択肢を滑り込ませるのだ。

「橙」

「つて、何、お兄さん？ 今更になって怖気づいたとか？」

「そういう訳じゃない。俺からも一つ提案があるんだ」

「お兄さんから？」

その一言だけで思い切り怪訝そうな表情を浮かべる橙。随分と警戒されたものである。

幼気な少女に警戒されるといふ不名誉な経験に落ち込みながら、俺は提案という名の交渉に打って出る。

「橙、ここは一つ、これで手を打たないか？」

「う、これは……！」

俺の手には例によって自分でも中身をあまり把握していないあの袋。

そして、そこから取り出されたるは猫科全般に絶大な効果を齎す魔性の実。

「マ、マタタビ！？」

そう、マタタビ。別名、木天蓼もくてんりょうである。

猫にマタタビという諺があるように、マタタビは猫にとって鬼門であり、同時に至上の快楽を与える麻薬に等しい。

俺はこのマタタビを武器に橙と交渉し、勝負を流そうという腹積もりなのだ。要は袖の下である。

勝負事に賄賂は自分でもナンセンスだとは思うが、これなら俺も橙も傷付かないし、マタタビは麻薬と違って害が無いので、この交

渉はかなりクリーンなのだ。

あとは橙が折れてくれるだけなのだが、

「ぬぐぐうつ……!」

揺らいでいる。物凄く揺らいでいる。

橙は式なのでマタタビ程度では反応しないかと思っただが、ちゃんと猫の本能を忘れてはいなかったようだ。

「なあ、橙。戦うなんてやめよう。お互いに傷付くだけじゃないか。ほら、マタタビの匂いでも嗅いでゆつくりしようや」

「誰が、買収なんて、されるもんかあ……」

ほう、本能に抗うか。流石にそこは式、普通の猫とは違うらしい。しかし、そういう頑なな態度を取られるとつい崩してしまいたくなるのが俺の悪い性。揺さ振りを掛けていくとしようか。

「んー。じゃあ、橙はマタタビをいらないうって言うんだな？」

「いら、ない……」

「本当に？」

「本当にい、いらないうってば……。私はマタタビなんかじゃ屈しないんだから、ね……」

「そっか、なら仕方ない。交渉は決裂だな」

「分かったなら、私と勝負、して……」

「じゃあ、このマタタビは勿体無いから他の猫たちにあげるとしよう」

「……え？」

途端にぼかんとした表情になる橙。俺はそんな彼女をあえて無視して、先程から足元にゃーにゃー五月蠅い猫たちに話し掛ける。

「ほーら、お前たちの大好きなマタタビだぞー」

『にゃーにゃー！ じろじろっ！』

「押さない押さない、ちゃんと皆の分あるから」

『にゃうっ！ ぐるるるっ！』

「いいかー？ お前たちがこんな風にマタタビに有り付けるのは、
橙が譲ってくれたからだ。皆、感謝しろよー」

『にゃーにゃー』

一声鳴いたかと思えば、一斉に猫背を正して橙へ向かって礼をする猫たち。実はこれ、凄い珍しい光景なのかもしれない。

当の橙はと言えば、猫たちに感謝された事を喜ぶべきか、自分も他の猫たちと一緒にマタタビを楽しむべきかで悶々としている様子。そりゃあ、目の前で他の猫たちがぐでぐでんに酔っ払うくらいにマタタビを味わっているのに、自分だけ楽しめないのだからこうもなるだろう。

こうなってしまうえば、後はもう一押しである。俺は片手にマタタビ持ち、それを橙の顔の前に翳しながら、彼女に話し掛ける。

「じゃあ、橙。勝負の方法について話し合おうか」

「……へ？ あ、うん。えと、勝負の方法はその……、えと……」
「弾幕ごっこ？」

「そ、そう、弾幕ごっこで……、その、あつ……」

「どうかしたのか、橙？ 顔が赤いぞ？ 風邪か？」

「えと、違っ、その……、マタタビが……」

「マタタビが、どうかしたのか？」

「マタ、タビ……。うっうっ……」

もはや橙は、目に涙さえ浮かべている。その表情が実にこう、そ
るのである。

ちょっと抑える事の出来ない程の嗜虐心を感じながら、俺は神の
一手を投じた。

「おっと！ 指が滑った！」

わざとらしい演技と棒読みの台詞と共に、俺は持っていたマタタ
ビを離れた。

幻想郷であろうと、ほんの一部を除いて適用される重力に従い、
マタタビは下へ下へと落ちていく。

このままではマタタビは地面に落ちてしまうのは必定。だが、俺
が落ち行くマタタビを拾うつもりは一切無い。

何故なら当然、

「私の、マタタビいいいいっ!!」

目の前の少女が取ると確信していたから。

まるで鳥が横から餌を搔っ攫うかの様な速さでマタタビを掴み取
った橙。

マタタビが地面に落ちなかった事に安堵したかと思うと、早速そ
の匂いを嗅いで他の猫と同じ様な恍惚顔を浮かべた。

落ちた、と俺は内心でほくそ笑みながら、意識が若干飛んでいる
橙に話し掛けた。

「橙、橙？」

「はにゃー……、はっ！ な、何かな、お兄さん!？」

「いや、俺が持ってたマタタビ、橙が落ちる前に取ってくれただろ

う？ お礼を言わなきゃと思ってさ」

「そ、そんな事？ 私は猫だもん、マタタビの危機なら何時だって全力よ！」

「そうかそうか。でも、一応は言わせてくれよ？ ありがとう」

「あ、うん。どういたしまして」

ここまででは和やかに。そして、一気に突き落とす。

「じゃあ、そのマタタビを返してもらえるか？」

「……………へ？」

「いや、そのマタタビ、橙も知ってる通り俺のでしょう？ 返してもらいたいなあって」

「そ、それは……………」

「ん？ 返してくれないの？」

既にマタタビの効能にやられている橙に対してのこの問い。俺の手にマタタビが返ってくる確率は一体何パーセントあるだろうか。

俺の予想としては、博麗の巫女が年上に対して敬意を持つぐらいの確率と考えている。

「あ、でも、これは私が取って……………」

「そうだな。その事に関しては、感謝してるけど、俺に返してこない理由にはならないよな？」

「そ、そうだけど……………」

「もしかして、それが欲しいのか？」

「へう……………」

分かり切った事であるというのにあえて聞く辺り、俺は本当に性格が悪いのかもしれない。

橙は尻尾を股の間に挟み、もじもじしている。何か鼻血が出そう

だ。

「いや、橙が欲しいって言うのならあげない事もないぞ?」

「本当に!?!」

俺の言葉に喜色を満面に浮かべる橙。だが、現実はその甘くはない。

「ただし、それを受け取った時点で、勝負は俺の勝ちとさせてもらうけどな」

「そんな!?! ずるいつ!」

「ずるくない。そのマタビの価値はそれだけあるという事だし、嫌なら受け取らなければいい」

「うぐっ……」

等価交換、それは遥か昔から現代に至るまで適用されている最も合理的かつ残酷な概念だ。

「さあ、橙。お前はどっちを取る?」

マタビか、それとも勝利か。

橙は悩んでいる。それはもう頭から湯気でも出るんじゃないかってくらい。

おそらくは橙の生涯でも五指に入るくらいの熟考ではないかと勝手に推測してみる。

なかなか答えを出せずにいる橙であったが、切欠を与えたのは意外な存在であった。

おもむろに橙に近づく存在があり、そいつは例の首領猫然としたあの雄猫だった。

ふらふらと酔っ払いの様な足取りで橙の足元に辿り着き、また新社員を飲み誘う上司の様な気さくさで一声鳴いた。

『なあ、一緒に酔おうや』と。

「……っ、」

「っ?」

「連れて行きたきゃ連れてけ泥棒おおっ!!!」

遂に橙の理性を欲望が上回った瞬間だった。

叫んだすぐその後、橙はくんかくんかすーはーすーはーと猛烈な勢いでマタタビを嗅ぎ出した。

相当我慢していたのだろう、その姿には鬼気すら感じてしまう程だ。

さて、結果的に橙は仲間を売ってしまった事になるのだが、俺は彼女を責めるつもりなどは毛頭無い。

元が動物という理性の薄い生き物であるというのに、仲間の為に驚異的な忍耐力を見せた橙は賞賛に値するというものだ。

大体、話を提案したのも条件付けしたのも俺であるのだから、本来責められるべきは先ず俺なのである。俺が橙を非難するなど、お門違いも甚だしい。

「ふにゃーん……」

「あー、お取り込み中申し訳無いんだけど、俺が譲り受けるって事で問題無いよな?」

「あにゃー、わらしはもうにゃにもいえにゃいけど、もんらいはほんにんしだいじゃにゃいー?」

「む、それを忘れていた」

「にゅふふ、ふられにゃければいいねー?」

口調も身体もふにゃふにゃになってしまった橙に言われて初めて気付いた。

橙が許してくれたとはいえ、当の本人もとい本猫が俺の式に必ずなってくれるとは限らないのだ。

そんな当たり前の事を失念してしまっていたとは、俺も本当に抜けている。だって、

「大丈夫さ」

「どうしてー？」

「何となく」

「またそれー？」

「またそれ。あいつと俺は似た物同士なんだよ、きつと。なあ？」

「んにゃ？」

あいつが俺を拒絶するなんて欠片も思っていなかったんだから。

俺と橙が視線を向けた先には、一匹の猫の姿があった。俺の愚痴を聞いてくれた、あの三毛猫だ。

その猫の身体は傷が多い。片方の耳の先は欠けている。

その猫の身体は肉が薄い。腹には骨がうっすら浮き出ている。

その猫の回りは誰も寄り付かない。まるで忌避しているかの様に。その猫は、明らかにどの猫よりも浮いていた。

「え、おにいしゃんがつれていきたいこって……」

「うん、こいつだよ」

「でも、このこは、その……」

「ああ、別に話さなくてもいいよ。聞くにしても、こいつの口から直接の方が良いから」

「しよ、しよ……」

俺が譲って欲しかった猫が分かった途端、橙は動揺を浮かべた。橙の反応を見れば間違い無く訳有りなのだろうが、俺が気にする事はない。

どんな理由があるにせよ、『その程度』の事で諦める俺ではない。人間という生き物の例に漏れず、俺はしつこく執念深いのだ。

「ほら、そんな所に一人でいないでこっちにおいで」

「……なうー」

「怖がらなくて良いから。ほら」

マタタビをばら撒いた時にも遠巻きに見ているだけだったその猫は、呼んでもなかなか寄って来ようとしない。

おそらく普段から日陰で生きる事を良しとしていた所為で、日向へ出る事に抵抗を感じているのだろう。

その姿は酷く孤独で弱々しく、だからこそ俺は共感を感じざるを得ない。

「そうだ、頑張ったな」

「にゃう……」

びくびくと回りの目を気にしながら、何とか俺の元まで辿り着いた三毛猫。

俺は膝を屈め、労いの言葉と共にその小さな頭に手を置く。橙の耳と同じく、毛の感触が心地良い。

「なあ、お前。俺の式にならないか？」

そして、単刀直入に本題へと入る。後ろで橙が息を飲む気配がしたが、この場は無視する。

「俺は今、式を必要としていてな？ 最近はずっとその候補を探して回ってたんだ。」

でも、なかなか自分の式にしたいって思う奴がいなくてさ。この通り、今日まで式神無し状態だった訳。

だけど、お前を初めて見て思ったんだよ。こいつこそが自分の式に相応しいって。

何様だっと思うよなあ？ でも、俺は本気でお前を式に迎え入れたいと思ってる」

たとえ相手が猫であろうと、自分の式になってくれるかもしれない存在を蔑ろになど出来ない。

俺はしっかりと相手の瞳を見据え、三毛猫も確かな知性を感じさせる視線を返してくる。

俺の気持ちは、きつと伝わっている。何故なら、こいつと俺は何処か似た者同士。伝わらない筈が無いのだ。

「俺の式に、なってくれないか？」

今度は少し謙へりくだった言い方でもう一度。それが功を奏したのかは分からないが、

「……にゃー」

「そうか、ありがとうな」

屈めた俺の膝の上に、三毛猫の小さな前足が乗せられた。了承の合図である。

後ろから今度は大きな溜息が聞こえた。何だかんだ言って、心配はしてくれていたようだ。

「じゃあ早速だけど、契約の儀式に入る。俺は素人も同然だから失敗するかもしれんが、よろしく頼む」

「にゃうっ！」

「よし、なら始めるぞ。少しピリツとするけど、動くなよ？」

— 先ずの合意が出来たとはいえ、さっきので終わりではない。今から行う契約の儀式、それが完了して初めて主従の関係は築かれるのだ。

俺は懐から一枚の紙を取り出した。この儀式の時の為に作っていた、式神の媒体となる呪符である。

人型に形どられた呪符の全体には、一寸の隙間無く術式の構成を司る文字が描かれている。ちなみに、呪符の形が人型なのは、これを貼る事で対象を人化させる事が可能だからである。

人化をすれば、人語を介する事も出来るようになるし、四足よりも二足で働いてくれる方が何かとこちらも都合が良いからだ。

そう、これを貼れば人化が可能となり、契約も行えるのだが、

「頼む、頼む……！」

もしも、この呪符に致命的な欠陥でもあれば、人化を行う事は勿論、契約すら出来なくなってしまう。

細心の注意を払ってはいるものの、何処でどんなミスが起こるか分からない。最悪、三毛猫を殺してしまう結果になるかもしれない。失敗は決して許されない。自分の為、何より、自分に身を委ねてくれたこいつの為に……。

「ああっ……！」

湧き上がる不安を掻き消す様に、裂帛の気合いと共に、俺は呪符を三毛猫の額に押し当てた。

瞬間、空間に電気が奔り、近くにいた他の猫たちが悲鳴を上げる。人化の術式が発動した証拠だ。

部屋の中だというのに辺りに風が逆巻き、俺と橙の服が大きくはためく。パリパリと断続的に響く音とドクドクという自分の心臓の音の二つが、俺の耳を刺激し続けている。

時間にしてほんの数秒なのだろうが、俺にはその一秒一秒が途轍もなく長く感じてしまう。

そして、俺が自分の鼓膜と心臓に不安を感じ始めたその時、

ドンッ!!

一際大きな音と共に、部屋の中に白い煙が上がった。

「ま、さか……!!」

俺の背中を冷たいものが流れた。

まさか、あれだけ念入りに準備をしたというのに、本当に失敗してしまったのか？ 憑けた式神も低鬼という安全仕様だったというのに？

いや、それよりも先にあいつだ！ あいつは無事でいて……。

「あ……」

「どうした!？」

「あれ……」

「あれ?」

沸騰しかける頭に橙の音が響き、釣られる様に彼女の声の先を辿った。そして、そこには……、

「お、おおおっ……!？」

視界を覆う煙が晴れた先、そこには一人の子供の姿があった。

傷痕の痛々しい白い肌、乱れに乱れた茶髪、そして、思わず吸い込まれてしまいそうな光を湛える黒目。

ハッと振り返ってしまいそうな容姿をしたその子供は、

「男の子おおおおおっ!？」

「い、いけめえん……」

そう、男の子だった。

しかも、外の世界で歩けば某事務所に即スカウトされること間違い無しの甘いマスク持ち。これに猫の耳と尻尾が生えているのだから、破壊力が三割増しだ。

ちなみに、前者の叫び声が俺。後者の呆然とした声が橙である。これは仕方のない事だろう。

だって、玉の有無など確認していなかったし、幻想郷の式なら女の子が普通とか思い込んでたし、まさかここまで格好良い子に成るとは思わなかったし、何より、

「成功、してたのかあ……」

こうまで完璧に術式が発動するとは思わなかったのだ。目の前に現れた美少年、彼の正体はあの三毛猫だ。

身体に組み込まれた術式の構成を読み取っても、九割五分が正常に機能。残りの五分も誤差の範囲内なので、十分過ぎる結果だ。

俺の術式が優れていたのか、単に式神との相性が良かったのか。

まあ、常識的に考えて後者が妥当な線だろう。

「大丈夫か？」

「……は、はい」

「あつと、もう話せるのか？」

「はっ、会話の方に支障は御座いません」

「そ、そうか……」

式としての機能に問題は無いかの確認を取ろうとしたただけなのが、まさかこの時点で会話が成立するとは思わなかった。

やはり、よつぼど式神との相性が良かったと見える。にしても、何故にこうも堅苦しい口調なんだろうか。これがギャップという奴か。

「ん、式神も馴染んだみたいだし、契約の本番と行こうか」

「了解に御座います」

「……その口調は地なのか？」

「は？ 地とは？」

「いや、何でもない」

どうやら口調は地らしい。別に矯正するつもりはないのだが。

まあ、それは置いておくとして契約だ。と言っても、重要なのは内容の確認である。

「さて、式として働いてもらう内容なんだが、基本的には俺の手伝いをしてもらいたい」

「手伝いで御座いますか？」

「おう。食材の調達だったり料理や洗濯、偶に少し面倒な事を頼むかもしれない。仕事の手順なんかはちゃんと教えるから、出来るだけ一回で覚えて欲しい」

「はっ！」

まだ慣れない身体であるうちに、ぴっしりと背筋を伸ばして返事をしてくれる。

仕事の内容は極めて地味なのだが、それでもやる気を出してくれているのは嬉しい事だ。

「それで、仕事の報酬なんだけどな……」

「ほ、報酬ですか！？」

「ん、どうかしたか？」

「い、いえ、報酬を頂けるなど思っていませんでした故……」

「いやいや、当然の事だろう」

自分の為に働いてくれているのなら、相応の報酬を払うのは当たり前の事。そこら辺を疎かにして離れられても困るしなあ。

「とりあえず、手に入った食糧は折半な。寝る所も一応はあるから安心してくれ。一月毎の給料はマタビ十個でどうだ？」

「も、勿体無き待遇で御座います！」

何か凄く恐縮されてしまっているが、俺としてはこの程度の報酬しか与えられなくて申し訳無いくらいだ。

俺の生活にもう少し余裕が出来たら、その時はしっかりと応えてあげるとしよう。

「あとは……」

「ま、まだ何かあるので御座いますか？」

「ああ、大事な事だ」

そう、初対面の時は特にな。

「お前に俺の式としての名を与える。そうだなあ……………、みどり。うん、お前の名前は今日から天辰みどりだ」
「天辰、みどり……………」
「そして、今日からお前の主人となる俺の名前は、天辰砂子だ。よろしくな」

差し出した手は、神速の速さで握り返された。

「はいっ！ 不肖みどり、誠心誠意仕えさせて頂きます！」

この日、遂に俺の式が出来た。

#

「ねえ、これ食べて！ 私が作った自信作なの！ 食べるでしょう？ 食べてくれるよね!？」

「あ、はい、橙様。ありがたく頂戴致します」

「味わって食べてね！ ねえ、どう？ 美味しい？ 美味しいよね!？」

「あ、はい。とても美味しゅうございます」

「良かったー！ お代わり沢山あるから、どんどん食べてね！」

「主様あ……………」

テーブルを挟んだ向かい側、そこには式神二人による何とも形容し難い空間が出来上がっていた。些か一方的ではあるが、実に近付き辛い。

おっさんと呼ばれる日がそう遠くない俺からすれば、結界でも張ってあるんじゃないかと思うくらいに拒絶感を感じる訳で。

勿論、俺が入る隙間など一分もある筈が無く、こうやって向かいからその光景を見る事しか出来ないのだ。俺はご主人様なだけだなあ……………」。

そしてその空間から、その気の持ち主であれば一発で昇天するか射止めてしまうであろう流し目と共に、情けない声で助けを求めてくる超絶美少年なみどり。

恐ろしく庇護欲を誘うその顔を見詰めながら、俺は慈愛の笑みを浮かべて言った。

「耐えろ、みどり」

「主様ーっ!？」

俺はそれだけ言って食卓に背を向け、橙の自信作とやらをもそもそ食べる。

なるほど、自分で自信作と謳うだけあって味は中々のものだ。だが、何故だろう。どうしてこつも口の中がしょっぱいのか。

ん、俺が食べている姿を見て他の猫たちが寄ってきたようだ。どうだ、お前らも食うか？ 美味いぞ？

……………何だ、どうしてそんな劣し気に俺の手を舐めるんだ？ やめる、やめてくれよ……………。別に悲しくも何ともないのに悲しくなるじゃないか……………。

同情するくらいならお金をくれよなあ、切実によお……………。

「ほらほら、お代わりお代わり！」

「いえ、私はもう腹が一杯でして……」

「何を言ってるんの、こんなにガリガリの身体して！ もっとぶっくらしなきゃわた……、女の子の好みに合わないんだから！ あ、お兄さんはお代わりは一回だけだからね？」

「あ、主様っ！ お助けをおおっ！？」

「ご主人様は世話を私に任せるとさ。何なら私があーんとか、く口移しとかあげても、いいんだよ？」

「主様ああああ……っ！」

俺はもう何も見ない、聞かない、言わない。

世の中やっぱり顔で決まるのだなとしみじみ思いながら、馬耳東風の諺を体現したかの如く、俺はひたすらに箸のみを動かすのであった。

第7話 青猫の里（後書き）

あえてのシヨタっ子でいります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1695x/>

銀朱の幻想郷

2011年12月26日01時53分発行